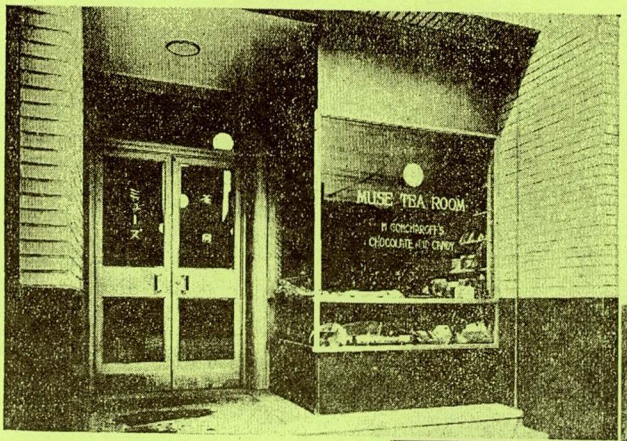
第十八輯・第四號・昭和十年四月一日

大正六年九月十四日第三種郵便物認可 ・ 昭和十年三月二十五日印刷納本 ・ 昭和十年四月一日發行（毎月一回一日發行）

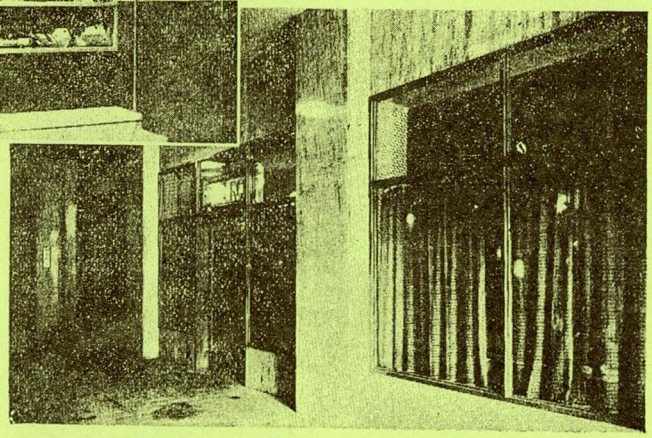
日本建築協會

法隆寺

昭和修理



弊社納入ノ第二野村ビル（喫茶店入口）



弊社納入ノ第二野村ビル喫茶店スクリーン

製品種目

瀬川式特許スチールサツシ
瀬川式特許スチールドアー
瀬川式特許スチールシヤター
瀬川式スチールパーチシヨン
瀬川式特殊高級鋼製建具
並ブロンズドアー及メールシユート
其他一般的建築金物類

朝日建材株式會社大阪支店

大阪市東區高麗橋二丁目九番地（高麗橋野村ビル内）
電話本局（23）4714・4715・5226（4）

本　社　東京市麹町區丸ノ内二丁目二番地（丸ノ内ビル内）
電話丸ノ内（23）679・876

工　場　東京市城東區北砂町三丁目一二番地
電話本所（73）5979・1821

出張所　名古屋市中區南大津町一丁目九ノ二（共濟ビル内）
電話中 2776・2777

會　　告

アスファルトに關する研究會開催に付協會員の隨意參加希望の件

今回本協會材料委員會に於てアスファルトに關し專門家を加へ意見の交換會を下記の通開催致しますから協會員各位の隨意御參加の上研究談を御洩し下さることを希望いたします。（追て夕食は準備いたして居りまんせから御諒承を願ひます）

時　　4月10日(水)午後正6時開會―9時閉會

所　　建築倶樂部（北區中之島朝日ビル4階）

× × × ×

五　版

市街地建築物法令改訂版刊行

本書は六大都市施行細則その他關係命令を蒐め昭和8年刊行第四版を出し暫く絶版中のものであつたが今回同法及施行規則・施行細則の一部或は全部が改正發令されたのでこれを機會に改訂して第五版として刊行したものである。

定價は一部50錢、郵送料は6錢、その他體裁等は前版通りである。御希望の向は丸善本支店、柳々堂書店或は本會事務所まで申込んで戴きたい。

昭和10年3月

社團法人　日本建築協會

建築と社會

第18輯第4號　昭和10年4月發行

法隆寺

目　次

法隆寺修理寫眞及圖版 …… (1/65)

法隆寺問題の今昔 …… 伊東忠太 (23)

法隆寺の大修理計畫 …… 武田五一 (27)

法隆寺の建築——其の燒失論爭に就て …… 濱田青陵 (30)

法隆寺式伽藍配置に就て …… 藤島亥治郎 (35)

法隆寺食堂所用材料に就て …… 大瀧正雄 (41)

飛鳥建築の特色 …… 藤原義一 (48)

東院禮堂の建築に就て …… 淺野清 (54)

法隆寺食堂及細殿の構造 …… 杉山信三 (60)

市街地建築物法並に關係命令の改正に就て …… 玉置豐次郎 (85)

市街地建築物法施行細則（大阪府）の改正に就て …… 松井清之助 (91)

市街地建築物法施行細則（京都府）の改正に就て …… 板井公威 (98)

市街地建築物法施行細則（兵庫縣）の改正に就て …… 本田林八 (100)

新建築紹介 …… (69)

國際新建築集 …… (75)

アスファルト防水施工に關する研究 …… 日本建築協會材料委員會 (104)

時　報 …… (105)

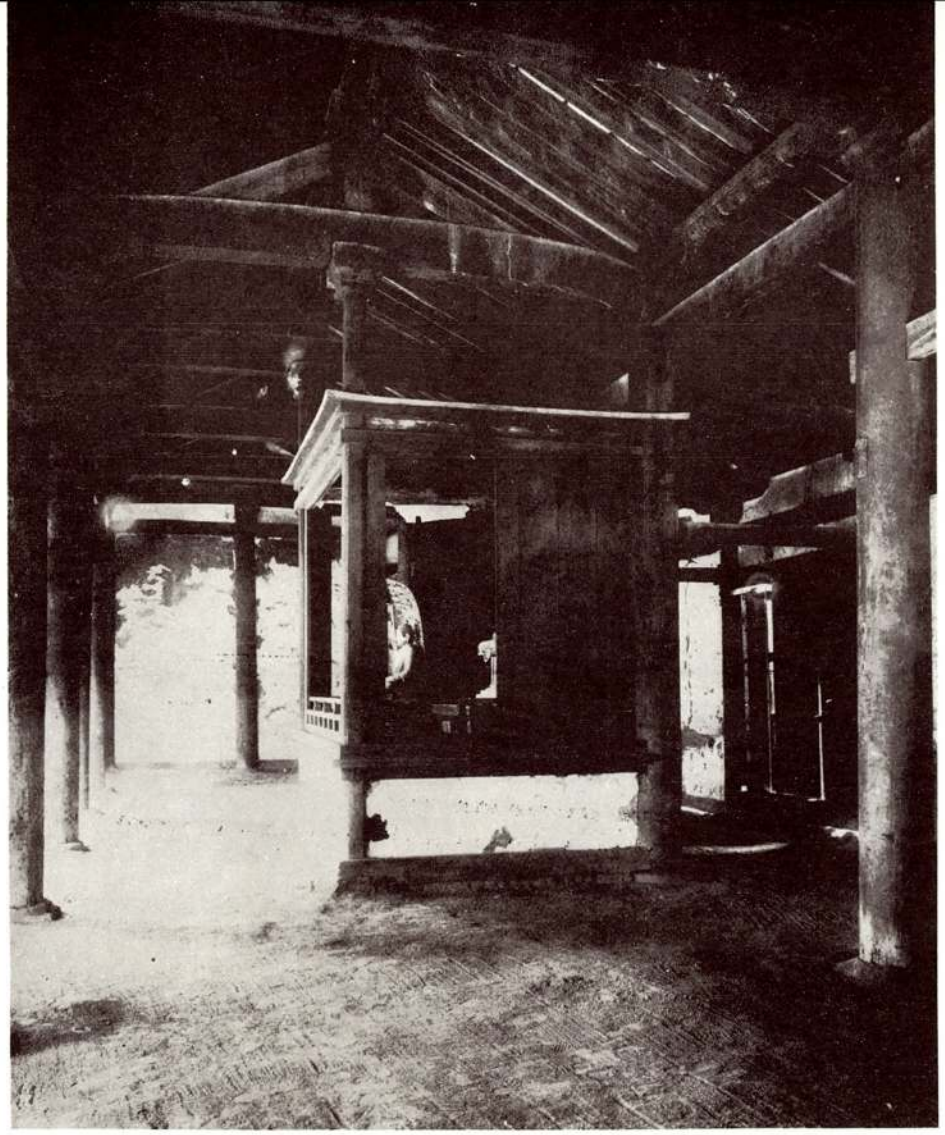
會　報 …… (108)



1. 食堂修理前正面影
食堂は奈良時代の建立になる建物で是に鎌倉時代の大修補が加はり正面の扉や窓等は全く此の時のものである、破風や軒先等は桃山、江戸の修理が加はつて著しく亂れてゐた

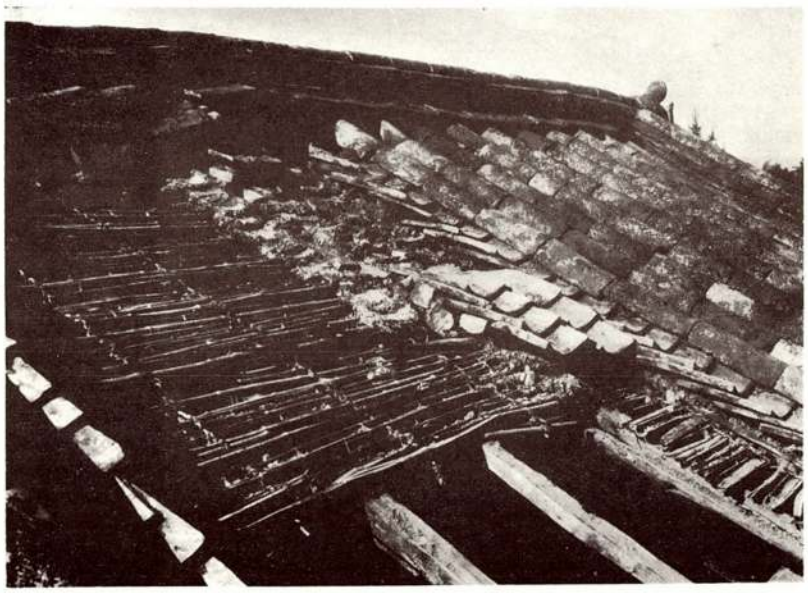


2. 食堂修理前背面影
正面には細殿があり背面にはすぐ土塀があつて食堂の外影は其の妻だけが大望出來るに過ぎないのであつたが、是は其の背面土塀を修理のため取り去つた時の姿である、大破してゐた有様がよくわかる



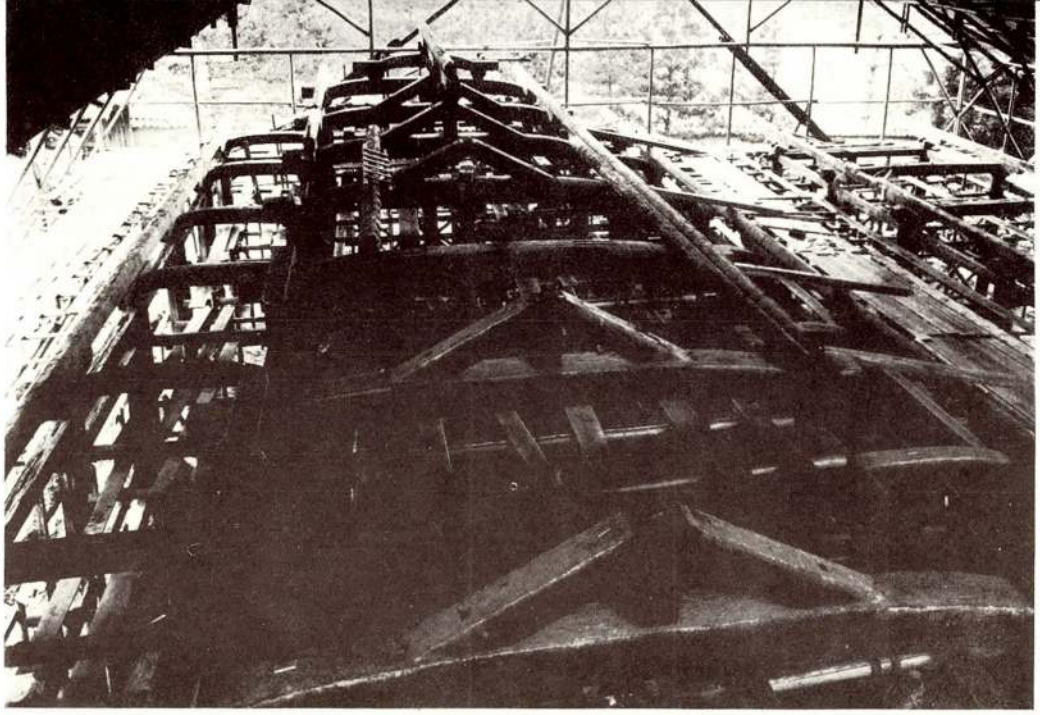
3. 食堂內部全景

內部の大虹梁と合掌による化粧小屋 ── 合掌中央の束は後補の材で形や大きさがまちまちである ── 及び中央の佛壇が示されてゐる、佛壇厨子は總て鎌倉の後補である



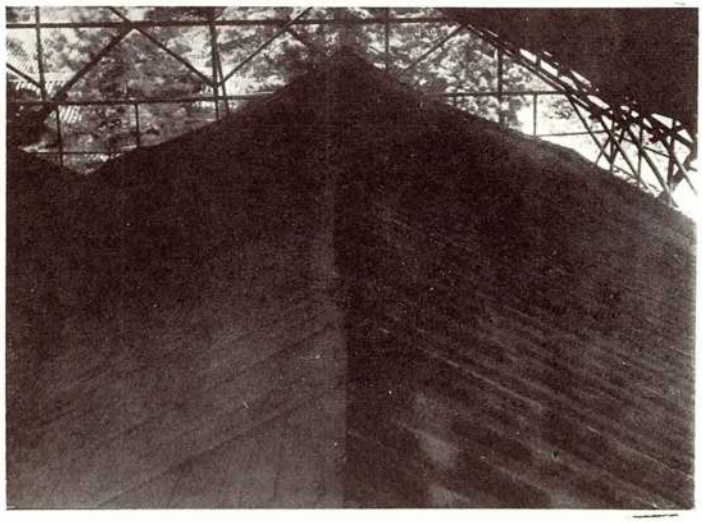
4. 食堂屋根手法

食堂の小屋は江戸時代の後補で化粧屋根裏の上束と母屋で低く組み簀子の上に葺土を置き瓦をのせる江戸時代の簡素な手法であつた



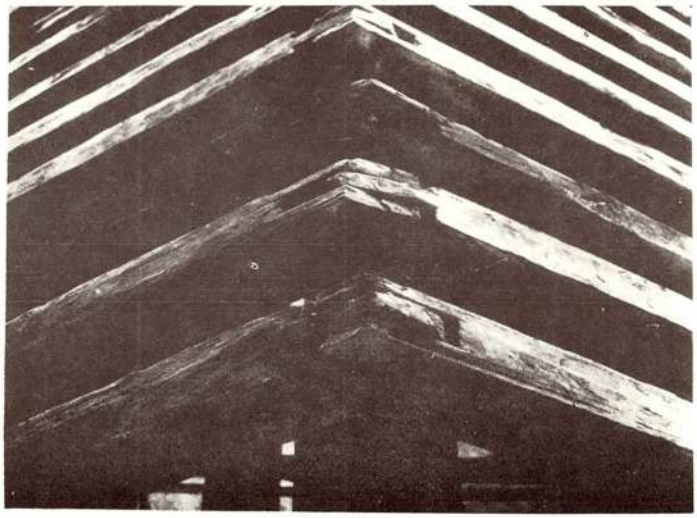
5. 食堂化粧小屋組解體中

大虹梁の形、合掌の組方、合掌拝みの枘仕口等に注意す可き點が多い、桁は總て丸く今のものは杉材組製で柱間何間にも長く架つてゐるが古制のものは一間毎に繼いである



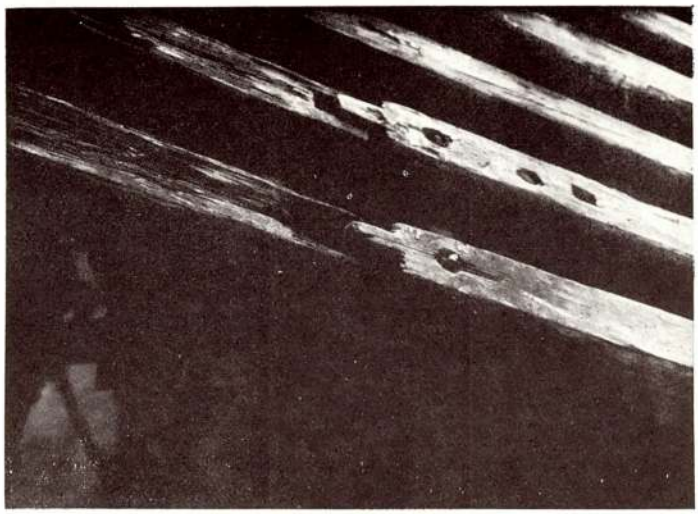
6. 食堂化粧屋根解體中

化粧屋根の裏板は4寸乃至6寸巾の割板で其の上に押へ桟が打ちつけてある、細殿も斯うした手法であるが是も古い手法で珍らしい



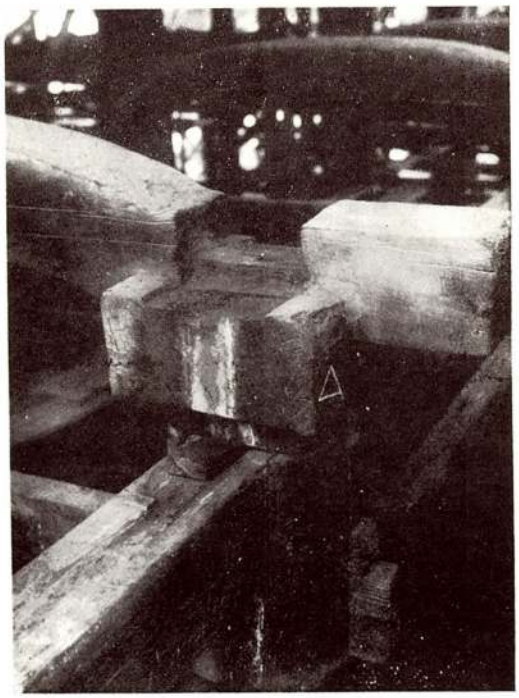
7. 食堂化粧棰組方

化粧屋根の棰は棟木上の拝みの部で斯うした組方になつてゐる、他の法隆寺内堂宇でも見る最も古制のものである



8. 食堂化粧棰繼手

棟木と母屋桁と軒桁と各々反りが違ふため其の間に架る化粧棰の勾配が違つてゐるがそれは斯うして母屋桁の上で繼いである、屋根の照りを地から作りあげる場合の最も簡單な古制とみてよい



9. 食堂側柱筋構架詳細

繫虹梁と柱と頭貫が古く大斗は後補の松材で形が變つてゐる、大斗肘木斗栱の肘木を除いた所を示したのであるが虹梁や斗の仕口は古制に近い

10. 建物解放後の食堂土壇(圖版略)

礎石の配列の狀を示す、濕氣拔溝が常に建物外方に向くやう据へてあるのが目につく、足場の上にあるのは古い頭貫で柱間1間毎に繼手が作られる(本文42頁　大瀧氏記事中の圖版〝第5圖食堂礎石配列〟參照のこと)

11. 食堂礎石(圖版略)

正面側柱筋の礎石は總て斯うした二重の繰出があつて或は今のやうに扉や壁があつたのではなく此の礎石の繰出飾がもつと外部に露はれてゐたのかも知れないと思はれる(本文42頁大瀧氏記事中の圖版〝第3圖食堂前面礎石〟參照のこと)

12. 食堂礎石(圖版略)

背面側柱筋の礎石は兩端後補のものを除いては皆斯うした長押當りの缺込がある、此處に扉裝置でもあつた筈で目錄抄の背面3本の戸は7間の中、壁と1間置にあつたものと思はれる資料となるもの(本文42頁　大瀧氏記事中の〝圖版〟第4圖食堂背面礎石〟參照のこと)

13. 食堂礎石

前後側柱筋を除いた內部の柱礎石は皆斯うした形をしてゐる、石英安山岩で柱枘を彫り濕氣拔溝をあけてある



14. 東院鐘樓修理前全影

鐘樓は鎌倉時代の建立其の後室町、桃山、江戸に修理をうけ今は甚だしく當初の形から變り、桃山、江戸時代風の所が多く混入してゐた、破損の度も甚しく今度は大變な修理である



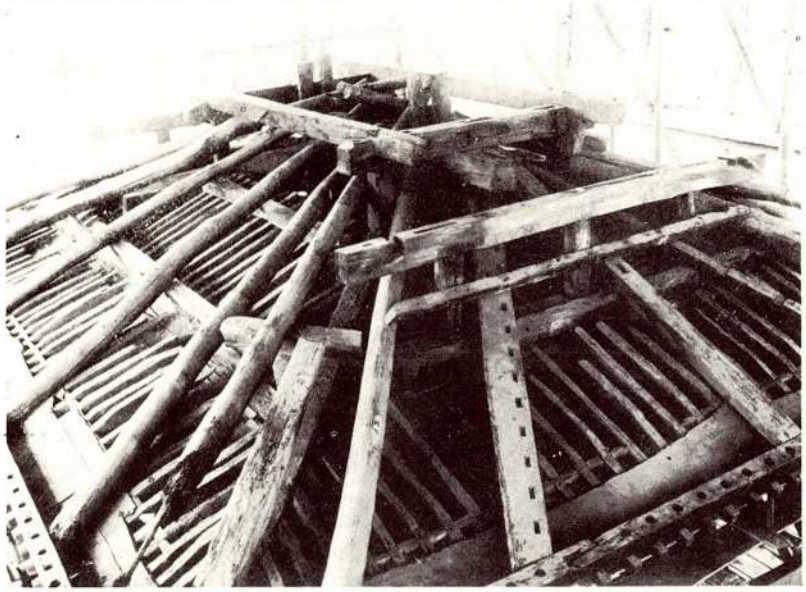
15. 東院鐘樓修理前破風詳細

桃山時代に妻飾を大きくし前方に突出して作つたゝめ隅の治りが所謂振隅になつてゐたのを江戸時代の修理に眞隅にして大きい破風を無理に治めてゐた、寫眞の大棟の鬼瓦と鳥衾には天文の銘がある



16. 東院鐘樓小屋解體中

前述した振隅の舊手法を江戸時代に眞隅になほした其の有樣を示す、脇木を新に新にして添へて棰を打ちつけたもので太い隅木が腐朽した舊いそれである、茅負等は新しいのが手法に變つてゐるのだらうかわう



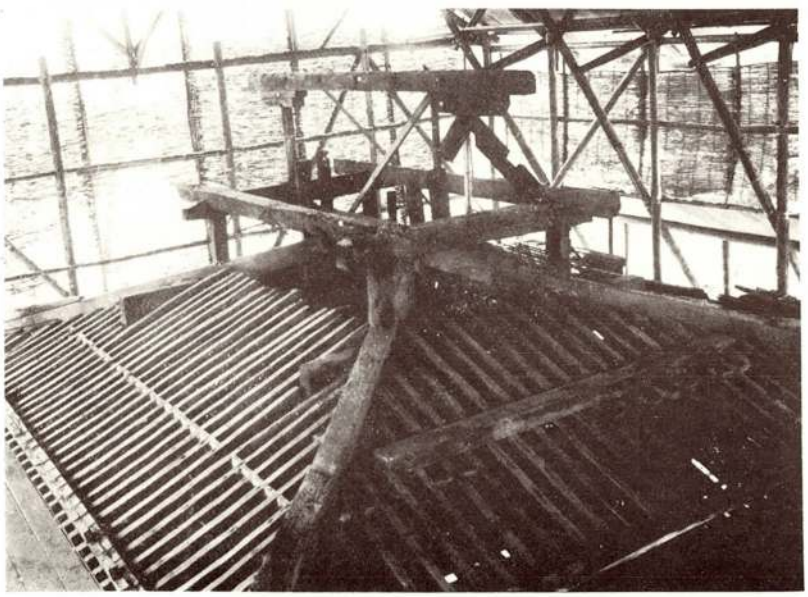
17. 東院鐘樓小屋解體中

鐘樓では小屋組解體中各種の舊材を轉用されたものが出て來又小屋の一部が嘗て組み換へられてはいるが相當舊い形式を保つてゐる事が知られた



18. 東院鐘樓解體中の妻飾

修理前は破風や懸魚にかくれて妻飾を立派に見る事が出來なかつたが此處では室町風のある笈形をもつた虹梁太瓶束の形式がよくわかる、材料手法等から桃山の修理と見た方が良いやうである

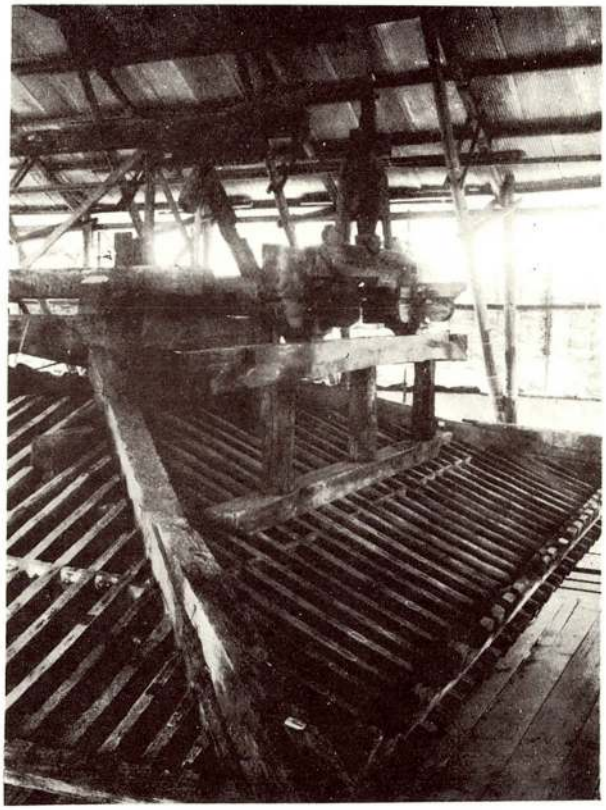


19. 東院鐘樓小屋組舊規

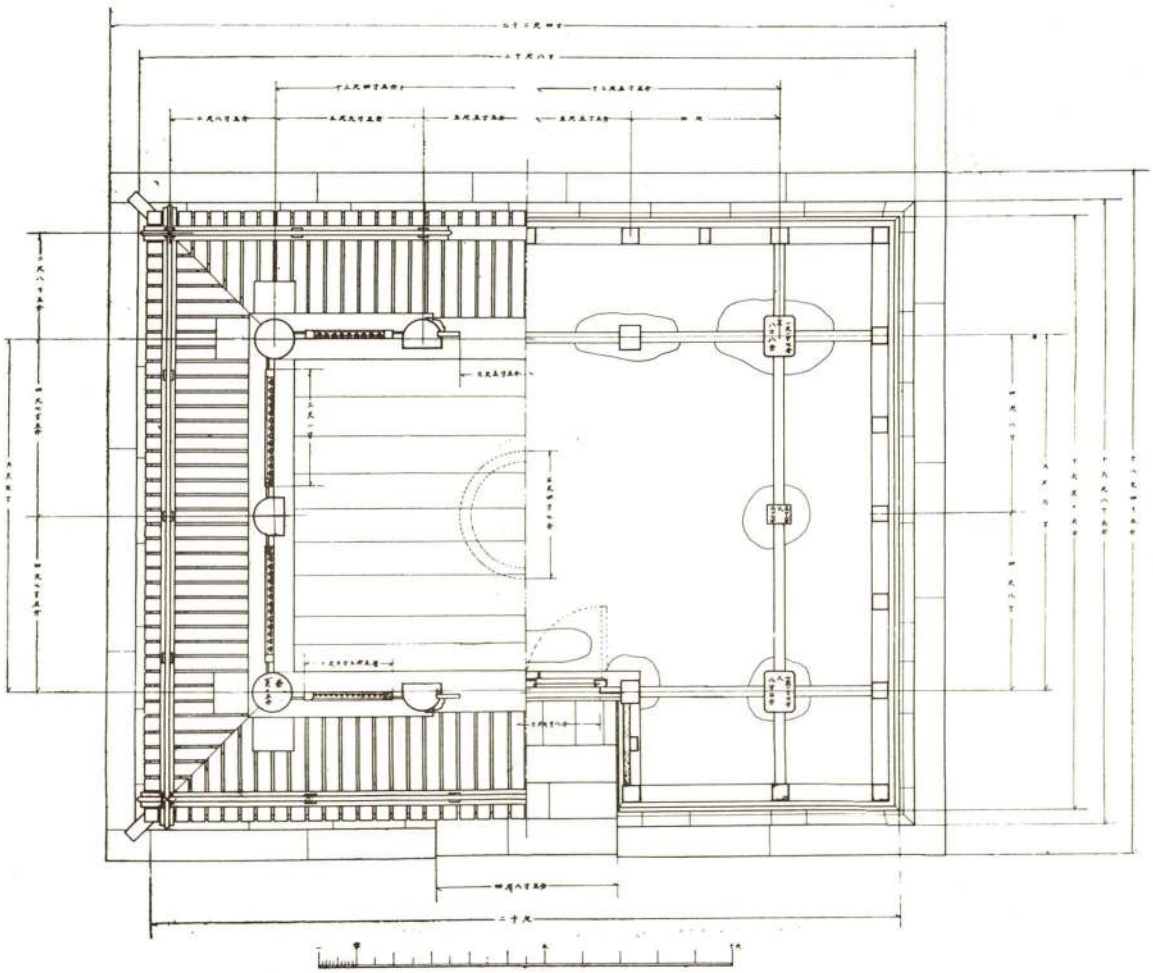
小屋中から出て來た棟木、肘木、合掌其他の材料を整理して舊形式を組みたげると斯うしたものになる、總て新しい材料を除いて今殘る古いものゝみが示されてゐる譯である

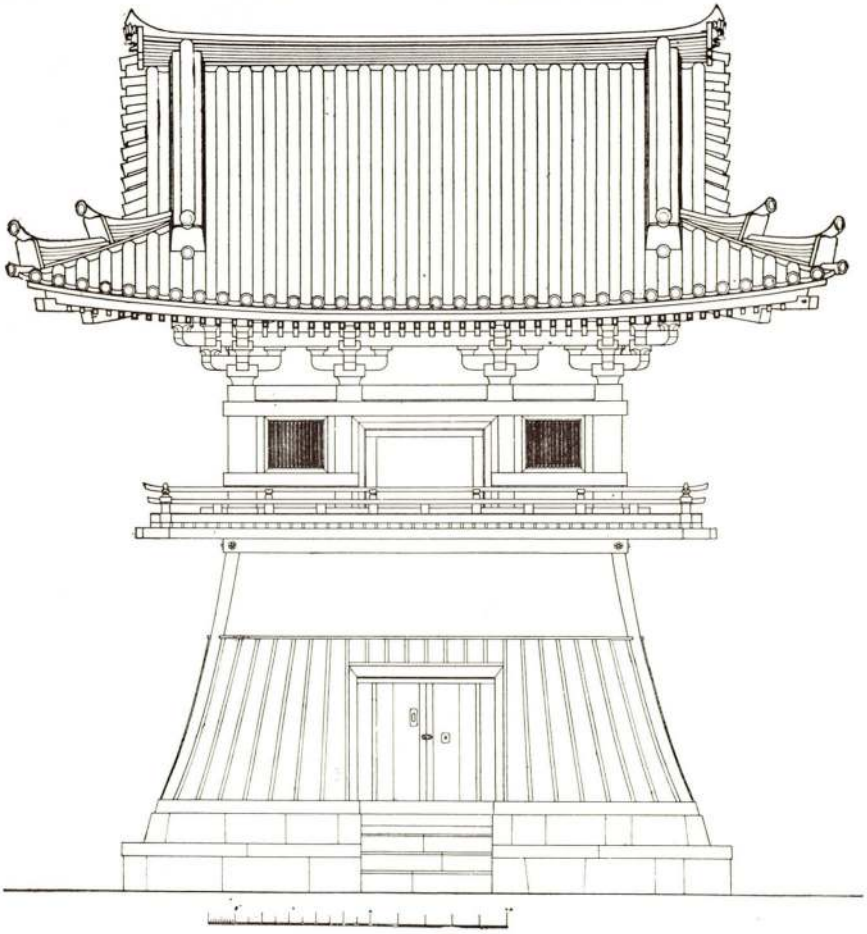
20. 東院鐘樓小屋解體調査中

今の妻飾と前述舊小屋組妻飾との前後上下の相異を示したものである、これだけ妻飾を前に出して且つ賑かにした相異は結果として實に著しいものである



21. 東院鐘樓平面圖

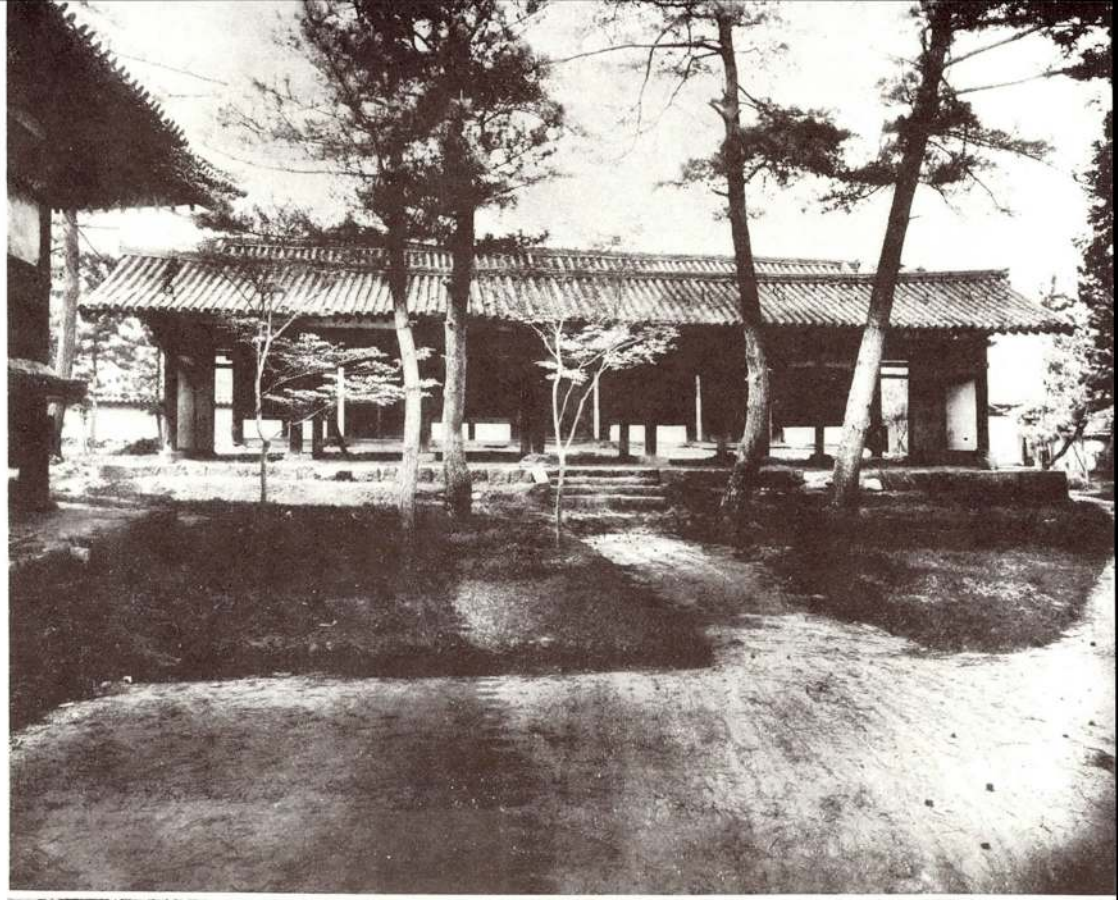




22. 東院鐘樓正立面圖



23. 東院鐘樓側立面圖



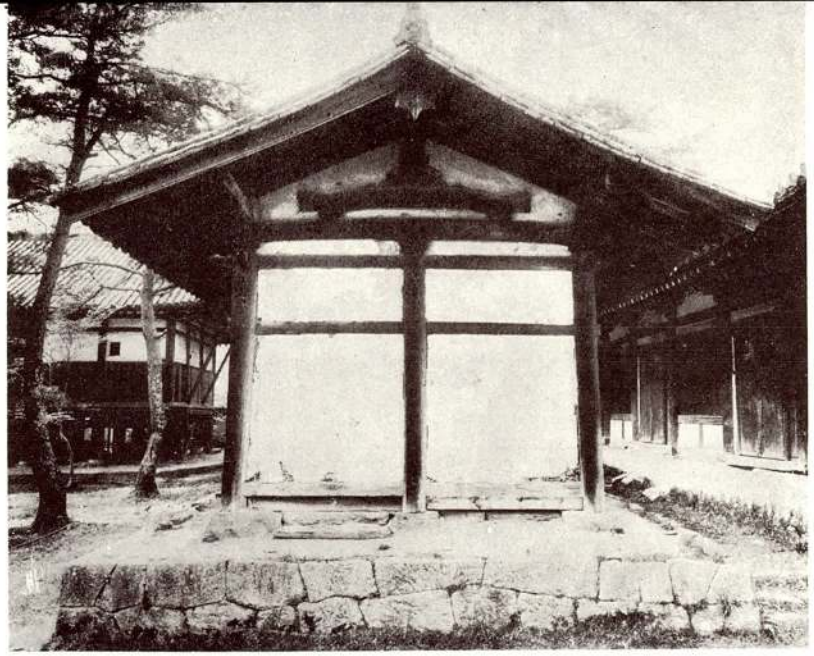
24. 細殿修理前正面全影

7間の食堂の前に同じ7間の細殿が建つた姿、古記に時々見える所謂細殿の唯一の遺構である創建は古いやうであるが今の建物は鎌倉時代の再建になる



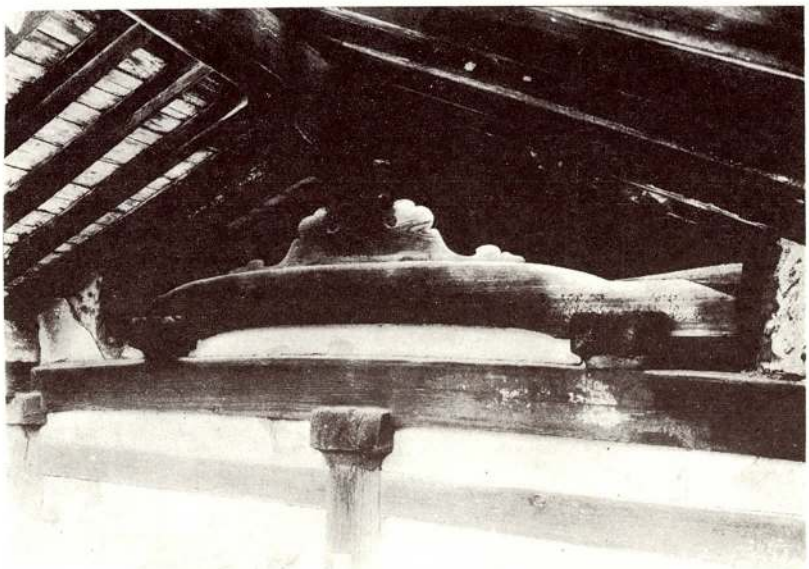
25. 細殿修理前側斜影

細殿は其の二重の虹梁と斗による古式の妻飾や化粧棰の上にすぐ屋根を葺いた原始手法が注意されてゐた、此の屋根の手法は今回の修理の調査で特に面白く感じられた所である



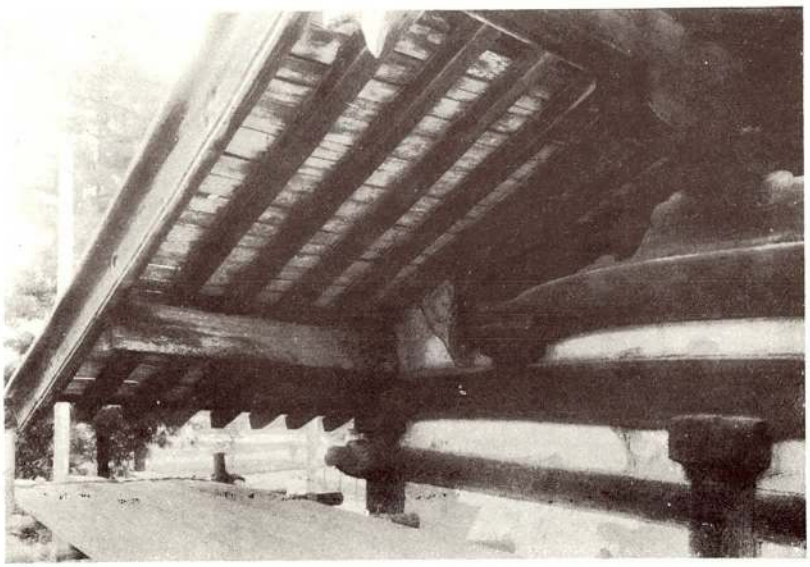
26. 細殿妻全影

張りの良い虹梁と斗で出來たこの妻飾は奈良式な所が多く或は奈良時代の遺構そのものかとも思はれたが、繼手や仕口其他の技法から見て舊をまねた鎌倉のものと思つた方が良いやうである、其の他板蟇股等が加へられて又模様が變つたやうである



27. 細殿妻飾詳細

松材で出來た斗、木質の違ふ板蟇股、夫等に較べると二本の虹梁は如何にも古い、そうして解體して見ると上の虹梁の中央にもも斗が使はれた痕がある、此の妻飾の舊規は柱や桁との組方を考へる時興味多い研究となるものである



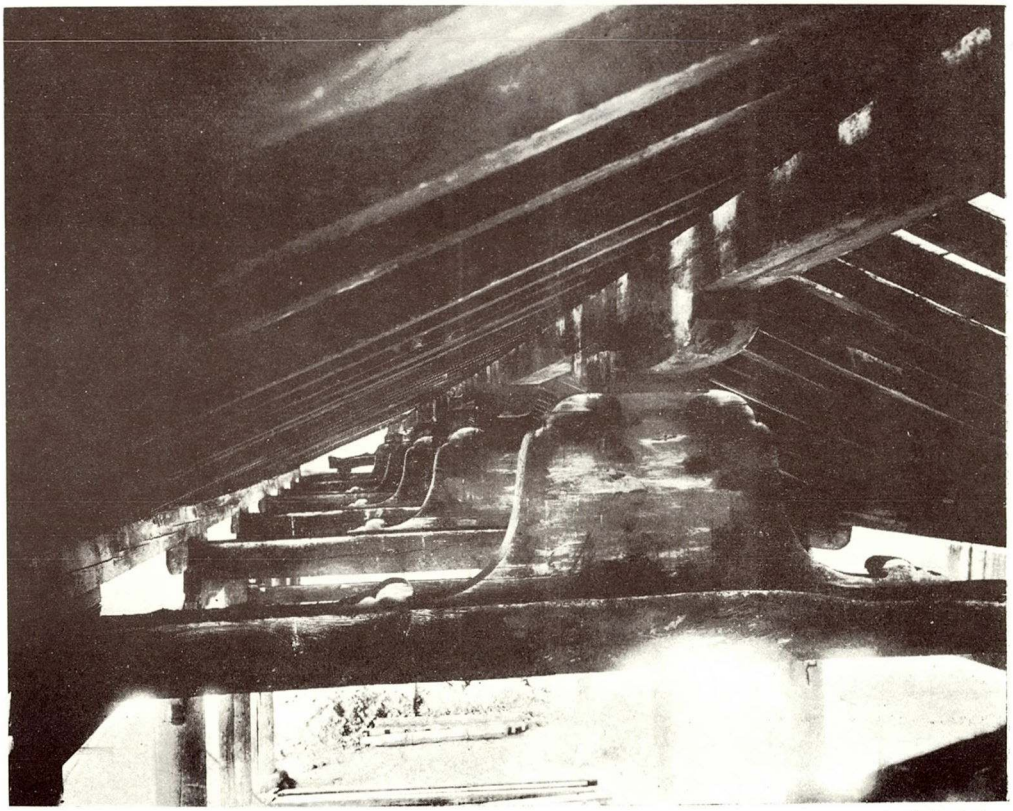
28. 細殿妻詳細

軒桁の著しい增し、軒桁下端にも反りがあるため肘木上端が是に添ひ肘木に增しがついてゐる形、其他には化粧裏板の手法等が此の寫眞では興味を持つて見られる



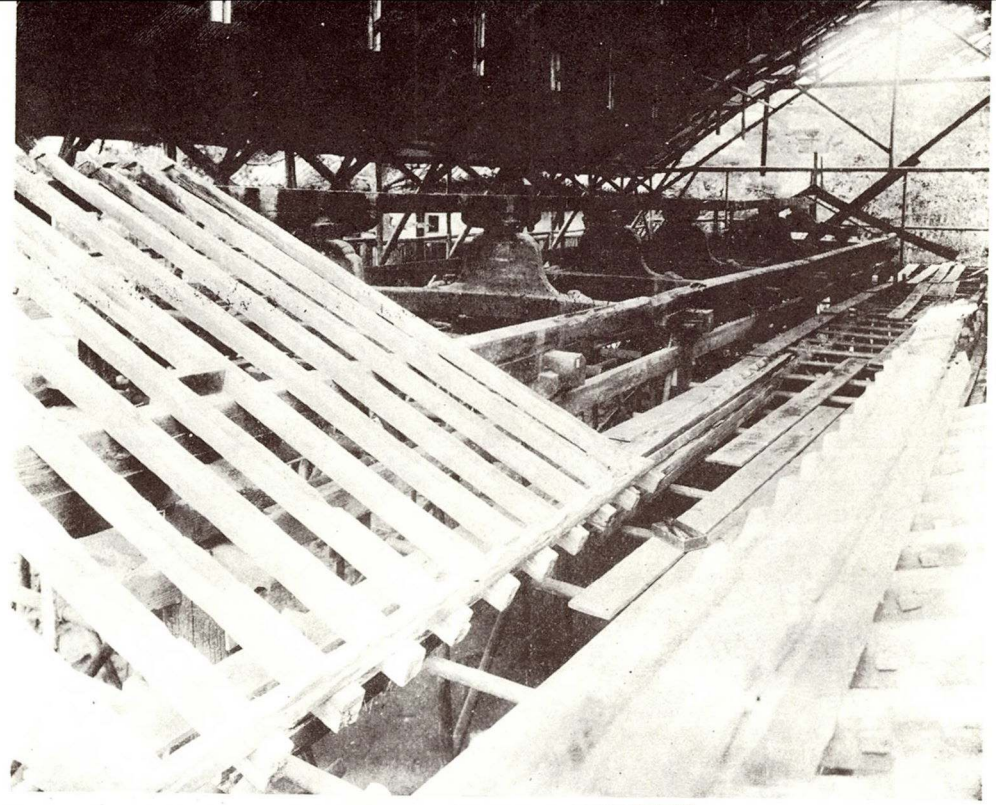
29. 細殿內部修理前全影

細殿は後補の際使用された松材の部分が腐蝕甚だしく或は折れ或は破れ著しく建物が傾いてゐた、床土が洗はれて礎石が高く出てゐたのは特に見苦しかつた、內部の大板蓋肢構架は美しい筈のものがあまり見榮へがしなかつた程である



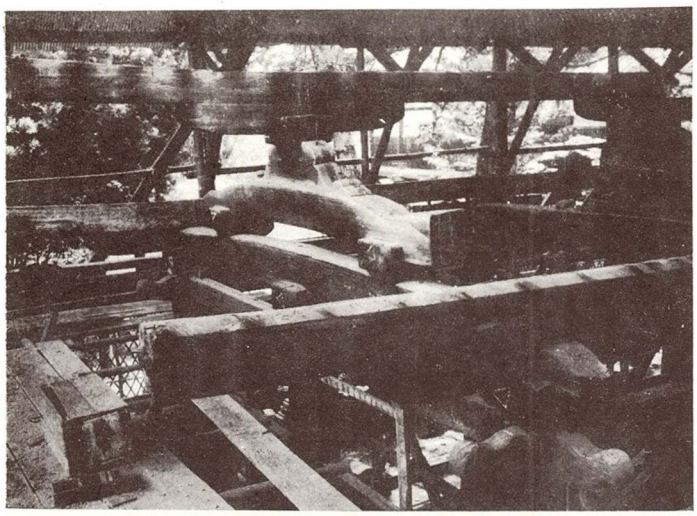
30. 細殿化粧小屋組構架

虹梁に大板蓋肢を作つた大膽な此の意匠構架は室町近い頃の後補とでも見て良からうか、棟木に合掌構架の痕があつて古くは食堂より一層簡單な意匠になつてゐたと思はれる



31. 細殿棰解體中

棰は旣に大破してゐたが嘗ての修理に先の腐れを切り棄て長さを縮めてあつた棟木と其の肘木は古かつたが後者は古材を削りなほして作つたものである事が判つた、側柱筋は斗や肘木桁が多く松材で破損も甚だしかつた



32. 細殿化粧小屋解體中

細殿東妻の解體中の姿である、前方の桁が松材で其の下の肘木と捻れてゐる有様が見える、部材の折れや割れと繼手仕口の緩み、部材の捻れ殊に荷重による部材の歪等が破損の後の調査を最も困難ならしめる



33. 細殿屋根解體中

瓦と葺土とを除くと直ぐ斯うした化粧裏板となる、大棟兩端の部に屋根反りを持たせるため僅か三四寸の高さに二重の野地を作つてゐる有様が見られる、割板に押へを打つた古い手法もよく判るであらう



34. 東大門修理前正面全影

奈良時代の創建、藤原、鎌倉、桃山、江戸に各組替迄した大修理をうけてゐる、軸部及其他の部材は相當舊いものを遺してゐるが度々の修理組替等で斗栱や桁、屋根等の趣は大分變つてゐた



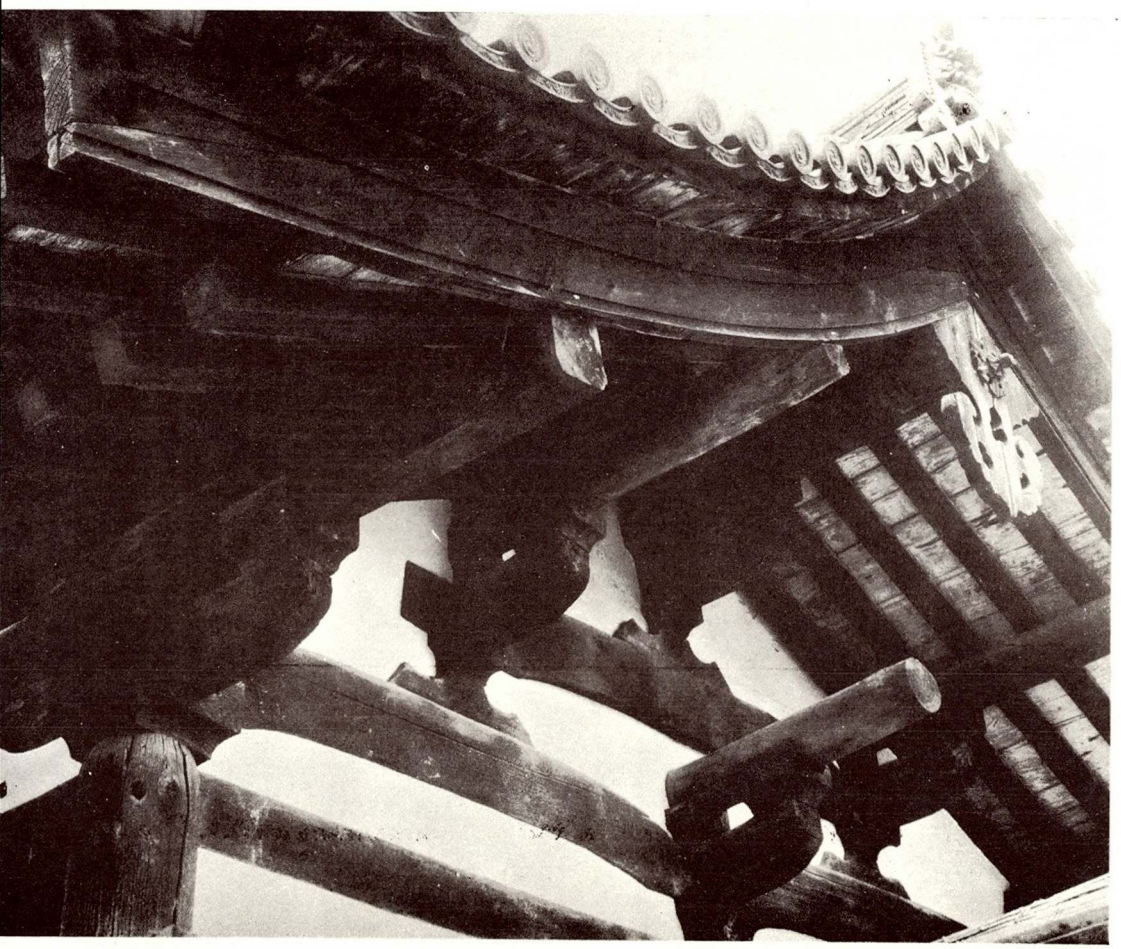
35. 東大門修理前背面詳影

柱や斗栱等は古いが此處に見へる中でも飛貫、頭貫、斗栱間の平束軒桁、飛檐棰、木負、茅負、瓦等は全く後世の補修で軒の形等は全く變つてゐた、古い柱や斗栱虹梁等も置替へられてゐたのであるから改變の著しいのに驚く



36. 東大門修理前小屋組

所謂三棟造の小屋組の一部であるが前方の虹梁は桃山の補修で形が變つてをり上の板蟇股はもと妻に出てゐたものを中に入れたものである、側柱筋の桁が全く角に變つてゐるのも見られるであらう



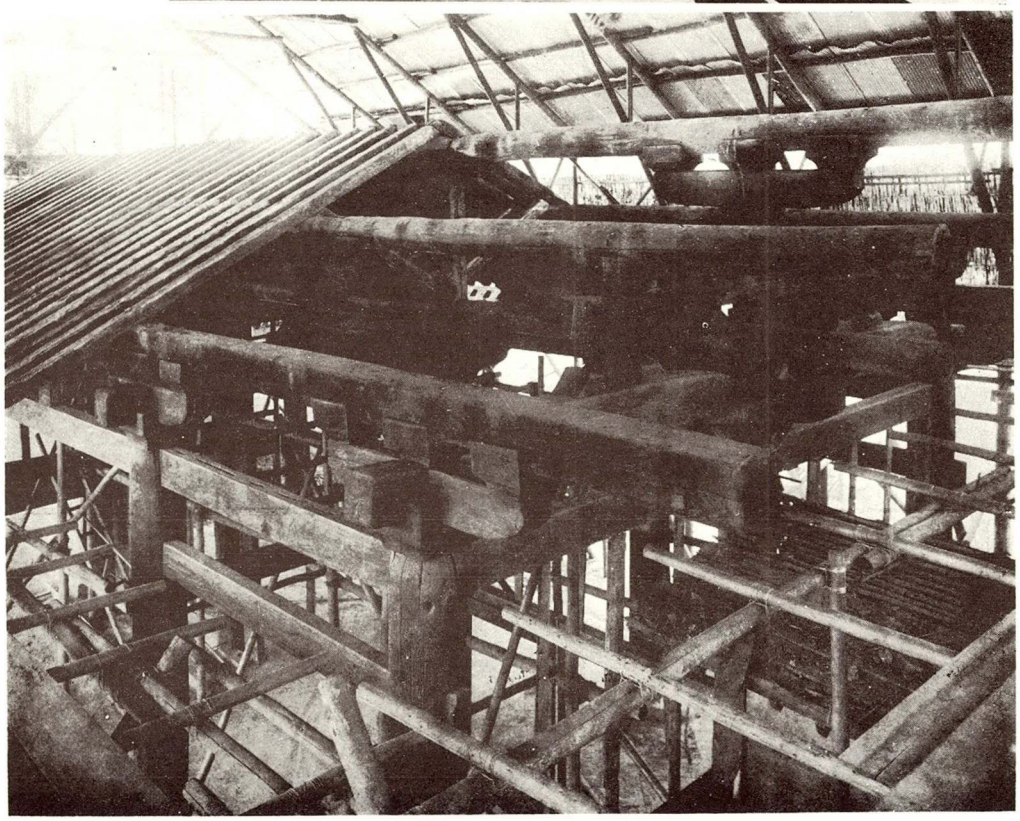
37. 東大門妻飾

破風、懸魚、地棰、飛簷棰、軒桁等此處に見へるものは皆新しい、そうして夫々に古い形式機構を亂してゐるものである、妻の肘木は中央冠木にあたる桁を受けるものの他は皆長手のものである筈が短い内側に使ふものに置替へられ板蟇股も新補されてゐる



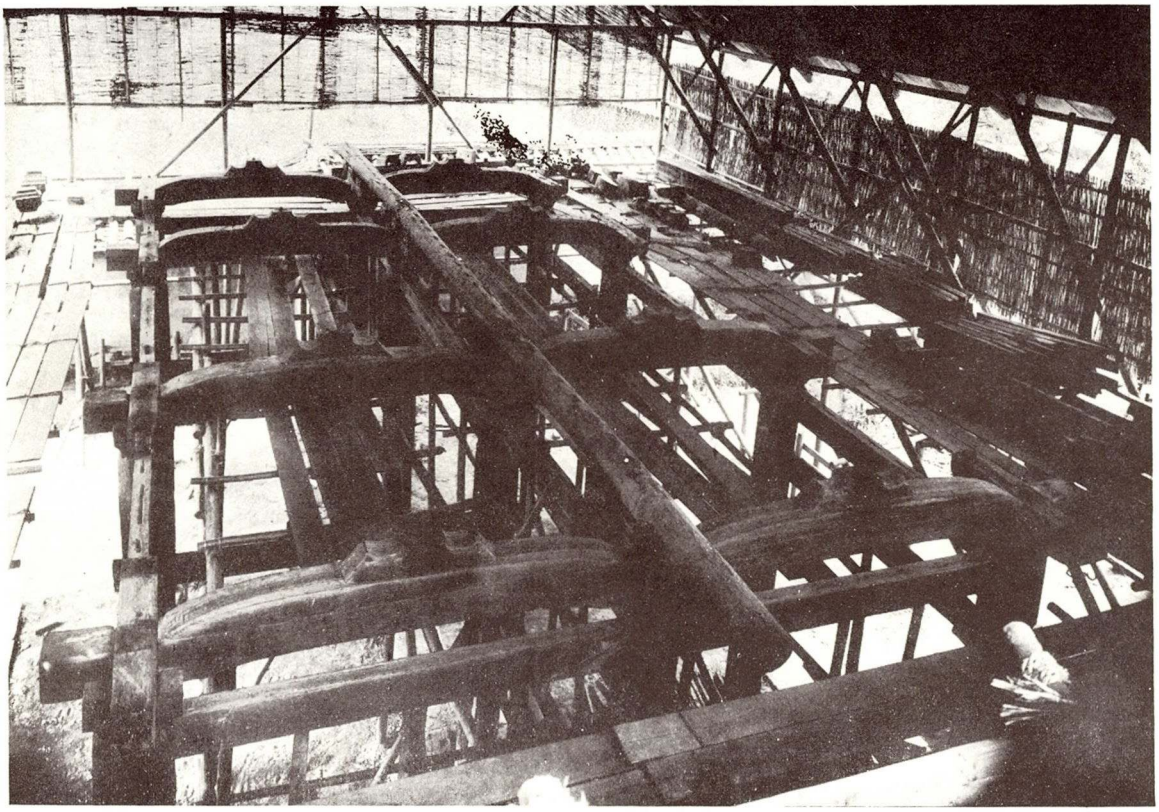
38. 東大門內部

東大門が當時の八脚門制の典型を示すものである事は柱斗栱虹梁蟇股等の古い部材と其の組合せによる構架意匠の基本的なものが覗ひ得るからであつた、と同時に又恐ろしく後補によつて其れが亂れてゐたのでもあつた、扉口の兩柱等は全く其の位置を取り替へて後補の扉を裝置するに便じたりしてゐたのである



39. 東大門化粧小屋解放中

前述のやうに夫々の部材が取替置替されてゐたので解放中の部材寸法それによる組法の調査は困難を極めた、其の調査中の姿である、此の寫眞では三棟造の構造法がよく判るであらう

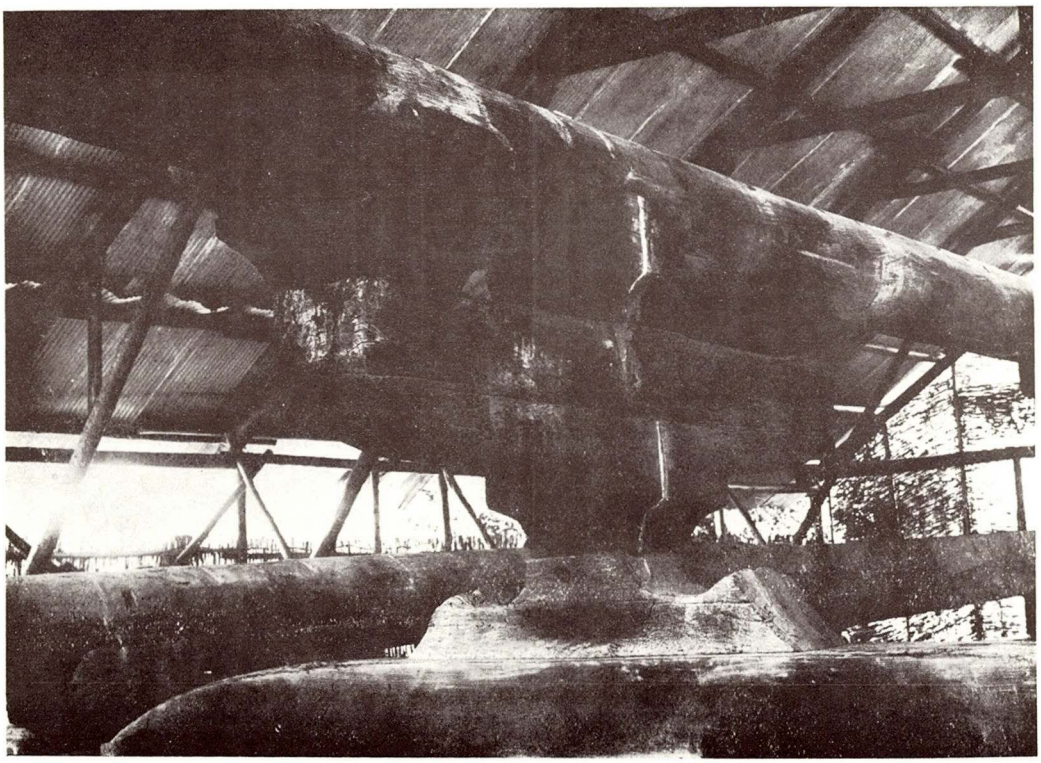


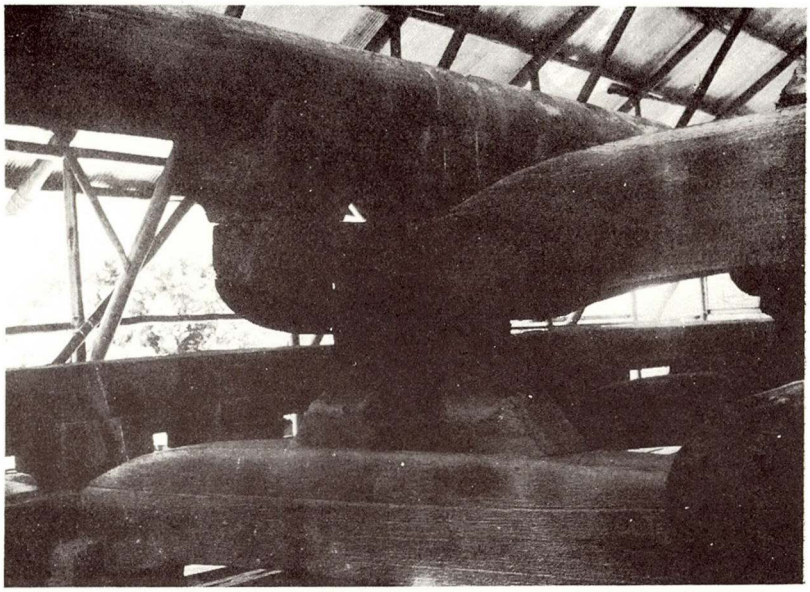
40. 東大門化粧小屋解體後

上記の虹梁を取り去つた所である虹梁でもとの位置にあつたものが殆んどなく數本は新補されてをり形も違つてゐた、幸に簡單な八脚門で複雑な意匠のなかつたのが舊規を探求して行く上に成功をもたらしたのであつた

41. 東大門斗栱ノ1

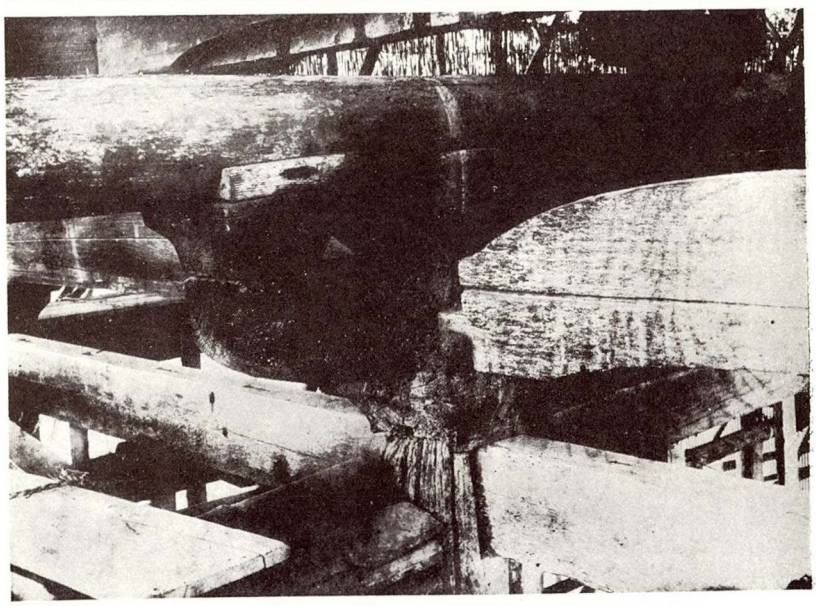
妻棟木受の斗栱である、肘木、斗、桁は皆古いが長かる可き肘木を內側の短い肘木と替へてあつたので斗の位置等には變りがある





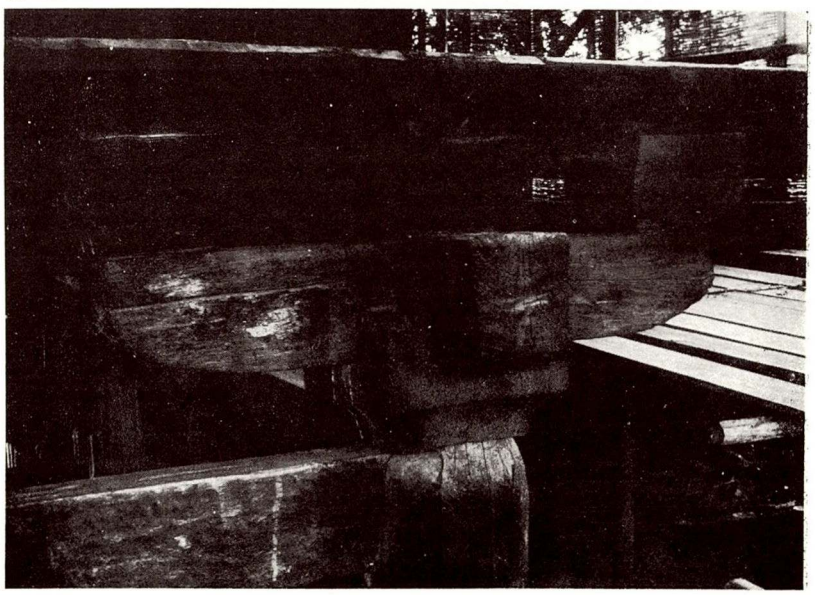
42. 東大門斗栱ノ2

妻母屋受の斗栱である、斗の隅が缺けてゐるので虹梁と肘木の組手がよくわかる、桁の下端に元長肘木の時に當つてゐた斗の痕がよく見へてゐるであらう



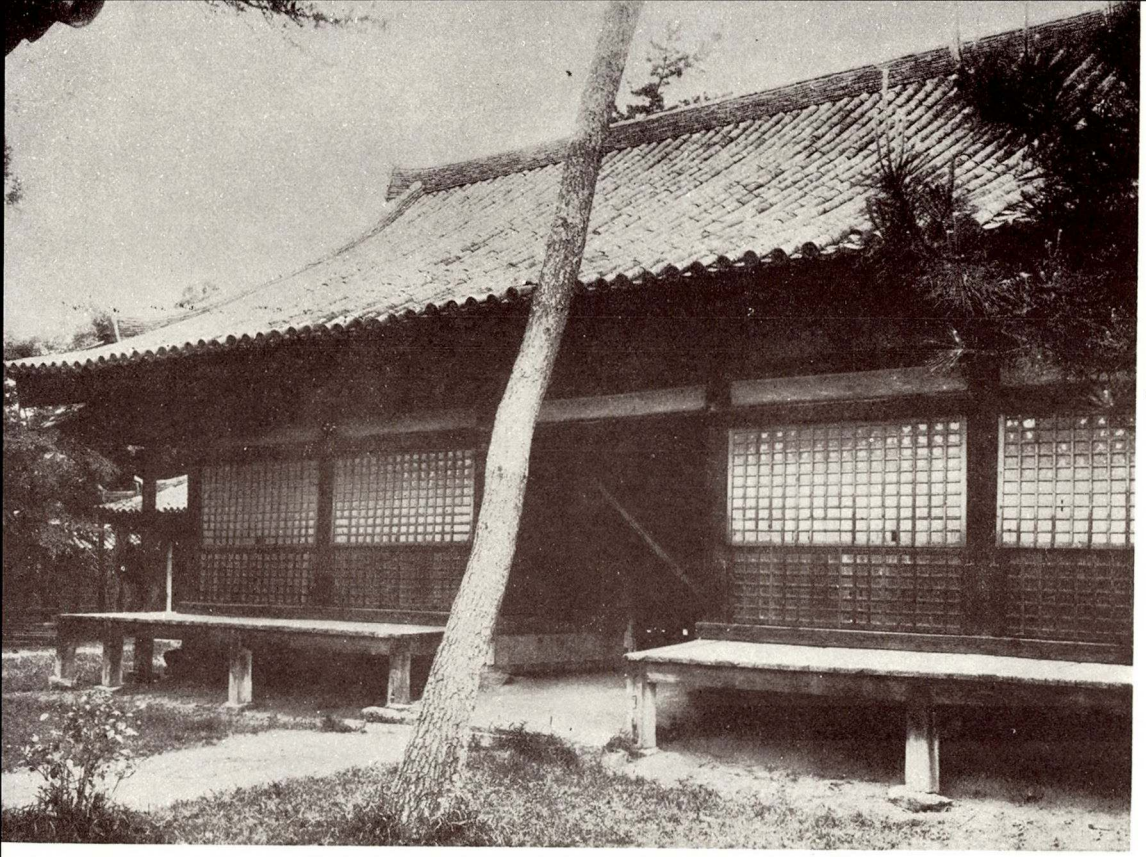
43. 東大門斗栱ノ3

中通り桁受の斗栱、柱、大斗、虹梁、肘木、斗、桁と古いものがよく揃つてゐるが風蝕甚だしく肝腎な部材の寸法や曲線等は斯うした所ではきめることが出來ない



44. 東大門斗栱ノ4

側柱筋隅の斗栱、此處では肘木と柱の他總てが新しいものと變つてゐる、斗は室町頃の取替か、頭貫や桁は桃山、江戸の改變である



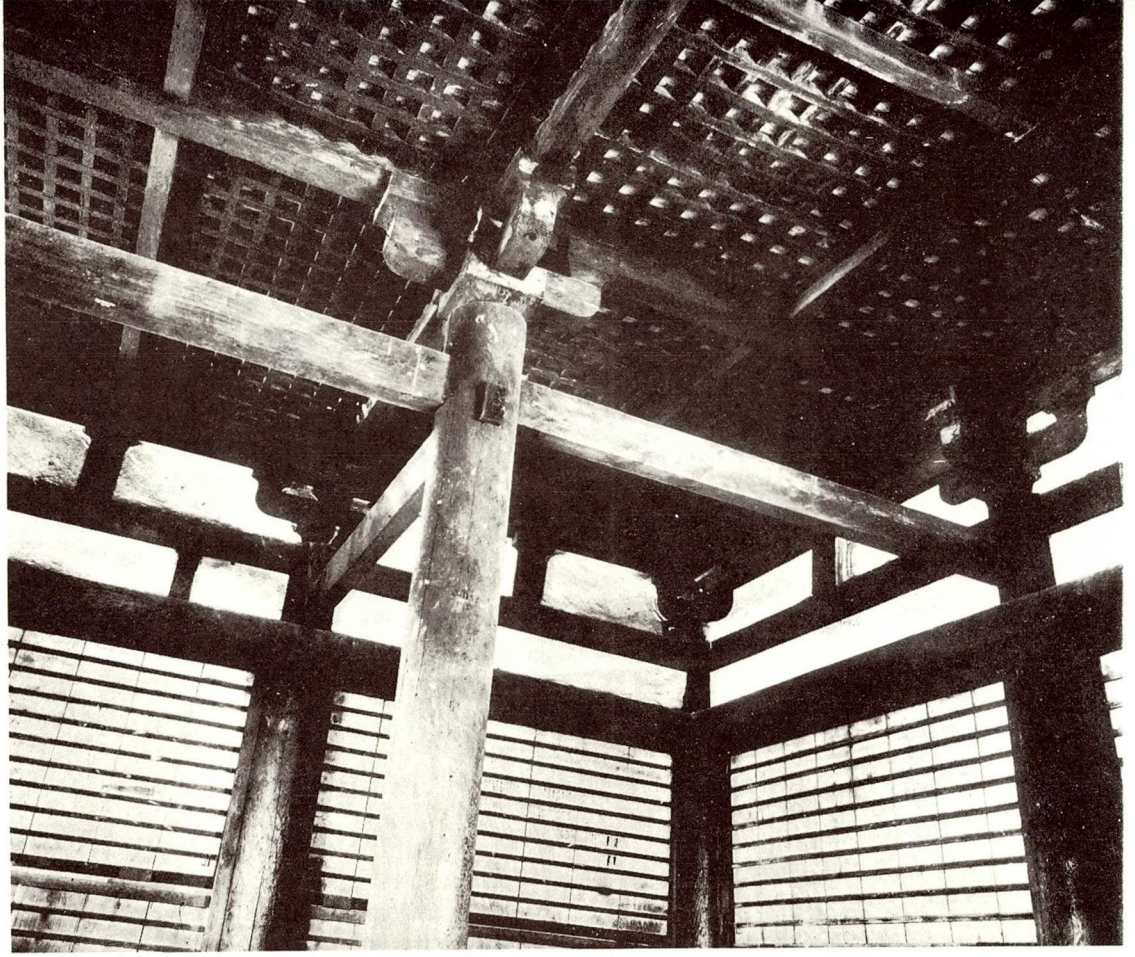
45. 東院禮堂修理前正面影

禮堂は鎌倉の再建、桃山と江戸に修補をうけ其の後明治になつて中央の床を切りとつたりしたが、桃山の屋根の形を變へた修理は最も甚だしいもので形を全く變へてしまつてゐた



46. 東院禮堂修理前側面影

禮堂の側面は桃山の修理により斗栱虹梁各一重を高めて妻の形を一變した事によつて著しく變へられてゐた妻庇が附加されたのはあまり後の事ではない、室町かそれ以前に既にあつたと思はれるが確證を得ない



47. 東院禮堂內部

內部は各通りに柱を置き側と等しい斗栱を組んで組入天井にしてあるがこの內部の柱は1寸以內の伸びがあつて天井が垂れ下つて見へる錯覺を防いである、天井桁は柱筋を通るだけで今は其の間に1本假枠が加へられたりしてゐる

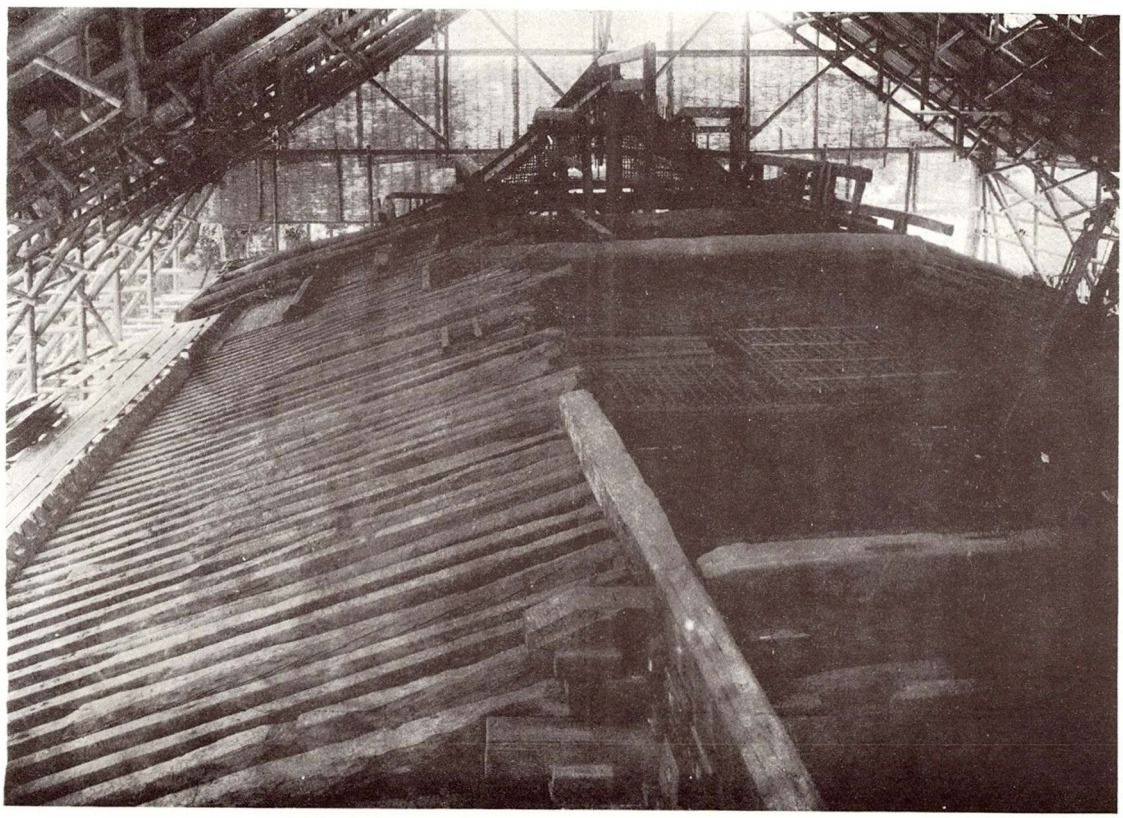


48. 東院禮堂妻飾構架調査中

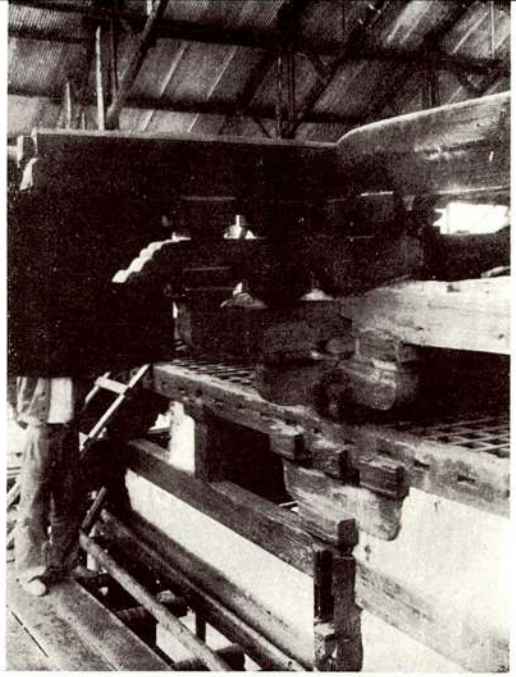
妻飾の前述した改變は更に軒に至つて技法を無視した姑息な修理がしてあつたので今回の修理では是を總て舊に復した、其の調査中妻庇を取つた姿である



49. 東院禮堂小屋解放中　禮堂の小屋は桃山頃の仕事で其の材料中には古いものが使はれてゐなかつた、割合に簡單明瞭な和小屋である、工事途中の一例までに示す

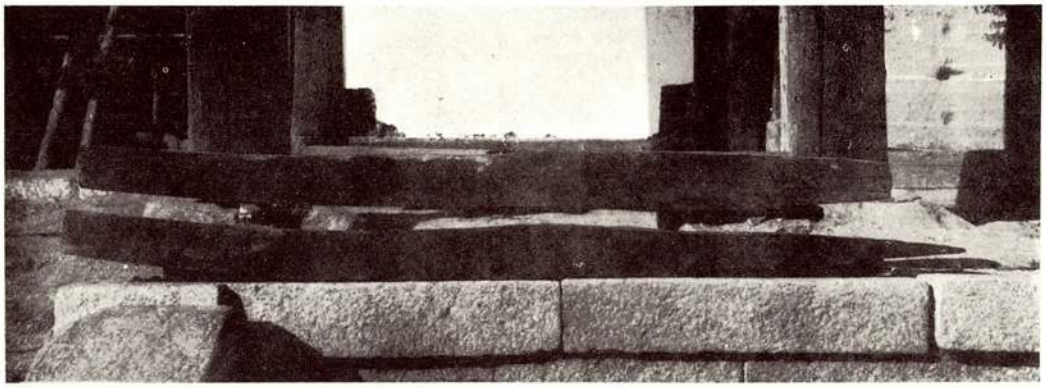


50. 東院禮堂小屋軒先解放中　地棰の多く列ぶ中仕事の割合に叮嚀に見えるのが古いので末まで角に仕上げてあるのは舊指外棰が混用されてゐたそれである、此の指外棰を資料として妻飾を變へ隅の軒反りを復舊した



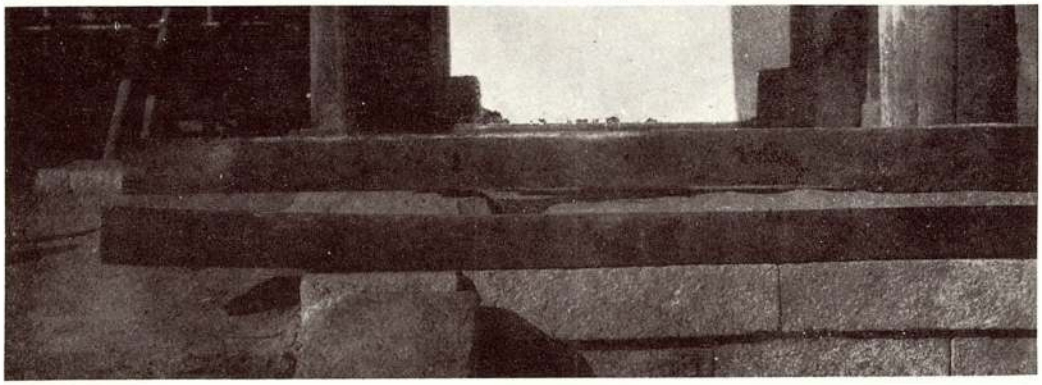
51. 東院禮堂妻飾斗栱調査中

妻飾斗栱は此の寫眞の最上部の桁と其の下の斗一列及び上重の虹梁が後補により附け加へられたので元の妻虹梁は下重のもの1本で合掌の仕口穴が見えてゐる、又斗栱の繰型のある肘木は元の桁で反りがあり棰の釘痕もある



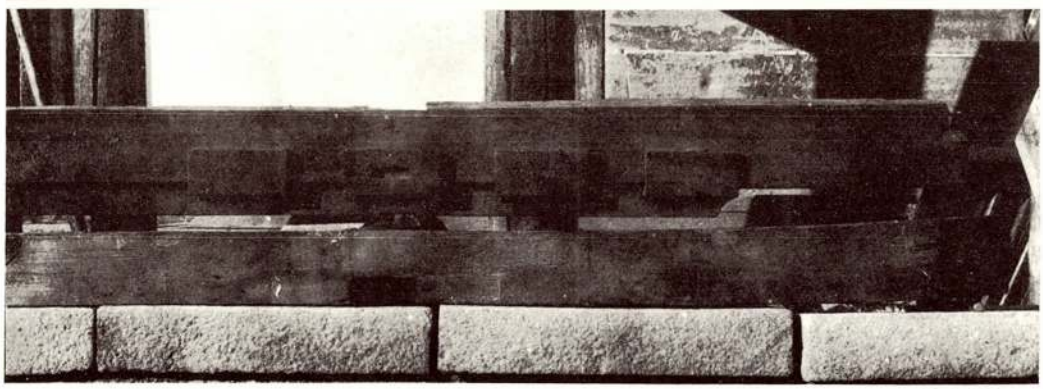
52. 東院禮堂新舊棰(飛檐)

妻飾に伴つて復舊の制をも際の資料を此處に對比して見る、上に修理した桃山時代の棰が鎌倉の當時のもので下端の反り上端に著しい桃山其他のものに質相が異つて繊維さの修理の痕跡れる



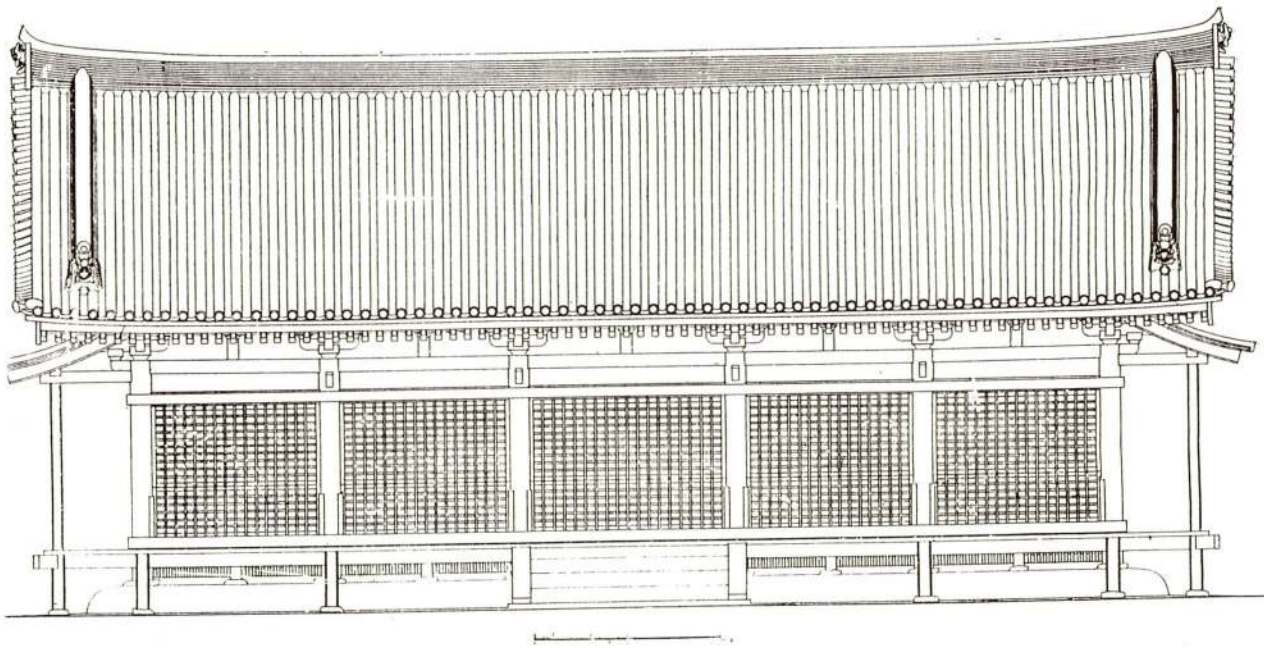
53. 東院禮堂新舊地棰

今の地棰は反りつて少い桁に乘棰で殆んど棒棰を示すある、上に仕事のが甚しく粗い、下方のは鎌倉の增り舊棰が全く程良いことを示してゐる



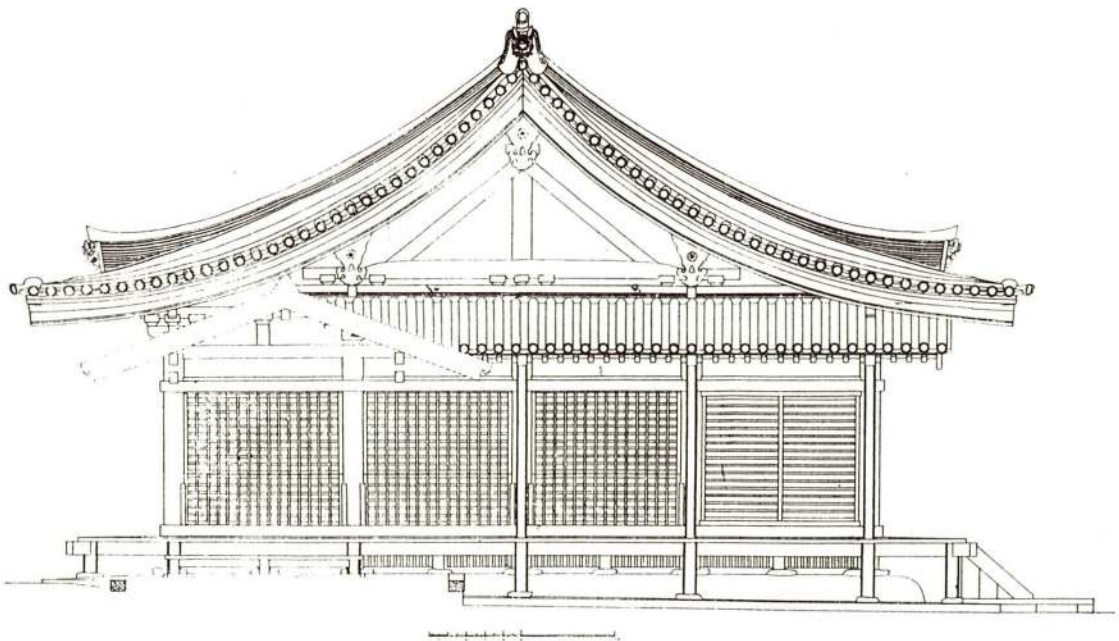
54. 東院禮堂新舊軒桁

上は現在用ひて隅斗栱のあつた桁で妻飾のし反緩繰せいある甚だしくもの、斗は小さり當よく



55. 東院禮堂修理正立面圖
修理前の妻を低め又軒の反りを根本的に復旧したものである

56. 東院禮堂修理側立面圖
修理前の寫眞と對比して妻飾の變化を見られたい



法隆寺問題の今昔

工學博士　伊東忠太

1. 再建非再建問題

凡そ日本の古建築の中で、法隆寺ほど學界及び藝界に問題を起したものは無い。これ法隆寺が建築史上如何に重大性を有するかを語るものであるが、又一面に於て古建築の徹底的研究が如何に六ケ敷しいかを教ふるものであり、同時に我國の專門學者の倦むことを知らざる研究心が如何に旺盛であるかを示すもので、吾人の歡喜に堪えざる處である。

予は茲にこの消息を詳說する暇は無いが、法隆寺伽藍は夙に寺の緣起流記資財帳等に由て推古天皇15年に聖德太子の建立にかゝるものと信ぜられ、且つ創立以來火災に罹つた事が無いと言はれて居た處、明治初期の頃に黑川小杉兩博士に由て、日本書紀天智天皇9年の火災の文獻に基づき、法隆寺伽藍の再建說が唱へられたのであつた。

この再建說に對して猛然反駁を加へたのが關野貞博士で、法隆寺の建築が明かに推古時代(一般に所謂飛鳥時代)の樣式である以上、再建ではあり得ない、若し再建とすれば、夫は寧樂前期の建築にならねばならぬ。故に日本書紀の記錄は信ずるに足らずとして幾多の傍證を擧げられた。然るに之に對して更に痛烈なる反駁を加へたのが喜田貞吉博士で、日本書紀の如き尊嚴なる正史を信ずるに足らずとするは暴論であるとし、關野博士の幾多の傍證に對しても一々抗議を提出した。世論は茲に於て沸騰し、再建非再建の兩派競ひ起つて火花を散して爭ふこと正に30有餘年、その間に或は根本に溯つて伽藍建築の動機や年代を檢討し、或は枝葉に亘つて資料を提出し、その意見を公表した論說は、曾て木村貞吉君が調査した丈けでも80篇に達して居る、今日に至つては恐らくは100篇を突破して居ると思ふ。しかもこの問題は依然未解のまゝで殘されて居る。恐らくは將來なほ永く解決されぬであらう。

2. 遺物本位と文獻本位

この問題が斯くも紛糾して解決されぬのは、畢竟建築家と歷史家とが互にその立場を異にし、互に相讓らざるが爲で、學者の態度としては當然の事であらう。建築家は遺物を本位とし歷史家は文獻を本位とするが、兩者互に相契合することは寧ろ稀有であり、多くは相背反するものである、そこに研究の興味も沸き、論爭の意氣も生ずる譯である。

予は明治31年「法隆寺建築論」一篇を公表したが、その中に再建非再建に關して次の樣

な所見を述べた。夫は、法隆寺建築の様式が推古時代に屬することは明瞭であるから非再建と認め度い所であるが、日本書紀の天智火災の明文を誤記と斷定すべき理由を知らぬ、若し天智火災を事實とするならば、法隆寺伽藍は火災直後に推古式に由て復舊されたものと考ふるより外に途は無いと述べたのである。處が或る方面から、伊東の說は頗る巧慧である。再建か非再建か、明確に斷言せずして曖昧なる態度を採るのは怪しからぬと批難した。併し予は實際今日と雖も尙ほこの問題に就て明確なる斷言を下し得ぬのである。予の所信は、文獻の事は文獻學者の研究に俟ち、若し天智火災の記錄が誤であることが立證さるゝならば、法隆寺非再建論が正論と認められるべく、火災記錄が眞實であると立證されたならば再建論が正しいことになるが、而も法隆寺建築が何れにしても推古時代の様式を保つて居る事に變りは無いと見るのである。

然るに最近田中重久氏の公表された新說は、法隆寺は聖德太子の建立に非ずして蘇我馬子の建立と認むべき理由あることを論じ、日本書紀の天智火災の文は干支一運の錯誤で、實は推古天皇18年の斑鳩寺の火災を誤寫したものとし、曾て平子鐸嶺氏の發表した干支一運錯誤說を裏書されて居る。予は未だ田中氏の說の當否を判斷し得ないが、是は頗る重大な學說で、若し之が是認さるゝならば舊來の法隆寺論は殆んど根底から改竄されねばならぬ事となる。

3. 法隆寺建築の本質問題

予は一建築史學の學究として、寧ろ法隆寺建築の本質の檢討を主題として居る。即ちその様式、手法、構造等の特異性、その傳來の經路、西亞乃至支那三韓との關係等の問題を處理することに從事し來り、既に數次卑見を發表して居るが、この方面に於ては世論は殆んど沈默を守り、未だ强力なる贊否の評論を聞かぬのは頗る物足らず思ふのである。文獻學上の問題が赫々として烈火の如くに燃へ盛るのに、建築學上の問題が寂莫として死の如きは何事であるか。

世人は往々法隆寺論の先決問題はその年代の決定であり、年代未定のまゝでは建築を論じ得ぬとするが、予は爾く考へない。勿論年代問題と建築問題とは密接に相關聯することは自明であるが、吾人は年代の確定する迄手を拱して建築の研究を停止することは出來ぬ。予は建築と文獻と相提携して同時に研究の歩武を進めねばならぬと思ふ。

建築に即した學說としては、關野博士の支那六朝の梁の影響說や、濱田耕作博士の雲栱雲栱の起源說及び金堂內部の構成と西域乃至支那の石窟寺の內容との比較論等があり、何れも傾聽すべき一學說であるが、未だ的確の定說に至つたものではないと思ふ。なほ此の種の幾多の建築上の諸問題が殘されて居るのであるから、建築家は勿論、建築に趣味を有する人は努めてこの方面に力を竭されんことを翹望するのである。

試に重要問題と思はるゝ二三の例を擧ぐれば、その一は推古時代の建築の眞相の研究で

ある。今日の建築は數次の大修繕を經て、創立當時とは可なり變更されて居るのである、第一に中門、金堂の妻飾は共に鎌倉時代の改案であり、屋根の正吻、旁吻等も原形は全く失はれて居る。軒の線なども若干後世の意匠に由て變改されて居るに相違なく、之に關聯して垂木以下の各部分にも變更が加へられたと推考し得る。勿論是等の原形を正しく考定することは至難であるが、極力研究して見ることが必要である。若干改竄された現時の建築を眺めて、完全無缺の推古式の美建築であると賞讃するなどは、頗る苦笑を禁じ難いものがある。

序に、推古式裝飾文様の如きもその淵源の研究になほ不備な點が殘されて居り、その他の美術工藝等に關しても同様の憾がある。これは寧ろ工藝圖案家の領土に屬するが建築家としても重要視すべき問題であると思ふ。

4. 重　修　問　題

恰も好し今次我が政府は特に法隆寺伽藍重修を開始し、170餘萬の豫算を以て10數年の期間に於て、伽藍の堂塔門廊全部に亘つて徹底的大修理を施さんとするのである。寔にこれ斯界の慶事である。何となればこの工事は啻に建築物の歪みたるを正し、曲りたるを矯め、欠けたるを補ひ、朽ちたるを新にし、構造の弱きを補強するといふが如き普通の修繕でなく、更に之に由て極力法隆寺建築の本來の眞相を闡明せんとするの意味が含まれて居ると解せられるからである。

現に今、西院伽藍の食堂、細殿、東大門、東院伽藍の禮堂が工事中であるが、之を解體して調査せる結果、現形式が舊形式の改竄に由て若干の不自然不合理なる手法を加へたものであることが明示された。東院禮堂の下からは古柱の一群が發見され、夫が古への門趾であらうと言はれて居る。今後も此の種の事蹟が追ひ追ひ現出することゝ思ふが、これ等の貴重なる資料を死藏することなく、充分に活用して新しき研究の分野を開拓することが今後の大問題となると思ふ。數年の後金堂重修の時に當つては、特に愼重に調査研究を遂げ、何等か重要なる研究資料を得度いものである。

予は一面に於て、多大の希望を以てこの工事を凝視するとき、他の一面に於て非常なる不安の念に驅られるのである。夫は施工の技巧の問題である。元來法隆寺建築の貴重なる所以は、其日本最初の古建築であり、其様式の特殊にしてしかも一種端正崇高の美を備へ、而してその材料の仕上げが工具と工作の技術に由つて一種の素朴純眞なる趣味を生ずるに由る。今重修施工が如何に堅牢に如何に精巧に成就するとも、若も夫れが古代の古雅素朴の味を失つたならば、重修の功は之が爲めに全然失はれる。即ち作業の工匠は1300年前の人に爲り、推古時代の精神を以て、當時の工具を使用し當時の技術を以て施工しなければ眞の重修の目的は達せられぬ。併しこれは非常な難題である。難題といふと雖絶體に回避は許されぬ。是が非でも之を遂行せねばならぬ。如何にして之を遂行し得べきかゞ當面の

問題である。

工事主任の武田五一博士は目下工匠に遣鉋の使用を練習させつゝありとの事であるが、洵に我意を得たる處置である。但し何處まで夫が成功するか、なほ多大の不安は免れぬ。

獨り遣鉋の問題斗りでなく、何事もこの筆法で行けば大過はないのであらう。例へば垂木割などでも、嚴密に割方を定めて分厘の差なく、垂木の大さも一々厘毛の差なきが如きは、現代の工匠の心事としては當然の事ならんも、若も之を法隆寺に適用すれば全然古代趣味を失ふのである。結果形は法隆寺に酷似して味は全く之に異なるものとなるのである。元來古への工匠は天眞無垢にして素朴な仕事を爲したが故に粗と雖も純であつた。今の工匠がことさらに素朴な仕事を爲した結果は粗にして不純なものになる傾向があると思ふ。問題はこゝに在る。

次に世人の均しく疑問とするものは金堂の壁畵の問題である。之に就ては今詳說する時を得ぬが、一言にして云へば、金堂重修に際して壁畵を如何に處理すべきかの問題である。壁體は可なり危險の狀態に在るから、その儘にして金堂に工を加へれば當然壞崩の虞がある。之に對して壁體を硬化すべしといふ考へと、壁體を切り取て他の場所に保存すべしといふ考へとが併立して居るが、實際問題として兩者共に萬全を期し難いと思ふ。假に萬全を期し得るとしても茲に別に兩者に對する異議が起り得る。

壁體を現場に於て硬化する法は、藥液を體內に注入し表面に吹きつけるのであるが、之が爲に畵面は變色し畵の眞價は著しく減殺される。畢竟畵としての生命を奪ふものであるとして反對が唱へられる。壁體を切り離すことは、畵の保存には最上の策であるが、元來壁畵は金堂と不可分の性質のものであり、壁畵を失ふことは金堂の生命を失ふことになるとして反對される。双方共に五分五分の道理があるので、その裁量は相當困難であると思ふ。

5. 今後の法隆寺問題

今後の法隆寺問題は甚だ多い。一々これを解說することは姑らく省略し、只だ試にその題目を揭ぐることにする。

1. 法隆寺創立、再建、非再建問題の繼續
2. 法隆寺建築の本質問題の繼續
3. 法隆寺建築の淵源研究
4. 法隆寺建築の傳記編纂
5. 法隆寺建築全部の實測及寫眞の完成
6. 法隆寺境內の完全なる整理
7. 法隆寺の完全なる防火設備
8. 完全なる寺寶館の建設
9. 法隆寺の維持資金調達

以上は予の重要と思ふ項目であるが、之に關聯してなほ幾多の問題が起り得るのである。悉く之を完成するには幾何の金と時とを要するかは測り知られぬ。併し日本の最重要なる古建築で、同時に世界稀有の名建築である以上、何程の金と時を費しても是非上記の諸問題を徹底的に解決し度いものである。(了)

法隆寺の大修理計畫

工學博士　武田五一

法隆寺には各時代を通じて其代表的な建物を保有して居る。其總棟數四十二棟、其內國寶に指定されたるもの三十棟に及んでゐる、古きは飛鳥期の千三百年前のものより、近くは江戸末期のものまでも完全に殘されてゐるのである。完全に殘されては居るものゝ何分千三百餘年の歲月推移の間には、寺運の消長もあり、風雨の侵蝕、火災の暴威等幾多の災害にも曝されて堂宇の變遷常ならぬものもあつて、建築物の破損せるもの、或は不用意姑息の修理の爲めに原形を失ふたものもあり、明治卅年、古社寺保存法實施以來常に復原修理に努力はして來て居たものゝ、其棟數多くして貴重なる建物亦多數なる爲めに其修理の進捗はかばかしからず、其全部を完全に修理せんとすれば、從來の方法及經費の支出方法にては今後尙數十年を要し、其修理の終らんとするときは既に最初修理を了したる建物は再度の修理を加へざるべからざることゝなる如き狀態となり居れるを以て、文部省國寶保存局の當局者及法隆寺寺院側を代表せる聖德太子奉讃會の役員等の苦心努力の結果、昭和八年遂に帝國議會を動かして法隆寺建築物保存費として、國庫より年々七萬圓の補助を得ることに成功、國寶保存會費中より四萬圓、之に加ふるに寺院の負擔金として聖德太子奉讃會より1萬圓を得、合計金12萬圓を以て遂に昭和9年3月より國寶法隆寺修理の事業の緖に就た次第である。

元來法隆寺の大修理をやらねばならぬと云ふことの考へは大分に古いことである。岡倉覺三、平子鐸嶺君などがまだ生存されてゐて、喜田、關野兩博士がしきりに再建非再建で論爭せられて居たとき、法隆寺に參詣したり研究したりする人々が多くなつて、其廢頽の情況が世人の注意をひくやうになつて、遂に平子氏の死後法隆寺保存會を作らうと云ふ企ても出來たのであつたが、物にならず、其內に聖德太子一千三百年の御遠忌が大正10年に擧行せられたとき、其基金として奉讃會の集めた金が60萬圓以上にもなり、これが基礎となつて次第に大修理の談も具體的になつて來た。

法隆寺の修理に先行することは其防火問題であるが、之は昭和3年に大井博士と奈良縣當局との努力により、經費29萬圓にて出來上り、之等が緖となつて、遂に昭和8年の夏黑板博士、荻野文部省囑託等の非常なる盡力で、とうとう大藏省を說き落して非常時の苦しい國費の內から7萬圓を支出してもらい、之に前に述べたやうな金を補足して、12萬圓として修理工事に着手したやうの次第であつたのである。此修理は總經費170萬圓を計上し

其れを10年計畫を以て進めて行く豫定であつたのであるが、逐一審議の結果、其年度々々の支出として繼續費としての支出は出來ないこととなり、毎年17萬圓と思ふて居たのが初年は12萬圓となり、第2年の昭和10年度に於いては尙其れより7千圓の減額となつた爲め其10年間の修理期間は止むなく延長することになるであらうと思ふ。

法隆寺今回の大修理に於いて解體修理を加へんとする建物は

1. 食堂及細殿
2. 東大門
3. 東院禮堂
4. 東院鐘樓
5. 大講堂
6. 西圓堂
7. 地藏堂
8. 南門
9. 舍利殿繪殿
10. 傳法堂
11. 五重塔
12. 金堂
13. 夢殿
14. 聖靈院
15. 東院四脚門
16. 北室院
17. 新堂
18. 宗源寺四脚門

の18棟である。此內に於いて、最も困難なるものは大講堂、五重塔、金堂、夢殿の4棟である。此4棟は何れも法隆寺伽藍中最優の構造物であり、最も愼重なる注意を以て工事を進めて行かなくてはならない建物である。其內に於いて、金堂內には彼の世界的に種々の問題を提供して居る壁畵があり、五重塔內には同樣の塑像がある。尙之等建物の基礎下には種々の秘密を藏するとも云ひ傳へられて居ることでもあり、之等の解體に着手するときともなれば、定めし最愼、最密の注意を以て工を進めて行かなくてはならないかとも思ふのである。大講堂は昭和10年度より始めるが、金堂は多分昭和13年の中半期以後より着手し得ることとなると思ふ。

修理の方針は、飽くまで、現狀保存の主旨を以て進んで行く積りである。勿論永き年月

の間に加へられたる不注意、拙劣なる修補の爲め創立創建當時のものより、全然變更されたりと考へられるものも、其手法と、其當時の手法が顯著なるものに、不用意に之を原型と思はるゝ形に復原することはしない。若し解體の結果、明らかに中世修補の手法に無理があり、所謂合理的にオサムルことの不可能なるもの、或は構造上、材料使用上の智識の不足よりして將來建物の保存上不利益なりと認むる部分は充分愼重に研究して、之れを創立當時の原型に復原し、其修補前の形態は實測圖と寫眞とに由つて之れを保存し、其次第を報告書の形式を以て發表する考へである。

建築材料の撰擇も亦大なる注意を以てこれに充當することにして居り。例へば使用木材の如き之れを試驗片として其材種と產地とを學術的に檢討し、石材或は壁土も亦其種別を究めて其產地を踏破し、其原產地に就て之れを採取し、木材外部の塗料、壁土、膠着材の研究等、何れも近代科學の示す術式に由り、之を行ひ之を復製使用することゝして居る。尙、又建築加工の手法、例へば木材の鉋削り仕上げ方法、或は叩き床の手法、築地、塀、築造の方法、屋瓦の葺き方、屋根野地の構造方法等より、鐵釘の製作、打ち込み方法に至るまで、考へ得らるゝ範圍の研究を行ふことにして居る。

中世、寺運衰微のときに行ひたる修理には、其當時の古材を轉用して小屋材等に使用せるものがあつて、之を取り出し實測するとき、はからず、其建物の原形を考へ得らるゝことがある。既に修理を了したる南大門、或は修理半ばにある東院伽籃禮堂の如きは、其小屋組の內より原破風板の斷片、或は切り縮められたる前の飛檐棰の多數を發見した。

礎石は止むを得ざる限りは、之れに手を着けず、其儘にして置く方針である。其理由は修理後の建物の重さが、修理前のものより增さゞる限り、其基礎に補修を加ふるの必要がないからである。但し、礎石が風化消滅に近づくか、或は破壞して居る場合は之を新石材と取り換へなくてはならない。此場合と雖も、其礎石下を掘り起すことはなるべく遠慮して居たいと思ふ。東院伽籃禮堂床下の發掘作業は、偶然掘り出されたる敷石より遂には止むに止まれぬ順序として、其8尺餘の下部より堀立柱の殘存せるものを堀り起すことゝなつてしまつた。

尙、將來は金堂、五重塔、夢殿などと云ふ問題の建造物が登場して來る、恐ろしいような興味深き未來がある次第である。

法隆寺の建築

—其の燒失問題—

文學博士　濱田青陵

I

法隆寺伽藍の主要建築が、日本に於ける、否な東亞或は世界を通じて、最古の木造建築であるのみならず、其の美術的價値に於いても、他に比類少なき優秀なものであることに就ては、今更詳しく說明する迄もなく、今日に於いては我々日本人ばかりでなく、世界人の常識となつてゐる。併しながら、此の建築の實際建立せられた年代に關しては、從來種種の議論があつて、所謂「法隆寺燒失非燒失の論爭」として、30年來係爭の問題として、今に其の結著を見ないのである。固より此の論爭の結末は何うあつても、法隆寺が最古の木造建築であり、優秀な美術的價値を有するものであることに就いては變りがないのであるが、今此の論爭に關して極く簡單に其の經緯を述べ、且つ私自身の考へをも明かにして置き度いと思ふ。

II

法隆寺の伽藍は、推古天皇の十五年（A. D. 607）に創立せられたのであるが、其後60餘年、天智天皇九年（670）に、一屋餘す無く燒失したとの明瞭な記事が『日本書紀』に出てゐるに關らず、寺家などに於いては、推古朝建立の儘であると傳へ、或は明治以後美術愛好者の尙古趣味などから、法隆寺の建築其他美術品が、推古時代のものであると信ずる人が多かつたのに對して、文獻上から其の燒失を高唱せられたのは、明治の中頃に於ける黑川眞賴、小杉榲邨兩翁であつた。併し此等の人々は藝術の樣式に關する深い了解があつたとも思はれず、たゞ文獻のみに由り、物質的資料の吟味を竭されなかつた、所謂舊式の純歷史家の態度に過ぎなかつた。

之に反して法隆寺の建築美術を、新に學術的に研究せられたのは、當時年若い學徒であつた伊東忠太、塚本靖兩博士であり、塚本氏が裝飾美術を取扱はれたに對し、伊東氏は東亞諸地方に於ける頗る不充分なる當時の知識を以て、なほ法隆寺の中門、金堂、塔樓、廻廊の諸建築は、其の燒失後の再建たると、非燒失たるにを問はず、樣式上推古時代即ち飛鳥朝のそれを示してゐると論じ、又その裝飾文樣等に、西方の影響を認められたことは、

美術史上に於ける大スケールの見方として、今日に於いても我々の敬服を禁じ得ない所である。實は以下述べるが如く、長い間の論爭を續け來つた今日に於ても、其の主旨に於いては、之れ以上に何者をも新に附加し得ないと云つて差支ないのである。

III

然るに茲に法隆寺の主要諸建築は、推古時代の樣式に屬するばかりならず、『書紀』の燒失に關する記事は、全くの誤謬であり、推古朝建造の儘のものであると云ふことを立證せんとする學者が、明治後葉の始めに現はれ來た。その一人は關野貞博士であつて、博士は金堂以下の主要建物が、奈良朝以後施行せられた唐尺に由つて設計せられず、其の以前通用の高麗尺で建てられてゐる事を實測の結果數字の上から證明しようとせられたのである。また之と殆ど同時に平子鐸嶺氏は、文獻の上から、『書紀』にある天智九年庚午罹災の記事を疑ひ、是は同一火災の所傳と思はれるものが、『上宮聖德太子傳補闕記』と云ふ書物に、推古18年庚午としてあるので、『書紀』の編者が、干支一巡を誤つて、60年後の天智九年に繫けたものである。從つて推古朝に燒失しても、直に再建修理せられたと見る可く、今日現存の建築は其後燒失したことのない、推古朝の遺物であると唱道した。是は一見頗る巧妙な說であるが、之と相似たのは、最近提出せられた會津八一博士のそれであつて、氏は『補闕記』とは少し異つた『扶桑略記』の記事を採つて、法隆寺は推古15年、即ち創立後同年中に炎上し、其後金堂は推古30年、塔は舒明の朝に再興せられたものである、『書紀』の天智罹災の記事は、やはり此の推古朝の火災を誤り記したものであると云はれたのである。

IV

關野博士や平子氏の非燒失論が現はれると、當時世間では多く此の新說に耳を傾け、或は之を以て最早法隆寺燒失非燒失の問題は決定したと信ずるものが多いやうに見えたのを憤慨して、小杉氏の意志を繼いだ喜田貞吉博士は立つて、關野博士の尺度論を駁擊し、『書紀』の記事の決して疑ふ可からざるを高唱せられた。即ち喜田氏は、法隆寺の建物が高麗尺を以て設計せられたる證據あるも、其れは再興に際して、舊尺度を襲用したのに過ぎず、唐尺使用後と雖も、舊尺の使用全く跡を絕つたとは考へられないと論じ、其他の理由より、天智9年の罹災を疑ふ餘地はなしとせられた。又た平子氏の說に對しては、『補闕記』の如き、稍々後世私撰の書は、其れよりも古い敕撰の正史の說を覆すこと能はずとして一蹴せられた。近く現はれた會津氏の說に對しても、喜田博士は勿論同樣の態度を以て、手ひどく反擊せられたことは云ふ迄もない。

此の關野博士、平子氏の說に對する喜田博士の反駁說をきつかけとして、明治38, 9年の歷史美術界は、甲論乙駁、法隆寺の論爭を以て賑かされたのであるが、固より大審院の裁判を以て決定すると云ふ樣な筋ではないから、兩說互に水掛論を以てウヤムヤに終息し、

各々自ら信ずる所を改める人もなく、其後約20年、最近に至つて會津氏の說が現はれて、燒け棒杭に火がついたと言ふ感を起こさしめたことである。

V

以上は明治の學界を賑かし、なほ最近に至るも結末のつかない法隆寺燒失、再建等に關する所謂「法隆寺論爭」に就いて、極く其の要點を摘記したのであるが、私自身は此の論爭に對して、固より深い關心を有し來つた一人ではあるが、幸か不幸か、直接論爭の渦中には飛び込み、或は卷き込まれなかつたので、諸家の所論を其の積りで精しく讀んでは居ず、讀んで居つても忘れてゐるので、今一々之に對して批評をする資格も準備もない。併しながら、今も私が持つてゐる態度をば茲に言明して置くのは敢て無用のことでもなく、或は之を私に期待してゐらるゝ向もあることゝ思ふのである。たゞ之に就いて私は既に先頃雜誌『夢殿』の上に、發表したこともあるので、今はたゞ其の大體を繰返へすに止めることゝする。

さて關野博士の尺度論は、之に對する喜田博士の駁論、また三浦周行博士の論などがあるにせよ、尺度の如き科學的根據を以て、遺跡遺物に臨み、之を立論の基礎とせられたことは、確かに考古學上新しい方法を採用せられたものとして、法隆寺論爭に一の「ダイメンション」を加へたものと云ふ可きである。併しながら、喜田氏も言はるゝ通り、舊尺が復興の際、特に舊樣を墨守する工匠によつて使用せられることも充分可能であるから、是は非燒失の絕對的證據とはならない。併しながら、之と同時に法隆寺が少くとも舊樣に由つて作られた推古式に屬するものであることを、雄辯に證據立てるものであると云ふことが出來る。

之に反して平子、會津兩氏の干支一運錯誤論を根據とする推古朝燒失＝天智朝非燒失論は、『日本書紀』の他の多くの記事に於いて、同樣の確實なる錯誤が立證せられ、若しくは『書紀』と同じ價値、或は其れ以上の文獻が現はれて來ない限りは、史家が文獻取扱の鐵則上、どうしても『書紀』よりも價値の低い『補闕記』や『扶桑略記』の記事を以て之を覆へすことは出來ない。それを若し自說の便宜上やることになれば、歷史の研究は全く其の權威を失ふことになるのである。

VI

然らば法隆寺論爭は結局どうなるかと云ふに、私は其れは結局對立の儘、永久に殘されるものであると思ふのである。歷史文獻派の學者は如何に勅撰の歷史『日本書紀』を楯に取らうと、なほ之と同樣の價値のある文獻が、更に多く現はれて來ない以上、一或は現はれて來ても、誰れが現在の新聞乃至公文書が、凡に於て一毫の誤りなきを云ひ得る者があらうか。況んや數十年數百年以前の事を記した書物に於てをやである。我々は官撰の正史を

信じ度いのである、併し今論爭は此の正史の記事が被告となつてゐるのである。正史たるの故を以て、其の記事の正確を保證することは出來ぬ。必ずや他の證據物件が要るのである。而かも美術史家の多くは其の反證に近い材料(絶對の證據とはならないが)をさへ提出しつゝあるのである。然らば例へば伽藍の境內を發掘して、燒土、燒瓦があれば、其の證據となるかと云ふに、全面に亘つて其れが殘存堆積してゐる場合ならば格別、僅かな分量では證據とはならない。また反對に燒土、燒瓦が一部分にないとて、(或は全部にないとても)其れは非燒失論の絶對的證據にはならないのである。

VII

それでは次に樣式論者の多く支持する非燒失論はどうであるかと云ふに、尺度論に關しては、已に以前に述べた如く、たゞ其の樣式が推古式に屬することを證する以上に、非燒失の絶對的證據とはならないのである。また法隆寺の主要建築が、支那南北朝に行はれた樣式に屬するものであることは、伊東博士が古く述べられた通りであり、其後伊東博士自身をはじめ關野博士、其他內外の學者に由つて東亞各地に於いて、此の20年來探究せられた結果、北魏の雲崗、龍門、天龍山等の石窟上に於ける、或は朝鮮高麗古墳壁畵上に於ける所見等に由つて、愈々明かに證明せられ來つたのであり、私自身も此の南北朝建築の特徵たる雲形材料の如きは、所謂「空想形式」(fancy-form)として、之を漢代石闕などに現はされたものと比較して、漢代以來の古い樣式の「レムナント」であり、斯かる樣式は唐代に至つて漸く衰へたものであると論じた所である。斯の如く此の樣式の盛行は南北朝に在り、從つて其れを模倣したのは推古朝であつても、支那自國に於てさへ、其れが唐朝に至つて忽然として跡を絶つたとは斷ぜられず、況んや舊樣式が少し遲れて遺存し得可き日本に於いて、特に再興の場合などに於いて、推古時代以後も行はれなかつたとは云はれないのである。樣式論は到底其の絶對年代を確言し得ないのであり、又た確言せぬ所に其の長所と妙味とがあるのである。

VIII

私は自分の專攻する學問の性質上からも、「樣式」なるものを重んずる一人であるが、而かも之と同時に、「樣式」なるものゝ語り得る範圍を細心に吟味するものである。私は古物を愛することに於いて敢て人後に墮ちない。法隆寺は感情上草創の儘のものとし度いことは山々であるが、樣式上到底之を確言し得ないのを寧ろ遺憾とする。私が曾つて云つた如く、天智9年の火災に法隆寺が全燒してしまつたとは考へられない。普通如何なる大火でも、多少の燒殘建物はあり、それによつてよく舊樣式が復興せられ得るのであるが、之も畢竟一箇の想像たるに止まるのである。又法隆寺に如何に多くの推古朝の舊物が保存せられて居つても、是亦た非燒失の絶對的證據とはならぬのである。それは持出すことも出來、

後に他から移入することも有り得るからである。要するに、文献と様式と雙方議論の立脚地を異にするものであるから、違つた種類の數字を加減出來ないと同様、太刀の相交はらぬ、川向ひで、互に獨り喧嘩をしてゐる類である。藝術様式上の研究が如何に精細になり如何に法隆寺が燒失しなかつたらしくなつて行つても、燒失しなかつたとは立證することは出來ない。之と同時に文献派が『書紀』を況んや他の雜書を根據としても、其の絶對事實を證明することは出來ぬのである。それ故我々達の到達し得る結語は

「法隆寺が天智天皇9年に燒失したと、『日本書紀』に出て居るが、其の主要建築は、なほ推古時代頃に盛行した、支那南北朝の様式を示してゐる」

と云ふ簡單平凡なものに盡きてゐる。それは或は燒けなかつたかも知れないが、或は燒けたにしても舊様式が、特に或は當時なほ行はれて居つたので、襲用せられたと云ふことを意味する。而かも之によつて我が法隆寺の美術史上に於ける他に比類なき位置は、少しも動搖しないのである。

〔附記〕 以上私の議論の盡さなかつた所を補足す可き、私自身の論文三四をメンションして置き度い。

(1)「法隆寺の建築様式と支那漢六朝の建築様式に就て」(内藤博士還暦記念論文集)

(2)「法隆寺金堂と六朝石窟寺」(寶雲、第六册)　(3)「法隆寺論爭我觀」(夢殿、第十二册)

法隆寺式伽藍配置に就て

工學博士 藤島亥治郎

1. 序　　言

飛鳥時代の伽藍配置を分類して二種となし、一を四天王寺式と稱して塔と金堂とが前後するものを指し他を法隆寺式と稱して塔と金堂とが左右するものを云ふ。そして、前者は明かに大陸の伽藍樣式を踏襲したものに過ぎないが、後者は支那朝鮮を通じて此の種の遺例が無く、且左右均齊を破つた性質が大陸的ならぬ點より見て、飛鳥時代に日本に於いて創意せられたと見る：之が飛鳥時代伽藍配置に關する學說であり、且定說とならんとしつつあるのである。

以上の說の中、四天王寺式に關しては全く問題はない。支那洛陽の永寧寺、朝鮮慶州の皇龍寺の如き此の配置による伽藍があつたからである。併し、法隆寺式に關しては、大陸に遺例がなく、且日本的だからと云ふ漠然たる根據の下に稱せられて居るに過ぎないのであつて、現在の所では斯う推考する他がない事は私も等しく認めるのであつて敢て反對すべくもない。

唯、近年發見に係る百濟の寺址に多少法隆寺式を思はすものあるを茲に紹介して多少の參考に供するに止めたい。之を以て在來の法隆寺式配置論を變改しやうと迄は考へないし、又、變改すべき資料としては尙、頗る薄弱なのである事は先づはつきりと御斷りして置くのである。

2. 飛鳥時代伽藍配置の源流

飛鳥時代の佛敎建築が百濟に負ふものである事は云ふ迄もない。從つて、飛鳥時代建築や伽藍配置は必ずや百濟にあるべきであつた。然るに百濟には一の木造建築、一の伽藍址の存するものなしとした。四天王寺式配置の原型も百濟ではないが、百濟と同一樣式に據つたと考へられる新羅の皇龍寺址の現存配置により、間接的に之を知るに過ぎない。百濟の佛寺は新羅に滅ぼされてより全然廢滅に歸したか、若しくは新羅佛寺として繼續したのであつて、純粹百濟佛寺址の遺存するものは一もないとせられた。たゞ、百濟創建の佛寺で新羅時代に繼續したものゝ中には百濟時代の配置を多く變改せずと認められるものも無いではない。例へば、全北益山郡彌勒寺は私の考では百濟時代既に創建せられたと思へるが、其の寺址に就て見るに、四天王寺式配置に依る伽藍を三處に、三尊鼎立の狀態に配し

た伽藍である事が察せられる。

然るに、近年に到り百濟最後の王都であつた忠淸南道扶餘を中心として二三の百濟時代佛寺址が發見せられた。之は昭和7年より9年まで扶餘古物陳列館囑託たりし大坂金太郎氏の熱心な探索の結果であつて、氏の功績は稱するに餘りある。下記王興寺址の考察も氏の研究になる所が多い。尙、之を機會として今迄殆ど不明であつた扶餘舊都の眞相が漸次判明する機運に向ひつゝある事を附記したい。

3. 王興寺の伽藍配置

扶余は　聖王十六年(西紀538年、宣化天皇3年)より百濟の滅亡、即ち義慈王二十年(西紀666年、齊明天皇6年)まで、百濟が都して泗沘と稱した地で、我が國に佛教を傳へた聖王(日本書紀の聖明王)を始め、各代日本に深い關係を有し、恰も飛鳥時代に相當する時代に當るから、飛鳥時代の伽藍の源流は勢ひ直接的には扶餘に求むべきである。

扶余の代表的伽藍は王興寺である。此の寺は法王三年(推古天皇8年)に始る、武王三十五年(舒明天皇6年)工を竣へ、前後34年を費した大伽藍で、我が法隆寺に先んじて起工せられ、遲れて完成した事になる。勿論官立の寺であつて、王が屢々遊幸した記錄を止めて居る。

斯くの如き重要な寺であるから其の寺址に就て多くの學者から考究せられた。其の位置が三國史記に

其寺臨水、彩飾壯麗。王每乘舟。入寺行香。

とあり、又別の所に

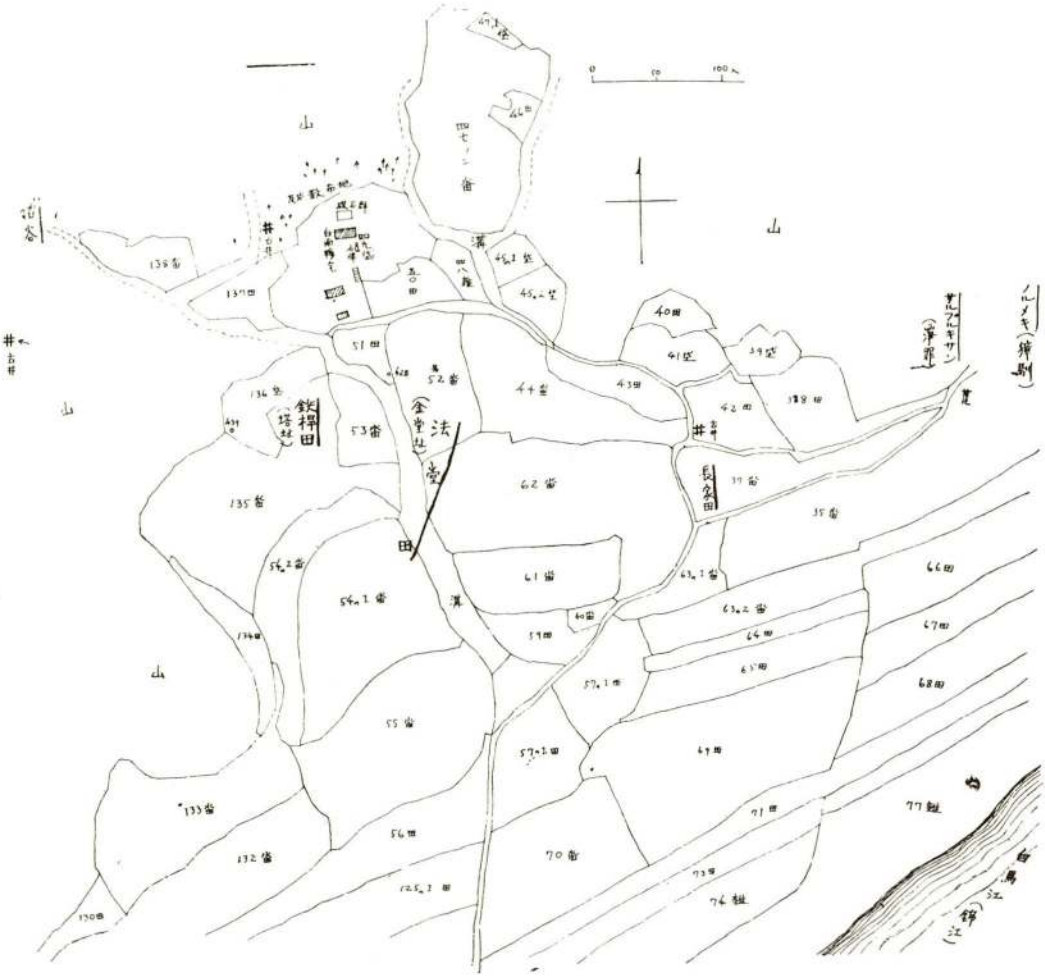
王興寺衆僧皆見若有船楫隨大水入寺門。

とある所より、都の北端に位する泗沘王宮より錦江に棹して行くべき所と考へられ、從つて現在有名な大唐平百濟塔のある寺址は之に比定し得られず、或は都の西南部白馬江の畔に擬せられた人もあつたが、確證を得ずに終つて居た。又、三國遺事に、

泗沘崖有一石。可坐十餘人。百濟王。欲幸王興寺禮佛。先於此石望祀、其石自煖。因名迎石。

と記す自溫台が白馬江の對岸窺岩面にある事より此の地方に寺址を求めつゝある人もあつたのである。

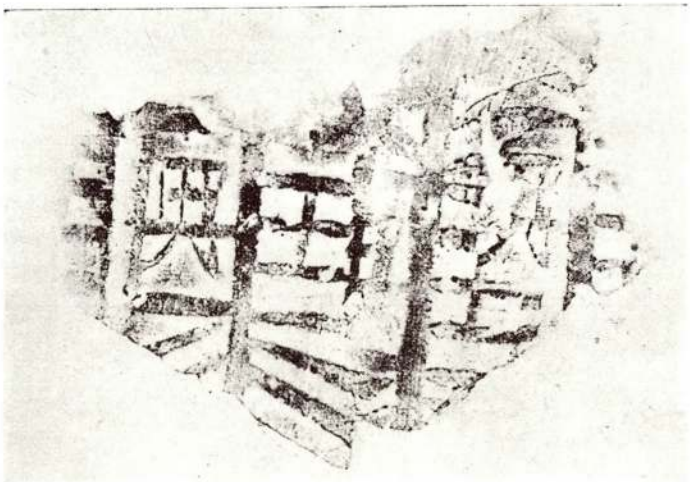
果然此の方面に王興寺址が終に發見せられた。即ち、昭和8年12月17日扶余公立普通學校訓導盧道陽氏が偶然窺岩面新九里より「王興」在銘の平瓦を發見せられたのに始る。其の後此の種の在銘瓦數種の他、刻文瓦の多くが發見せられ、本寺址が往時の王興寺址なる事が決定せられ、多年の疑が茲に釋然として解けたのである。尤も、在銘瓦は悉く高麗時代の瓦と考へられ、百濟時代のものは見當らないが、恐らく高麗時代まで連綿として法燈を傳へたものと解すべきであらう。



第1圖　王興寺址平面圖



第2圖　王興寺址南より見る。正面の山は蘿城山。路の突き當りは白南軫氏宅。
路の左は鐵桿田、右は法堂田。



第3圖　「王　興」在　銘　瓦



第4圖　王興寺礎石(臺の臺となり居るもの)

此の發見を端緒として、各種の考究が大坂氏を中心として爲され、終に昭和9年春、大坂氏より法隆寺式配置を想起すべき根據があるから是非一見する様にとのお勸めを得て居た。幸にして同年夏、私は日本學術振興會の援助に依る慶尙南道の建築調査の餘暇を得て、9月　日、盧道陽氏等の案内で寺址を審に調査する事が出來た更に、扶余古物陳列館保管の同寺址出土の瓦の撮影拓影を得たが、之れ偏に同館囑託洪思俊氏の好意に依るものであり、後、私の依頼に依り、洪、盧二氏が寺址に關する地籍圖を送つて下さつた。挿入圖は此の結果に依るものが多い。茲に厚く上揭各氏の御好意を謝す次第である。

王興寺址は泗沘山城の王宮故地を距る事遠からず、百濟最後の悲慘な歷史を止めた落花巖の西南に稈近く、碧水洋々たる白馬江對岸の景勝の地を占め、自溫臺は其の南岸に位置するから、記錄の示す如く、宮門を出で白馬江を西に横切つて自溫臺に到り、北航寺門に達し得るのである。北後には蔚城山高く三角狀に聳え、中腹を圍繞する城壁は百濟の阿尼城である。其の左右山丘は南に伸びて靑龍白虎の勢をなして江に到る。是等の山丘に三方を圍繞せられ、南方白馬江に臨む平坦地は東西約2丁、南北約3丁、北方はやゝ高く數棟の民家あり、その南方漸く降つて一面に蕎麥畑又は稻田となり、南端は著しく低濕の地であり、白馬江增水の際は一面に氾濫する所となると云ふ。或は往時は此の部分も江の一部

であつたかと考へられ、大水に隨ひ寺門に入るの記事は愈々潑剌として生きるのである。

此の平地の略、中央を北上する道があり、自ら伽藍の中央參道の名殘を止めるかの如くである。此の道を行き詰めた所に白南軫氏宅あり、之を中心として主要堂塔があつたらしい。宅前の庭に石佛と認められた石があるが、私の見た所では風化甚しく、果して石佛であるかを究め難かつた。併し、同宅の土壇廻りには立派な花崗石造の土臺石あり、所々に八寸角の造り凹めを穿ち、其の間隔6.77尺。之を當時の尺度で六尺と假定すれば、其の一尺は曲尺の1.13尺弱となり、略、飛鳥時代に使用した東魏尺（その一尺は曲尺の1.176尺餘）に近い。又、後庭の醬壺臺に使用されて居る數箇の礎石は何れも風化磨滅せぬ花崗石製で上面を方2.56尺乃至2.48尺に造り出した百濟常用の樣式に成るものであり、是等は何れも百濟時代の遺物と認められる。

其の他にも此の種石材は各所に散在して居るが、何れも移置されて居り、舊狀を保つものは一もない。古老の傳へに依ると、明治初年まで礎石の羅列を止めたが、對岸に住宅を築營の際其の多くを搬び出して土壇や階段に用ひられて了つたと云ふ。現に對岸に此の種の石材が頗る豊富に使用せられて壯觀を來して居る家がある。頗る惜しむべき事である。

宅の背後に竹藪あり、在銘瓦は此處より發見せられたと云ふ。

宅の前方は一面に低い田である。此處に最も重要な事實を認める。

其の一は、路の西方135號水田の北部を里人は古來セツテーベキー・ノン（Suete-bekii-non）、譯して「鐵棒田」と稱する事である。鐵棒とは何であるか。按ずるに、塔頂を飾る相輪であらう。塔は廢滅して相輪が永く地上に放置せられた所より起つた名稱であらう。然らば此の地に塔婆が存在した事になる。

其の二は、路の東方、52號水田、62號水田の西部より路を越えて135號水田の東部に亘り里人は古來ボブタング・ノン（Boff-tang-non）譯して「法堂田」と稱する事である。法堂は即ち金堂と見て可であらう。地域は廣漠として要を得ないが、要するに塔婆の東より東南に當つて金堂が存したと解せられるのである。

扨て、地勢上、寺は南面した事明瞭である。然らば、伽藍が天王寺式であるならば法堂田は少くも塔婆の北方にあるべきである。然るに、東方乃至東南方に存する事は、宛然法隆寺式配置を想起せしめるに足りるではないか。堂塔の間百尺前後で、此の式としては尺度上からも先づ常識的な間隔と見てよいのである。そして白南軫氏宅地附近は講堂若しくは僧房の種類の建築所在地に當る譯である。

本寺址には尚、多くの飛鳥奈良時代の伽藍配置を止めて居て興味が深い。第一に、僧房の側に井戸があるべきであるが、本寺址には白南診氏宅後西方と、東南方41號堡地西端路傍と、西方チユンコル（Chun-kol, 僧谷）との3箇所に古井がある。恰も東室、西室、北室を暗示するが如くである。而も、東方古井の南方、恰も法堂田の東方に當り、チン（チヤ）チブ・ノン（Chin (cha)-Chib-non. 長家田）と里稱せられる蕎麥畑あり、「長い家」なるもの

が僧房形式を如實に物語るかの様である。

更に東方山際にサルプルキサン(Salpulki-san)の地名あり、「淨罪」を意味し、その先にノルメキ(Norumeki)あり、獐馴を意味し且つ鹿野苑を連想せしめ、共に佛寺と大いに關係あり氣に見える。

是等の地名の存する所を悉く寺域に加ふれば、寺域は頗る廣汎で殆ど平地の全部を占める。たゞ、その北半、白氏宅後方は地勢頓に隆起傾斜し、現在では到底寺堂の建つべき様な所でない。惟ふに、當　廢滅後數百年間に後方の山土が地壤の荒廢に伴つて前方に押し出して來て(支那、朝鮮では得て有り勝ちである)平坦部を埋め、現在の地形をなしたのであらう。從つて往時は現在の地形と異なり、後方に更に平坦の地あり、前方灣入する白馬江を控へた坦々たる寺地を成したものであらうと信ぜられる。

4. 結　　語

以上、王興寺址を叙して岐路に亘つた點も多いが、此の際に述べさせて貰つた迄である。要するに、本稿に於いての重要事は、金堂と塔と東西對立の勢をなした所謂法隆寺式配置を思はす點あるを指摘した事である。但し、既に荒蕪の限にある寺址であるから決定的論斷は頗る危險である。第一、里人傳へる各種の小字名が幾何の史實的價値を持つやに就て考へねばならないが、本寺が高麗時代まで繼續したものであるから、名稱は其の後の發生に依るのであつて比較的新らしく從つて變改の餘地が少く、且つ地名が案外に眞を傳へる事は内地の各種の例で屢々體驗する所であるから、略、信ぜられると思ふ。

法隆寺式配置らしいものが百濟故地に見付かつたとは何としても奇怪である。それが當然だとも、そんな筈はないとも考へられる。私は之に關して現在は其の何れをも採らうとしない。より確實な資料の出現で決すべき事項である。たゞ、法隆寺式配置の現在の觀念が餘りに一方的でないかと惶れるの餘り、百濟の例を引いて、多少の注意を一般に强いた次第である。(昭和10年5月17日)

法隆寺食堂所用材料に就て

大瀧正雄

法隆寺國寶建造物の大修理が昨昭和9年から着手されたことは既に御承知の通りであるが、昨年度に於て修理工事に着手した東大門、食堂及細殿、東院禮堂及び、鐘樓の內、東大門は本年2月に竣功、食堂及細殿は3月に竣功し、他は引續き工事中である。總て今回の修理工事に當つては、所用材料の調査を充分に行つて、成るべく在來のものと異らざる材料を用ふることゝしてゐる。在來のものといつても、建立當初からのものと、後世補加したものとあるが、概して云へば、建立當初からのものは材質が良好であり、後世補加されたものはあまり良くない。これは後世修理の際に所用材料の吟味を充分しなかつたのに因るであらうと思ふ。材料の調査は、それが何であるか、即ち、木材で云へばそれが檜であるか、槇であるかといふ判定の他に、檜といふことがわかつても、それが現在の檜と品質、強度等に就てどう違ふかといふ比較もしなければならないので、仲々短時日に全部をやつて仕舞ふことが出來ない。現在當事務所に於ては、特別の調査機關を設けてこれらの調査をしてゐるのではないので、充分にやるには仲々の時日を要するが、國寶の修理工事、まして1300年來の由緒ある法隆寺の修理には、この所用材料の吟味といふことは欠ぐべからざる重要なるものと考へて現在調査を續けてゐる。

さて、食堂所用材料のうち、こゝに御紹介するのは、食堂建立當初のものと思はれる石材及び瓦に就てゞある。併し前述の如く、材料の調査も緒に就たばかりであるので、極く概略に止めたいと思ふ。

食堂所用の石材の內古いと思はれるものは柱礎石である。これは厚さ43糎、一邊約60糎



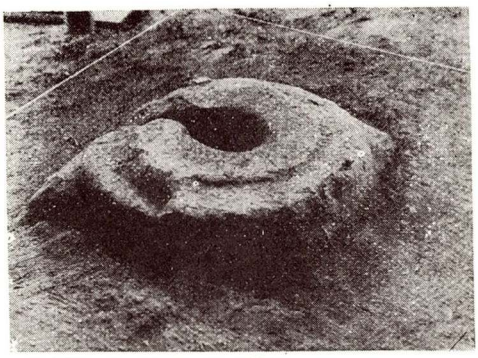
第1圖　食堂礎石全景



第2圖　食堂內部礎石

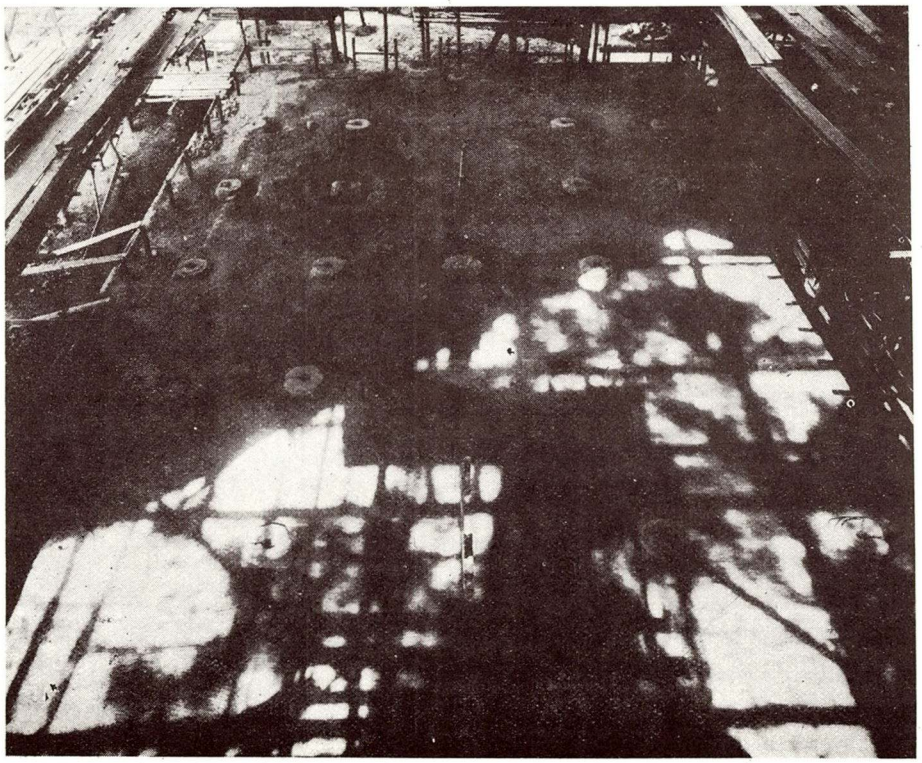


第3圖　食堂前面礎石



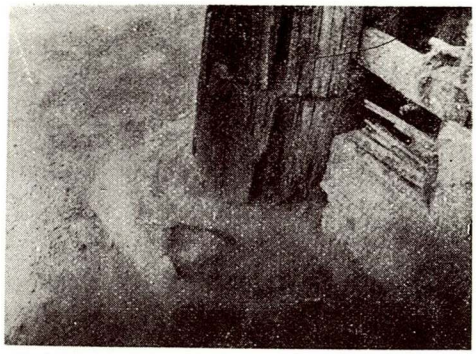
第4圖　食堂背面礎石

の立方形で下方は稍狭り上端には寫眞**第1圖**に見るように圓形刳り出しがあり、中央に圓形枘穴を穿ち、一方に溝を掘つてゐる。この形式の礎石は奈良時代によく使用されたもので、食堂の建立年代を知る一つの鍵となるであらう。この上部の圓形繰り出しに三種あつて、**第2圖**に示すもの20個、これは內部の礎石として用ひられてゐる。**第3圖**のもの6個、これは二重刳り出しを有するもので、前面の礎石に用ひられてゐる。次は**第4圖**のもので、背面礎石として用ひられ、一部二重の刳り出しとなつてゐる。この圓形刳り出しの種類が三種あつて、これが前面、背面、內部と使ひ分けられてゐるといふことは、從來知られて



第5圖　食堂礎石配列

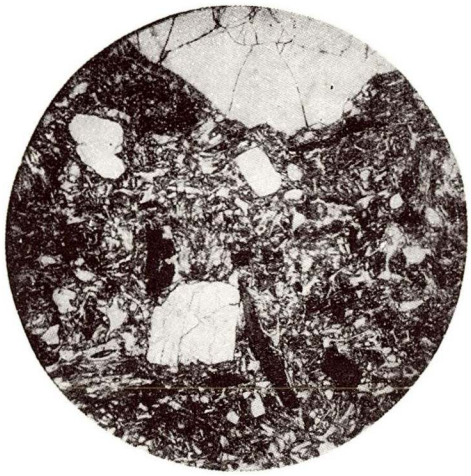
居ないことで、如何なる意味をもつものであるか不明である。食堂礎石總敷34個のうち、北側兩端のものは後世取換へられて花崗岩となつてゐるが、その他は總て食堂創建當初のものと思はれる。(**第5圖**、向つて右が正面柱列)


第6圖　食堂礎石破壞狀態

この石質を見るに、表面より厚さ約1糎位は稍硬化して淡褐色を呈し、表面は多少平滑で光澤のある部分もあるが、內部は淡褐色又は白色で、外皮に比べて著しく脆弱である。その爲に外皮の一部が剝離した部分では、內部の崩壞が容易となつて、著しく凹んでゐるものもあつた。(**第6圖**)この岩石の表面のみ稍硬化してゐることは比較的孔竅に富んでゐる岩石にはよくある現象で、これは岩石孔竅中に浸潤した所謂坑水中に溶解してゐる珪酸、鐵分、石灰質その他の物質が、水分の蒸發に伴つて毛管現象により岩石表部に近く集中沈澱するによるものと信ぜられてゐる。建築物各部位に於ける礎石の風化崩壞の模樣を見るに、外部に面するものは岩面の損傷の部分が比較的多いが、內部のものと雖も風化を免れることが出來なかつたやうで、多少の損傷をも認められた。外部に面するものゝ內で風向等によつて風雨に曝露されることの多寡による崩壞の程度の相違といふことはあまり顯著ではなく、背面即ち、北側のものが稍崩壞が著しいやうに見受けられたが、それは自然的の原因よりも偶然の機械的衝撃が誘因となつて、石材面の硬質薄皮が損傷され、內部が比較的脆弱なる爲に崩壞が促進されたものが多いやうである。建物內部に使用されたものゝ內、荷重の爲に破壞分割されたものが一個あつたが、(**第7圖**)これによつて見るに、石材の中心部に至るまで一樣に風化變質して白色乃至淡褐色を呈してゐた。この石質の調査には京都帝國大學理學部講師春本篤夫氏を煩はしたのであるが、この石質決定の概略を述べることゝする。

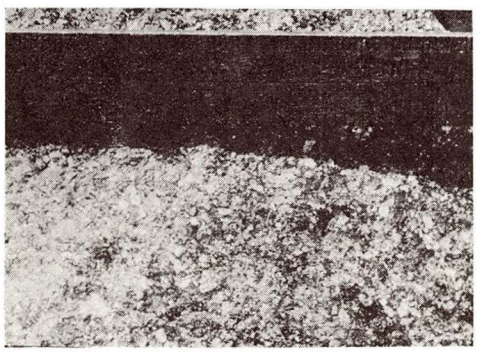

第7圖　食堂礎石斷面

この石材は一見白色凝灰岩樣の外觀を呈してゐるが、之れを薄片として顯微鏡下に檢する時は明らかに火山岩の組織を示し、人造石等の疑を挾む餘地は全くない。即ち淡褐色乃至無色の著しき流理を示す玻璃質石基中に、石英、長石、黑雲母の斑晶を散點し、この他に輝石類の變成物と見らるゝ黑色不透明の鐵質物を含み、稀には柘榴石の微晶を認むるこ



第8圖　食堂礎石顯微鏡寫眞

とがある。(**第8圖**) これは明らかに石英安山岩、精密に云へば、黒雲母流紋石英安山岩(Biotite Rhyodacite) と稱せらるゝものである。岩石學的に見て之れと同質の岩石の産出地を法隆寺附近に求むるに、奈良縣山邊郡都介野村、東里村、針リ峠、別所村、宇陀郡三本松村等で、往昔に於ける食堂石材の搬出地も恐らく、この方面であらうと推測される。中央近畿地方に於て、石英安山岩の産地としては前記の他に、大和河内の國境上に於ける二上火山に屬する寺山、鉢伏山四邊にも産するが、これら兩者は顯微鏡下に於ては明瞭に區別することが出來るのである。



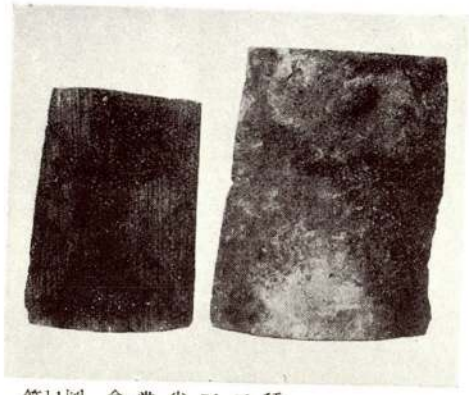
第9圖　石英安山岩

さてこの食堂礎石と同質の石英安山岩で風化しない新鮮なものは、現在の食堂礎石とは全く外觀を異にした、黒色堅緻の玻璃質石基中に石英、長石、黒雲母等の斑晶が散點してゐるもので、(**第9圖**) この耐壓、耐火、その他物理化學的試驗は目下進行中であるが、類似岩石についての試驗の結果は花崗岩に比して著しき遜色を認めないやうで、殊に耐火力については花崗岩に勝つてゐるやうである。



第10圖　白石堂山石英安山岩産出狀態

食堂の礎石が當初使用された時に、どの程度に新鮮なものであつたかといふことが疑問とされるが、現在産出地の狀態を見るに、風化の進んだ脆弱部は、地表に於ては流水等の爲に容易に削剝され、又は破碎し易くて、相當に大なる石材として採取は困難であることより察して、使用當初は新鮮なる黒色堅緻のものであつたと想像される。それが1千餘年の長年月を通じて大氣に曝露された爲にこの6ヶ糎立方の岩石の中心部に至るまで風化變質したものと考へられる。今回修理に際して、在來使用のものと同質の石英安山岩を得る爲に、縣下宇陀郡、山邊郡を探査の結果、食堂礎石採取に最もよき條件を備へる地



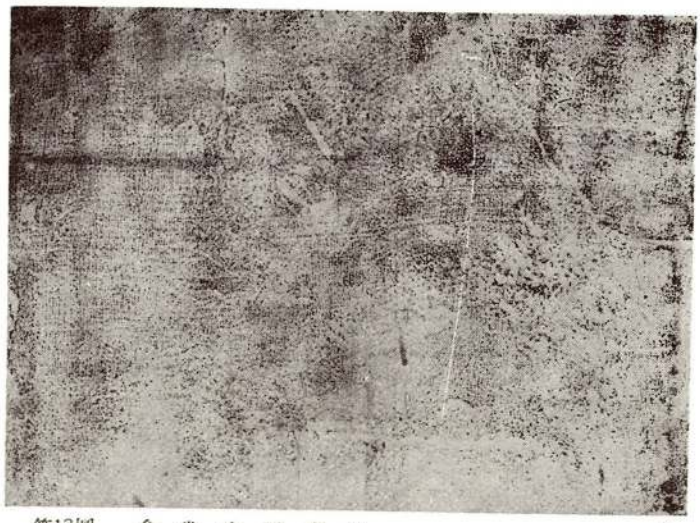
第11圖　食堂半瓦二種

として、山邊郡都介野村白石俚稱堂山を選んだのである。（**第10圖**）この地より採取の石英安山岩は黒色堅硬の新鮮なるもので、これを在來の通りの形に加工して用ひたのである。

次に屋根瓦に就て述べやう。現在使用されてゐる瓦は、新舊雜多で各時代のものを混用してゐるが、一番古いものと思はれる瓦が二種ある。その一は前巾約325mm. 長さ約485mm. 厚さ約20mm. で、內面には布目を有し、外面は篦にて摺り均し又は指にて押へつけたものゝやうで指紋の見られるものもある。**第11圖**の右の大きな方がそれで、**第12圖**、**第13圖**はその表裏の拓本である。これは形狀、品質共非常に不揃ひで、且つ凍害を蒙つてゐるものが多い。食堂の瓦としては少し大きすぎるやうであるが、先年出土した瓦にはもつと大きなものもあつたやうであるから、或は昔はこの位の大きさのものを用ひたのかも知れない。この瓦



第12圖　食堂大瓦表面



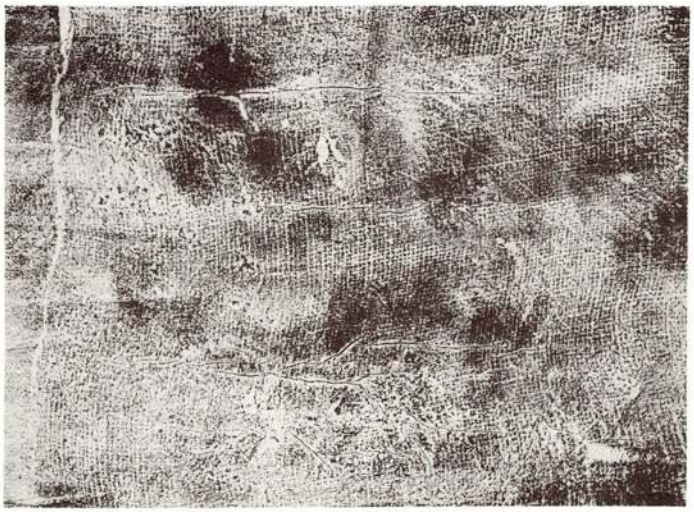
第13圖　食堂大瓦裏面



第14圖　食堂大瓦戲畫



第15圖　食堂繩目瓦表面



第16圖　食堂繩目瓦裏面



第17圖　食堂丸瓦

の內に一枚筮書で堂の形を描いたものが發見された(**第14圖**)。

これは法隆寺金堂の如き建物の形を描いたものらしく、重層の堂で大棟の兩端には鴟尾を附してゐる實に珍らしいものである。この種の瓦の破壞したものを見るに、土質及び燒き方等區々であつたらしく、內部の黑きもの、白きもの、綠色、橙色等その他緣のみ白く中黑きもの、その反對のもの等、又それらの中に、白、赤、紫等色々の小石の散點するもの等あつて、瓦燒の技術の未熟且つ設備の不完全なる時代のものであることがわかる。併しそれが1千餘年後の今日まで、完全に使用されてゐたこと及び、今後使用に堪えるものがあることを考へると、瓦の壽命の悠久なることが窺はれる。

次に他の一つの古い瓦は、**第11圖**の左に見えるもので、前のものより稍小さく、前巾約 270mm. 長さ約 36 mm. 厚さ約 20mm. で內面には布目を有し、外面には縱に深く繩目を附したものである(**第15圖**)。これに對する丸瓦は、長さ約 325mm. 巾約 165mm. 厚さ約 18mm. 高さ約 75mm. でこれもやはり內面には布目、外面には繩目を附してゐるが、この外面は筮で摺り均したのもある(**第16圖**,**第17圖**)。この外面の繩目は一旦瓦の外面を筮にて摺り均した上、繩を卷きつけた木片で叩き締めたもので、繩目の間にその痕跡が見える。又一旦叩き締めた上に更に摺り均したのもある。この繩目

は規則正しく平行に打つたのもあるが、亂暴に縱橫斜等に打つたのもあり、又意識して縱、橫、斜等に打つて文樣を表はしてゐるのもある。丸瓦の方は一旦繩目を打つた後に更に摺り均したものが多いやうである。この種の瓦も前に述べたものと同じやうに形が不揃ひであるが、概して燒きがよく、猶今後永久に使用し得るものが多い。これらの瓦に對する耐寒、耐壓、その他の試驗、用土の分析、吸水率の測定、等の物理化學的試驗は未だ終了しないのでこゝに述べることは出來ないが、吸水率についての簡單な測定の結果は2%から10%の間にあつて概して良好の成績を示してゐる。

從來、古瓦に關する研究は主として巴瓦、唐草瓦その他文樣のあるものが對照として用ひられたやうであるが、今後平瓦、丸瓦等の研究にはこの法隆寺使用の瓦の調査は重要なる資料となることゝ思ふ。今この二種の瓦について考ふるに、前者は後者に比して技術幼稚なる點があり、大きさの點に於ても前者ははるかに大きいので、この二種の瓦を同一時代のものと考へることは困難のやうである。後者は一般に奈良時代の瓦と推定されて居り、食堂その他法隆寺の各建物には相當用ひられてゐるが、前者は、これより一時代を遡るのではないかと考へられる。飛鳥時代と稱せらるゝ文樣瓦が屢々出土してゐるが、文樣瓦よりはるかに數量の多い平瓦が全部破壞したとは考へられないので、その一部は現在まで轉々として使用されてゐても一向差支へないと思ふ。併しこれは自分一個の憶測にすぎないもので、これら瓦の凡ての調査が完了した時に始めてもつと正確な判斷が下されるものと思ふ。

以上甚だ簡單であるが、食堂建立當初よりの所用材料と思はるゝものゝ內、石材及び瓦についての御紹介を終ることゝする。(昭和10年3月20日)

飛鳥建築の特色

藤原義一

飛鳥時代の建築界と現存せる飛鳥建築

飛鳥時代とは佛教傳來の欽明天皇13年(皇紀1212)より、大化改新(1305)までの約百年間をいふ。佛教傳來は表面上欽明天皇13年であるが、非公式には少し早く、繼體天皇の御時、南梁人司馬達等(タフト)が佛像を將來して私かに禮拜してゐたことが知られてゐる。併しその頃には勿論特別に佛堂を建てたわけではなく、その後蘇我稻目が向原の家を捨てゝ寺となしたといふのさへ、未だ佛堂の體を具へたものではなかつた。敏達天皇6年(1237)百濟王が僧侶呪禁師と共に、佛工、造寺工を奉つた頃から、寺院建築が追々實現の緒に就き、同13年には蘇我馬子が石川の宅に佛殿を營み、翌年には大野丘のほとりに我國最初の佛塔を建立した。

佛教を挾んで蘇我、物部兩氏の勢力爭ひは蘇我氏の勝となつて愈々佛教の擡頭を來し、聖德太子の御力と相まつて更にその速度を加へ、かくて四天王寺、法興寺を始めとして、謂ゆる七堂伽藍完備せる大寺が相次で建造さるゝに至つた。同時に寺工、鑪盤博士、畵工等も續々來り、造寺の技術も大いに進んだ。推古天皇32年(1284)即ち佛教傳來後72年して天下の寺數46、僧侶816、尼569人あつたと云はれてゐる。故に飛鳥時代全體に亘つては更に其數を加へた筈であるが、其建築の大部分は跡もなく亡び、たまたま在るものも名ばかりで、建物はすつかり後世のものに變り、或は田圃の間に礎石のみを殘してゐる。

而して唯だ僅かに法隆寺の金堂、五重塔、中門、步廊と、法起寺、法輪寺の各三重塔だけが當時の姿を現在に傳へて來たのは幸ひと云へば幸ひで、佛教建築を我に傳へた支那、朝鮮等の本家本元に古いものゝ既に亡びてしまつた今日、支那南北朝時代の木造建築の眞樣式を示すものは、是等の堂塔をおいて世界の何處にも求めることが出來ないのである。

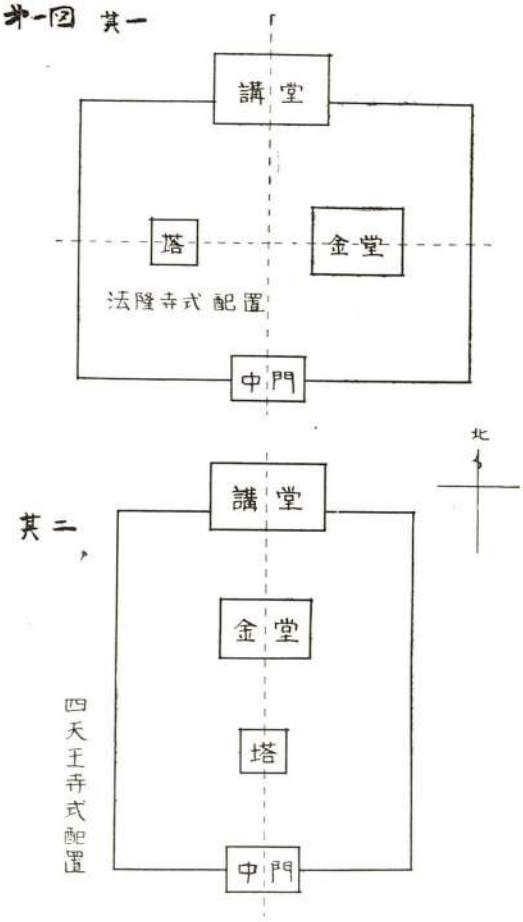
上古建築には宮室、住宅、神社、墳墓等があり、宮室建築が建築界の重要な地位を占めてゐたが、佛寺建築が輸入されると共に、中心は是に移つてしまつた。佛寺建築が非常な發展を遂げたに反し、神社も宮室も在來樣式の踏襲で大した變化なく、漸く飛鳥末期をすぎて宮室等が極く僅かに佛寺建築の影響を受けた位であつた。即ち皇極天皇の飛鳥宮殿は未だ板葺で、齊明天皇の御時初めて瓦葺宮室が計劃されたのであつた。

佛寺建築は大陸から新に入つて來た建築で、其技術家も最初は主として彼の國人か歸化人であり、隨つて大陸建築の直寫は免れなかつたが、現存せる遺構等より考察するとき、

其割合には異國臭味を脫して餘程日本化した趣きを有し、中には日本に於て創造されたと考へられるところさへ尠くなかつた。

當代建築の特徴

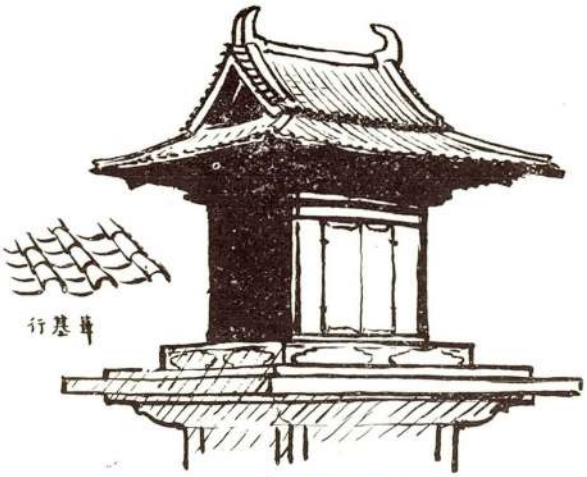
法隆寺以下に於ける飛鳥時代建築の遺構に依つて知られるところの當代建築の特徴の中、注目すべき二三に就いて記せば大體次の如くである。



伽籃配置　伽籃には一定の配置法があつた。法隆寺の例に依ると、東西南北の歩廊で圍まれた矩形の一廓内に、塔婆と金堂とが東西に並び、南歩廊には中門を開き、北歩廊には講堂が控へ、中門と講堂は南北一直線上に、塔婆と金堂とはこれと直角に交る線上にあるやうに配置され、堂塔何れも南面してゐた。(**第1圖** 其1)法起寺、法輪寺、野中寺、定林寺等は此式に屬し、法隆寺では塔が西に金堂が東にあるが、これは必しも一定せず塔が東に金堂が西に置かれたのもあつた。

此配置法ともう1種の配置法があつた。それは中門を通る南北一直線上に南から中門、塔婆、金堂、講堂が配置されたもので、(**第1圖** 其2)此樣式の最も代表的なのは今回風害で塔の倒れた大阪の四天王寺である。四天王寺の創立は推古天皇の即位元年(1252)、法隆寺に先立つこと15年であるが、後世火災等のために堂塔盡く新しく變り、金堂以下多くの建物は文化9年10年頃の建立で漸く120年位しか經つてゐない。最も古い東大門で314—5年前のものである。併し寺地は全く昔のまゝで、堂塔の配置も最初の式を踏襲し、中門を通る南北一直線上に塔　金堂、講堂が順に並んでゐる。**第1圖** に示す法隆寺式並に四天王寺式の伽籃配置を「百濟樣配置」といふ。朝鮮慶州などに殘されたる寺址に依ると、何れも四天王寺式の配置を示し、法隆寺式は一つも見當らぬ。そこで、朝鮮から入つて來たのは四天王寺式配置法で、法隆寺式のは日本に於て工夫されたものであらうと考へられてゐる。

伽籃建築の全般的特色　1個の建築に於いて、或は伽籃全體として、其全體の形とか均齊とかを重要視して、個々の細部には拘泥せず、即ち大局に着目して細部は臨機應變の處



第二図　五重塑像安置殿

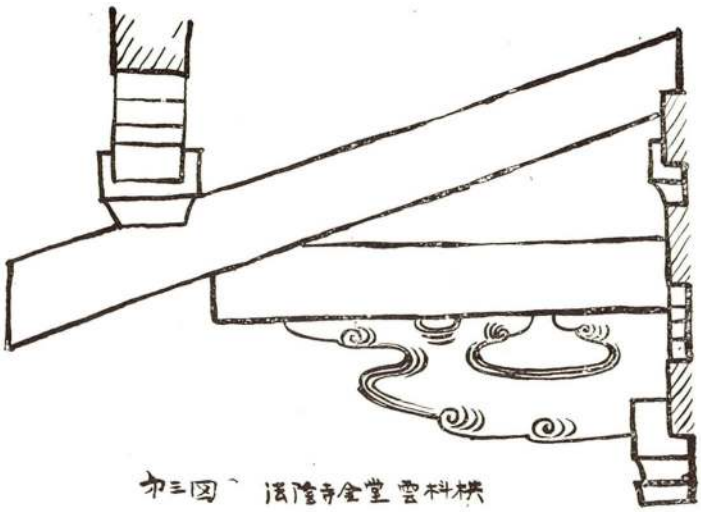
置をした。例へば法隆寺金堂に於て、或は中門に於て、上層と下層との大さの比例、高さの比例などを最も均合の良い割合に定め、そのために起る上下柱位置の喰ひ違ひなどは意に介してゐない。或は棰の1本1本の大さやその間隔は不揃ひであるが、軒全體としては美しい眞反りにしたなどはそれであり、又規則正しい百濟様配置の伽藍であり乍ら、塔と金堂との高さと大さとの均合から引いて伽藍全體の空間的均合上、中門左右の歩廊の長さを少し加減して、金堂の在る東方を少し長くしてゐるなど、規則に拘泥してゐては到底出來ない仕事である。後世になる程種々な規格が出來て、それ等を不動の鐵則として、新しい意匠創意をはたらかすことが少くなつて、建築の美術的價値が低下するのであるが、これは建築家の質が段々落ち、單なる技術的工匠になつて行つたためで止むを得ないことであつた。

飛鳥時代の建築は、全體の形が安定的で、而も安定に稍もすれば伴ふ沈滯がなく、むしろ變化に富み、躍動的な活氣に滿ち滿ちてゐた。法隆寺五重塔を見るに、他の一般五重塔に比して初重より上層に至る落ちが大で、即ち上層に至る遞減の度合が大で、且つ各重の軒が割合低い。それに屋根勾配緩く軒深くさし出し、地上110餘尺の高塔には地に這ふばかりの安定さがある。而も軒の出に變化があり、深い軒を受ける雲枓栱の構架が雄大であるため、全體に躍動的な活氣を漲らしてゐるのである。

建築のかゝる特色は、結局均齊の特色に歸するのであるが、此均齊、此均齊美は、單に形態の均齊ばかりに依つて得られたのではなく、その半面は力の均齊に依つて裏付けられてゐるのである。即ち圓柱の胴張り、雲枓栱の曲線に流れる力の緩急から軒の線に至るまで、それぞれに力の連續があり、これが全體としての形の均齊に織り込まれて、かくも美はしい旋律を以て人に迫るのである。

建築各部分の特色

基壇　立派な建築には2重基壇が造られた。法隆寺金堂や塔にあるのは即ちこれで、その積方は普通の壇上積では葛石と地覆石との間に束石を造り、束石間の羽目には比較的規則正しい石を入れるが、これは束石が無く、且つ葛石も壇上に敷いた石の緣がそのまゝ葛石の役目をなし、羽目のところの石も不規則な任意の形の石を適當に積んでゐる。石質は



第三図　法隆寺金堂雲斗栱



第四図

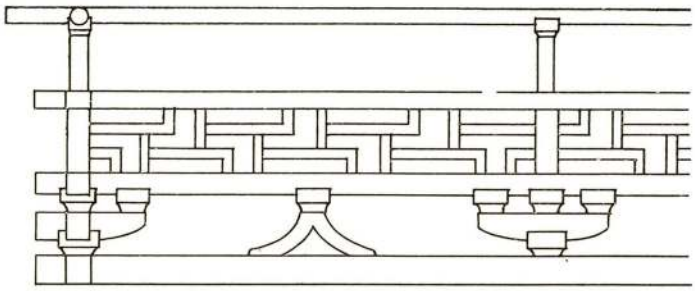
法隆寺金堂雲斗及肘木

後世は花崗岩が多く用ひられるが、ここでは凝灰岩様の軟い石が用ひられてゐる

屋根　屋根には四注、入母屋、切妻などあつたが、入母屋造の場合には錣葺といふのが行はれた。錣葺の屋根とは、四注造の上に切妻をのせると出來る形で、法隆寺金堂内に安置されてゐる玉蟲厨子宮殿の屋根がこれであり、飛鳥時代には此式が相當にあつたものと考へられてゐる。大棟の兩端には鴟尾を上げ、そして降棟の先端には稚兒棟は未だ出來てなかつた。(稚兒棟は奈良時代になつて出來た)瓦の葺方は本瓦葺であつたが、丸瓦の上方が少し細まつてゐて、此細い方に次の太い方を重ねて行く行基葺といふのが行はれてゐた。行基菩薩が發明したのだらう位に考へて名付けられた葺方らしいが、行基より古い飛鳥時代に既に存在してゐて、現在此式の瓦の發見されたのもあり、玉蟲厨子の屋根も立派な行基葺となつてゐる。

大阪四天王寺金堂は錣屋根である。文化9年の建築で、當時の設計では三重屋根にするつもりであつたのが、最上層を省略したため偶然錣葺の形になつたとも思はれるが、伽藍配置の舊制を忠實に保存して來たのに考へ合はすと、錣葺も結局創建當初の俤を殘すものと考へられよう。

柱　圓柱には胴に膨らみが作られた。ギリシヤ神殿柱などのエンタシス(Entasis)に相



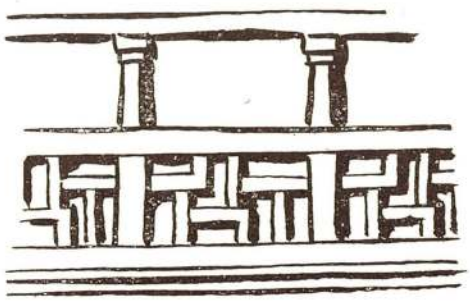
第五図　法隆寺金堂勾欄

當する。柱に膨らみのあることは、柱が抗壓材として上方の荷重を受けて働いてゐるときその荷重に對する反撥力を表はし、柱に安定感を與へる。此膨らみは、奈良時代に入つても行はれたが、膨らみの度が非常に輕微となり、次時代の室生寺五重塔中心柱を最後として消失してしまふ。飛鳥時代のはそれ等に較べると可なり著しい膨らみを持つてゐた。そしてその度合ひは出鱈目のものではなく、荷重に應じ、構造に應じて緩急よろしきを得た。法隆寺金堂、中門、歩廊等に就いて見るに、金堂のは最も著しく、歩廊のは最も輕微である。こゝに於て柱は適度の安定感を持ち、その反撥力に依つて躍動的な力の均齊が示されてゐる。

枓栱　飛鳥時代獨特の枓栱として雲枓栱が用ひられた。一種の雲形の輪廓をもち、**第3圖**のやうに普通の肘木と枓とを同時に兼ねたのと、**第4圖**のやうに肘は普通で、枓だけ雲形になつたものなどがあつた。若し近頃に現はれたら流線形枓栱ともてはやされたであらう。所々輪廓に沿ふて流線があり、渦捲もあつて、不得要領なやうで其實は甚だしつかりと要を得た形をしてゐる。長大な尾垂と組合はして、深い軒を悠々と受けてゐるところは雄大豪壯である。

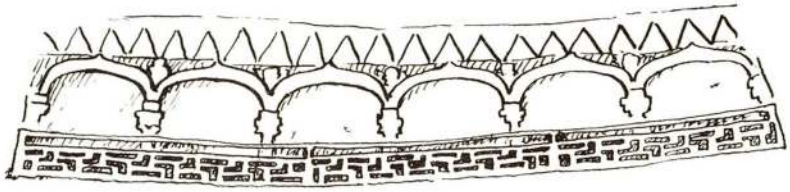
普通の枓栱もあつたが、簡單な三枓位なものである。肘木下端の曲線は非常に雄勁で、上端笹繰の線と相まつて上方に彎曲し、力強く上方荷重を受ける勢を示してゐる。肘木木口の縦線も、一般の場合の直線と異り、枓の枓繰の線を受けて幾分外方に彎曲し、反轉して肘木下端曲線に移る稜角が甚だ尖鋭である。飛鳥時代の曲線は一般に、忍冬唐草でも佛像衣紋の襞線でも、太く鋭く彎曲し反轉する。肘木曲線も結局其一例に外ならぬが、腕を突出して上方の荷重を支へる部材としては、理想的な形と云ひうる。かくて礎石から屋根に至るまで、柱の膨らみ、枓栱雲枓栱の曲線、尾垂の斜線などが連續反轉して、緊密なる力の、形の、均齊を形成してゐるのである。

第六図



撫山樓霞手舍利塔基壇彫刻

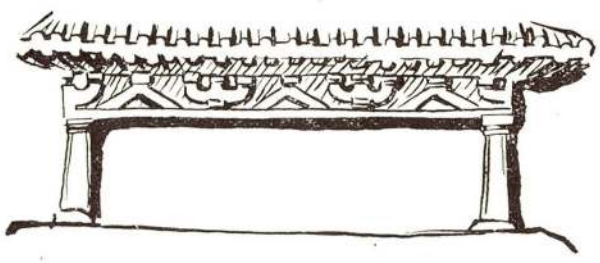
勾欄　法隆寺中門、金堂、塔婆などの外部上層に組勾欄がめぐらされてゐる。これは別



第七圖　雲岡　第十窟内彫刻ノ一部

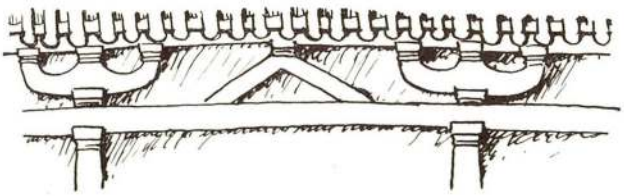
段椽側があつてその手摺のために造られたのではない全く裝飾のためで、隨つてその比例も建築全體としての形から割出されてゐるので、普通の椽側や橋の勾欄のやうに實用的寸法は無視されてゐる。形式は架木と平桁との間に細長い枓束を立て、地覆と平桁との間には卍崩しの組子を入れ、金堂、中門では三枓を以て地覆を受け、三枓の中間には下の兩方に開いた割束様のものを附してゐる。枓束が細長い四角な柱であるのは後世の短い肩の圓くなつたのと大いに異るところだし、架木平桁の組手のところが反らずに水平に造られ、且つその先端が斜めではなく垂直に切斷されてゐるのも古い時代の特徴である。（**第5圖** 參照）

第八圖



雲岡　第二窟内塔壇彫刻ノ一部

卍崩しの組子、三枓割束式手法など共に飛鳥時代勾欄の特徴を發揮せるものであるが、元來當代建築は朝鮮を經て支那大陸方面から入つたものであり、是等諸手法も其一部分である。支那大同雲岡の石窟等には多くそれ等の源流系統のものが見出される。**第6圖**は江蘇省の攝山棲霞寺舍利塔基壇彫刻の1部で、枓束、卍崩組子等全く法隆寺式である。枓束の下方が少し撥形に開いてゐるが、日本でも藥師寺東塔以降のものにその實例がある。**第7圖**は雲岡第十窟内彫刻の1部で卍崩勾欄の例。**第8圖**、**第9圖**は何れも雲岡石窟内の彫刻中より三枓割束式の手法を取出して示したので、これに類するものはまだまだ多數ある。（昭和10年2月25日）



第九圖　雲岡　第六窟内彫刻ノ一部

東院禮堂の建築に就て

淺野清

今回此建物の保存工事に從事して、平常外部から觀察したのみでは知り得ない種々の點を明かにすることが出來たので、其等の要點を掻摘んで記してみたいと思ふ。其前に、順序として、此建物の構造形式を簡單に述べて置かふ。

禮堂は、東院夢殿の前に南面して建つてゐる建物で、桁行5間、梁間4間、單層切妻造本瓦葺で、兩妻に庇が附き、四周に椽を巡らしてゐる。今中央の一間を通路とし、割拜殿の樣な形式になつてゐるが、これは明治の初年に變更されたものださうで、床を切斷した痕など明らかに殘つてゐる。此まゝでは、禮堂に於ける儀式が行へないから、今度の修理に當つて、舊に復されることゝなつた。兩妻の最前端の間に、引違ひ舞良戸を用ふる他、各柱間共全部揚蔀戸を吊つてゐる。

軸部には、頭貫、內法貫、腰貫を通し、上下長押を附し、斗栱は三斗、斗栱間には間斗束を配し、軒は二重繁垂とする。

內部は、間仕切も何もない、神社の拜殿の樣な形式で、床は板敷とし、桁行に沿うて二列の圓柱が並び、中央柱間を2間、前後の柱間を1間に取る。柱頭には、矢張三斗々栱を載せて組入天井の天井桁を支へる。此等の柱は、床で固められてゐる他、飛貫によつて相互に連絡されてゐるのみで、建物全體としても、堅固な構造とは云はれない。修理前に當つても、軸部の狂ひは最も甚しかつた。

妻飾は、豕扠首で、桁の上に三斗々栱を載せて下の梁を支へ、梁の中央に叢束を置いて更に虹梁を架し、その上に扠首を擧げ、扠首の上の三斗々栱を以て化粧棟を受ける。但し、庇のために、下の梁を受ける三斗々栱は、大斗と肘木が隱されて、上の卷斗が現れるのみである。指桁を受ける斗栱は、天竺樣に見る樣に、肘木を出しては斗を積み出してをり、一番上の肘木の端には、天竺樣式の鼻繰が繰られてゐる。懸魚は猪目懸魚であるが、かなりひどく卷き込んだ鰭が附いて來てゐる。この妻の部分は、椽、庇と共に時代が少し下る。

現在の建物は、鎌倉時代のものと見られるから、その建立は別當記の、

寬喜3年辛卯9月18日禮堂木造、同10月22日棟上、但南北3尺東西3尺5寸廣之、勸進隆慶五師貞允法師

とあるのに相當するものと見られてゐる。妻や庇の部分の改修された年次は明らかでないが、種々の點から察して桃山時代頃とみてよいかと思はれる。

建物に關する概說はこれ位にして、以下項を別けて、今回の修理に際して行つた調査の

結果を、二三述べることゝしやう。

1. 平面の計畫 ― 柱間の寸尺

各柱間の正確な寸尺は、解體時を待たねば、容易に知ることが出來ないのである。かなり古くて、色々狂つたものを、外から檢べたのでは、中々數値が揃つて來るものではなく、これはどうしても、解體の際に、頭貫の様な通つたものゝ心墨の様なものでも辿つて檢べない限り駄目である。この建物では、幸、頭貫に全部心墨が入れられてゐたので、それに依つて、詳細に建立當初の計畫寸尺を推定することが出來た。今煩を避けるため、その推定經路を述べることを止めて、最後の決定數値のみを擧げ、それに基き、その平面意匠に就て考へてみたいと思ふ。柱間寸尺の、決定値は、

桁行中央　柱間	11.尺575
同　其他の柱間	10. 035
梁行中の二柱間	9. 03
同　兩端の柱間	9. 535
桁行計	51. 715
梁行計	37. 13

寸尺に端數の出るのは、云ふまでもなく、現在の尺と、計畫當初の尺の相違から來るもので、この中、10尺035 は、當初の10尺に相當するものであることは容易に察し得る所であらう。(從て1.0035尺が舊の1尺に當る)そうすれば、9尺03 は9尺、9尺535は9尺5寸に相當する譯である。(此二つは、實際はもつと細かい端數が出るのであるが、實測値を重んじて、便宜こうした數値を取つてをき、計だけは正確な換算値に合せておいた) そこで、桁行中央柱間の11尺575 はどうして出て來た數値かと云ふに、これは、極割から來たものである。他の桁行の柱間には極が13並べられてゐるが、この柱間には15並べられてをり、從てその柱間寸尺もその比例になつてゐるのである。即ち

10尺÷13×15×1.0035＝11尺575

となる。すべての各柱間を建立當初の尺に復原して記せば、

桁行中央柱間	11.尺535
同　其他の柱間	10.尺
梁行中の二柱間	9.尺
同　兩端の柱間	9.尺5
桁行計	51.尺535
梁行計	37.尺

以上に依て知られる様に、當初の計畫では、桁行柱間は、中央間を除いて總て10尺に取られ、中央間は、その13分の15を取つたゝめ、尺は端數となつてゐる。妻は、中の2間は9尺、脇の2間は9尺5寸となつてゐて、脇の方が少し廣くなつてゐる。桁行で、中央間のみを僅か廣くしたのは、外觀を整へる上から見ても當然のことゝ思はれるが、梁行の方

で、中央間の狭いのは不思議に思はれるかも知れない。然しこれは、平安時代から鎌倉時代にかけての此種の建物には極めて普通なことで、中央2間は身舎に相當し、前後の各1間は庇に該當するのを、身舎のみ更に二等分した所から、こんな結果が生じるのである。(註)

所で、先に引用した別當記の記事中の「但南北3尺東西3尺5寸廣之」と云ふ文句であるが、試みに、現在の建物の南北を37尺、東西を51尺5寸と見れば、寛喜再建前の禮堂の大さは、桁行48尺、梁行34尺と云ふ値が得られ、甚だ都合のよいことゝなる。今假に、この堂も亦、桁行5間、梁間4間であつたとみて、その各柱間の大きさを想像してみるに、桁行中央3間を各10尺、兩端の間を各9尺、梁行中の2間を各8尺、兩端の2間を各9尺と置けば、

9尺+10尺+10尺+10尺+9尺=48尺

9尺+8尺+8尺+9尺=34尺

となる。これは單なる憶測に過ぎないけれども、そんなことも考へられないことではない。

(註) この種の平面を持つものでは、古くは室生寺金堂、醍醐寺藥師堂、淨瑠璃寺本堂などがあり、其他、平等院觀音堂、道成寺本堂等がある。寢殿造の平面は、この形式を採るのが普通である。

2. 礎石と地盤

礎石は花崗岩の自然石のまゝのものを用ひ、四隅の柱礎石は特に大きくして堅固に造られてをる。唯東南隅柱下礎石と、その西隣の礎石とには、上端に徑1尺9寸及1尺7寸の圓形高さ1寸餘りの繰出がついてゐる。又最北の列東から二本目の柱下には2尺4寸角厚約8寸位の凝灰岩の礎石が用ひられてゐた。(これは三つに割れてゐた)恐らく何れも他の古い建物に用ひられてゐたものを流用したものであらう。後者は、西院廻廊の礎石によく似てゐる。元來日本建築の地形は極めて簡單であるが、これだけの石の下には、徑3—4寸から、尺5—6寸位迄の大小樣々な自然石が一並べ敷き詰められてゐたのみである。餘程堅い地盤ならばこれでよいかも知れないが、こゝの地盤は埋立地であまりよい方でないから、柱の沈下不同を檢べて見るに、3寸6分に及んでゐた。

尙內部地盤面上には、一面に石灰質の敲き漆喰が施されてゐて、緣束石のある地盤面との間には、南側で尺5寸近くの高さの差があるから、元は龜腹が造られてゐたものと察せられる。(地盤が北へ行くに從て上つてゐるから、北側では龜腹のつく餘地がなくなる)今回の修理では、龜腹を復舊することゝなつた。

3. 軸部の高さ——柱の丈

床の張られた建物では、柱の丈を取る基準をどこに取るかゞ問題であらうが、種々の理

由から、桁行腰貫穴上端を取つた。床下は意匠の上から見ては、働きを持たないから、礎石の上から取るのは意味をなさない。外觀上から云へば、椽床上端を取る可きかも知れないが、仕事の上から云ふと、その點を定めてかゝるのは面倒である。桁行腰貫穴はその點に近く、實測によると、穴の大さは腰貫の太さの不動につれて、相當の相違はあつても、桁行の腰貫穴上端から上の寸尺のみはよく揃つてゐる。

以上の點を基準にして、柱上端迄の寸尺を測ると、柱の長さに三種あることを知ることが出來た。即ち、外廻り柱の中、桁行の兩端を除くものと、妻通の柱と、內部の柱の三種である。その長さは

外廻桁行柱	10.尺乃至10.尺03
同　妻通柱	10.尺07乃至10.尺09
內部柱	10.尺01乃至10.尺12

となる。二分乃至三分の不同のあるのは、頭の切方の軸に正確に直角になつてゐないこと、貫穴の取り方の歪みなどによつても生ずるし、一般にそんな點は現在の仕事程精密にはなつてゐない。

これに依れば、(1) 柱の丈が略々10尺になつてゐること、(2) 正面から見れば、中の柱の丈は同じで、兩端の柱で7分程高くなつてゐること、(3) 妻の柱の高さは一定であること、(4) 內部の柱は平の柱より1寸、妻の柱より3分高くなつてゐることが解る。平の兩端の柱の丈が高くなつてゐるのは此頃の建物に普通なことで、この高さの差だけ桁に反りが出來、軒反りにもそれが移つて、軒の反りを內部深くから起すことが出來、且、兩端の柱がたれてみえるのを防ぐ。尙其他に、斗栱を端で高くしたり、桁に增しをつけたりして隅を上げてくることもあるが、この建物ではそうした方法は採られてゐない。內部の柱が高いのは、それだけ天井を中央で高くすることゝなり、間仕切のない廣い堂であるから、中で天井が垂れて見えるのを防ぐのである。柱の丈が10尺となつてゐるのは、桁行中央間を除く平の桁間の10尺となつてゐたのと合せて、意匠上注意すべきことであると思ふ。

4. 軒及屋根の復原的考察

先にも一言した樣に、この建物の軒から上には、後世の手法が著しく混じてゐる。今回の修理に當つて、建物を解體調査した結果、種々の復原資料を獲ることが出來たので、それに基いて現狀を變更し、舊に復することゝなつたから、その大要を記さう。

後世の手法の加つた主な點は、

(1) 現在の妻の下の方の梁は、前上角が欠き取られてをり、裏面を見ると明らかに舊虹梁である。その上に載せた虹梁は新しく、舊虹梁の上端には、扠首竿の取りついた痕跡がよく殘つてゐる。(扠首束の位置は、簀束を載せるために欠き取られてゐる)。

(2) 現在の指桁の部分も新しく、その下に來る長い肘木の、木口に鼻繰を施したものを

檢べるに、木口の切り跡は新しく、上端外角に棰の釘跡が殘つてゐて、それが現在の棰の配置とよく一致し、更に下端には輕い反りさへ見られる。(この反りは、後に述べる舊丸桁の下端反りとよく一致する。この肘木の上端は水平に造り改められてゐる)これは明かに元の指桁である。即ち、上の虹梁と、現在の指桁を撤去しただけ妻が低かつたのである。

(3)蝮羽の部分の化粧棰は、丸桁の所で折れてをり、地棰は丸桁と木負の間に渡され、その奥の棰は丸桁から指桁に架けるのであるが、指桁の位置が下がると、地棰の元が丁度その上にかゝり、丸桁の上で棰を折る必要がなくなるのである。內部の棰掛の桁は、舊指桁の元を延長した位置になつてゐるから、元は、內部の地棰も蝮羽の地棰も一列になつてゐたことを知ることが出來る。

(4)次に軒に移つて、現在の丸桁は後補のもので、反り上りも少く、(この丸桁には卷斗が造り出されてゐる)木負、茅負と次第に反りが强くなつてゐるので、その結果、軒の蝮羽の部分では捩れが生じ、飛擔棰の勾配が、破風際から內部に行くにつれて强くなつて來てゐる。

(5)棰も蝮羽の棰は全部新しく、其他後補の棰は、形が甚だしく拙く、地棰など、直線のまゝで、全然反りのないものすらある樣な有樣で、殆んど體をなしてゐないと云つた方がよい。これに反して古い棰は形も秀れてをり、材質も立派で、其間に著しい懸隔があるのである。尙この古い棰を見ると、鼻が切斷されて、結局軒出を縮めた形跡が歷然としてゐるが、元の木負、茅負、丸桁の取付跡を辿ることが出來る材料が多少存してゐたので、それらによつて復原したが、結果、地軒で約3寸、飛檐軒で約2寸、計5寸程軒出が減ぜられてゐたことが判つた。

(6)幸、小屋內から完全な舊丸桁と、舊木負、茅負等の斷片が發見せられたので、それらと、棰の面に殘つた痕跡などを辿つて、軒を復原することが出來た。それに依ると、丸桁の反りは前より强くなり、茅負の反りは反つて減じて、軒の捩れが消失し、蝮羽の出が破風の厚さだけ延び、破風の際に棰がつき、飛檐棰の勾配が著しく緩くなつて無理のないをさまりを持つのである。(今迄は飛檐の勾配が强すぎたため、飛擔棰の尻が上つて不自然なおさまりになつてゐた)

(7)更に、現在の地棰の中には、小屋內に隱される部分迄仕上げを施し、且斷面が菱形になつたものが20數本發見されたが、これは元の蝮羽の部分の棰であつて、これを斷面の菱の傾きの順序に配置して、丸桁の反り型の上へ正しく並べて見ると、その傾斜角度がよく一致することを確め得た。これに依て、元は蝮羽の地棰が奥まで通つてゐて、今の鼻繰の附いた肘木の上に掛つてゐたことが一層確實となつた譯である。尙この菱に相當する斷面を持つた古い飛檐棰も20本近く發見され、それらの地棰、飛檐棰の何れにも捩れを與へた形跡が認められないので、軒に捩れのなかつたことは明かである。

以上で發見資料の要點を記し了つたが、他は妻の虹梁から上の問題である。

(8)現在の扠首竿は斷面が甚しく細く、纖弱な感じを與へるが、古い扠首竿の斷片が、小屋内から發見せられたので、その斷面は復原することが出來た。唯殘念なことには、その兩端が切り取られてゐるので、その長さが判らず、現在の扠首竿も亦新しいものであるから、扠首の高さが確定しないのである。致し方ないので、假に、今の扠首竿の高さをそのまゝ採用して、破風のおさまりを見てみたら、恰度都合よく行くので、扠首竿は材料は代つてゐても大きさは餘り變つてゐないものと見たのである。

(9)現在の破風及懸魚は、桃山時代邊りのものと推定されるが、妻がかく復原すれば、從つて破風の形も變つてくるので、そのまゝ使用することは出來ず、鎌倉時代の樣式に從つて推定復原することゝなつた。

(10)以上の復原の結果、指桁で約1尺3寸、化粧棟木で1尺9寸、屋根棟で約2尺減じ、妻は低くなり、屋根勾配は著しく緩くなり、外觀は面目を一新して、桃山時代風な屋根が、鎌倉時代に普通な姿に變つてくる筈である。

5. 瓦 銘 文 其 他

本部には、合番付、落書(註)等の他、何等墨書銘とも云ふべきものは出ず、年號を記したものは勿論含まれてゐない。これに反し、鬼瓦には2つの年號の入つた銘文が發見せられた。一體に瓦の銘文は室町時代に入つて著しく多くなつて來るのである。銘のある鬼瓦の1つは、大棟東端の鬼瓦で、板の右側の見込の部分に、

永享8年8月5日瓦大工吉重トシ59

同南側に、

永享8年8月日ユウアミトシ59

とあり、裏の取付穴の間に

瓦大工吉(花押)

とある。又東南降棟の鬼瓦の正面の右下には

ライタウノ

クタリム子鬼瓦

文安3年丙刀

11月25日

とある。

(註) 兩妻最前端の間の鴨居裏に

「山しろの　くにふけんし大工　源治郎」

と刻りつけてあつた。中々の達筆である。この鴨居は前回の修理の際に補つたものと思はれる。

法隆寺食堂及細殿の構造

杉山信三

1. 構造形式

西院伽藍の東邊、網封藏に隣して食堂と細殿は棟を並べ南面してゐる。

食堂は正面7間、側面4間、前面は中央の間と1間をおいて左右に都合3戸の扉あり殘り4間は連子格子の窓となし、背面中央に1戸、他の間及側面共總て壁、內部5間2面の內陣、中央の間須彌壇を設けてある。外陣は繫虹梁を架せる化粧屋根裏、柱上大斗肘木の斗栱を以て桁を支へ、內陣は前後に大虹梁を架けわたし合掌を以て棟桁を支へる化粧小屋を作り、妻のみ二重に虹梁を架し、所謂二重虹梁大斗式の構架形式。屋根は野小屋を有し桔木にて軒を支へ、2軒、切妻造本瓦葺である。

細殿は食堂と同樣正面7間であるが側面は2間、妻のみ壁につくり他は總て解放されてゐる。柱上大斗肘木、これに架して前後に虹梁あり、梁上は蟇股斗肘木を以て棟桁を支へる。妻は食堂の二重虹梁大斗式の手法を稍變へ二重目虹梁上に低き蟇股を加へる。總て化粧小屋裏、軒は1軒、屋根は切妻造本瓦葺になる。

2. 食堂の構造部材

柱は頭部の徑と下部の徑とは差があり、上部に細まつてゐるが膨みを有してゐるのではない。上端に面取りに似た手法を採用してゐるのは粽とも云へず、珍らしい方法であるが、柱頭大斗を載せるに一脈の和みを見せる面白い手法である。

柱を繫ぐには桁行には頭貫、後補して飛貫も加へ、梁行、妻は頭貫で繫ぎ、他は後補の貫を以て繫ぐ。柱上大斗には後補のものが多いが、入側柱の一部には創建當初のものが遺つてをり、肘木は軒桁を受ける、即ち外側通りに漸く1本、母屋桁を受ける入側通りに1本古いものが遺されてゐたに止り、他は皆後補のものであつた　繫虹梁には一部松材の後補のものもあつたが大體良く保存されてをり、大虹梁は悉く奈良時代の特徵を示す創建當初のものであつた。

大虹梁上の扠首束、斗、肘木、妻に於ては虹梁、斗、肘木總てこれらの內、肘木2本のみが松材になる後補材に止つてゐる。

桁は杉材による後補のものである。斷面は圓であるが荒削りのまゝに仕上げてあるから楕圓に見られる箇所もある。又この桁は蟇股に行くに從つて反り上ると共に增しがあるか

らこの箇所では明に楕圓となる。この桁の中には創建當初のものと推定し得られる斷面圓形の一間宛に繼ぐ桁(檜材)を存してゐた。この桁により又東大門の古い桁を參考にして考へるなら、もともとは反りのみあつて增しはないもの、即ち蟇股に至つても楕圓とはならないものであつたと思はれる。背面軒桁は後補された角材の桁に變つてゐた。

柱は何れも正方形に近い矩形をとる斷面を有ち、反りがない。この中には後世補はれたものもあつて4種に區別することが出來る。中一つは最も新しくて丹土塗も施されてゐない。創建當初の材料は檜、後補のものは松、前者は母屋桁にて繼手を作り折れて軒桁にかゝるが、後者の中、一つは繼手を作らず突つけとし、1本にて架渡すものは尙、一層後れて補はれたものらしい。

木負は檜材、茅負又同樣、この2材は悉く改補されてゐる。飛簷棰には相當創建當初のものも遺されてゐるが、大多數は茅負、木負と同質材に改つてゐた。古い飛簷棰には反りあり下端も先に至つて細まつてゐる。

茅負の上にある裏甲、平では布裏甲、妻では切裏甲となつてゐたが創建當初のものではない。裏板は檜板を薄く裂きわつたものの表面を少し均して棰と直角に即ち横に張りつける。

この上に桔木によつて軒を支へ野小屋を設け、竹小舞簀の子として野地を拵へてゐたが、これらは總て後補も極めて近頃のものであると思はれる。

壁下地には一部竹小舞による箇所もあつたが檜材を裂割り樌をはさんで交互に藁繩でからみつけてゐる式も存してゐた。この小舞或は間柱には化粧材を轉用したものも含まれてゐたが、何分細かに裂かれてゐるため如何なる材料であつたか判別し難い。

3. 食堂の構造技法

食堂の柱礎石には枘穴を設け、柱根には枘を作り出して柱の移動を防ぐやうにし、その枘穴の濕氣拔まで考慮されてゐる。然もこれが創建當初のものに限られてゐるのである。奈良時代に既にこれまで構造細部技法があつたことを知るのは建築史上興味深いものであると思ふ。

側面は全部大壁に仕上げられてゐるが、その中でも最も廣いのは中央二間である。柱の長さが14尺餘、その間隔7尺8寸に近い間を上には頭貫下には地貫で繋いでゐるに過ぎない。この廣い空き間を壁貫を入れず、中央柱上部に兩側から持たし掛けて入側柱下部にまで筋違を張り、間柱はこの間に筋違の所中斷されてかゝつてゐる。この筋違の材料を見るに材質は杉檜と混用されてゐるが、創建當初のもので無いにしても相當古く、降つて考へても最初の補修の時に補加されたものではなからうか。若しその中の檜材に見る風雨に曝され減少してゐるのを柱の夫と比較して考へるなら、或は又創建當初のものではなからうかとさへ思はれるのである。何れにしてもこの大壁構造に筋違を用ひたことは當を得た工法

で、後世の建築家が遂ぞ思ひ出さなかつた技術が可成以前にも存してゐたと知られるのである。

頭貫は後記の如き理由から一間毎の長さにとり、柱上で繼ぐ。この繼手は同じ方向の場合も、方向を變へる場合も總て、重なりだけ、共に木厚の半ばを欠きとり、上下に重ね大釘打に柱にとめる。尚これが動かぬためには柱より、頭貫のかゝる面に枘を作り出し、これと相應じて頭貫の下木になる下端に枘穴を掘り込み互に仕合して繋ぐのである。外側柱の頭貫が入側柱に繋貫となる仕口はこの枘によつて移動の防ぎをとり、上端楔止めとなる仕様をとる。大斗は雇枘にて頭貫、柱の上に坐る。

虹梁は大斗にかゝり、肘木と合欠きに組立て、肘木は桁の斷面が圓であるため舍みをとり桁をうける。繋虹梁が入側柱に繋ぎかゝる仕口は、虹梁より大きく枘を、その枘も巾のみを落したものに過ぎないが、柱に穴を掘り込んで架け、虹梁上は釘穴掘りをなしてその枘を貫き柱にうちとめる。簡略な手法であるだけ原始的なものを見出して興味深い。妻虹梁は枘を植込み大斗をのせ、又枘にて虹梁を架ける。扠首棹即ち合掌と虹梁とは虹梁の面に直角に合掌より二枚枘を作り、合掌拝みの互ひの面には一方を雄木他方を雌木として枘による仕口を持つてゐる。この上に斗が坐るのであるが、斗の方に穴を作り、合掌より枘を作り出す手法である。この枘は相當大きく圓味がかつた方錐形をなしてゐる。斗栱にて棟桁を受ける手法他と同樣である。

地棰は棟桁にては一枚枘に仕口を作り丸栓止めに組合し、母屋桁上では勾配が變るので繼ぐが、上に位置するのを雌木、下に位置するのを雄木に枘をかけ、この二つを縫ひ合して大釘にて桁へ止める。

これら細部構造によつて各々の部材が如何に組織されてゐるか次に構架技法を概記する

創建當初の柱が相當遺されてゐるが、殊に入側通南西の4本は柱根枘も遺されてあり、柱頭も截りとられたこともないものが揃つてゐる。是によると柱は中央より端にいたるにつれて高さを增してゐる。これを繋ぐには上部に頭貫と後補の飛貫のみであることは既に說いた。從てこの柱の伸びは計畫的の伸びであることは明かなことである。即ちこの伸びによつて屋蓋に反轉を持たせやうと意圖してゐるものである。これをたゞ兩端の柱にのみせず、各柱の長さを異ならしめてゐる點を注目すべきである。これがため柱頭を繋ぐ頭貫は二間にわたりて一本をかけるにはこの反り上りを計り、仝つ當初からそれと合ふ曲を持たし仕上げねばならないといふ面倒な工程をとる必要がある。これを容易に施工するためには柱一間毎に一本宛の頭貫を架けることによればいゝであらう。この事は既に見た如くこの遺構に行はれてゐるのである。

外側通面の柱に於ても同樣伸びがあることを見出されるのであるが、後補材が多く混用されてゐて入側に見る程明かではない。しかし古い頭貫は又一間毎にかゝつてゐるから當然入側同樣、柱に順次伸びを持ち頭貫は一間毎に折れて反り上つてゐたものであらう。

更に此の入側の4本の柱の上の大斗は柱と揃つて舊材を存し、これが又順次高さを違へ、中央より端へ行くに從つて高くなる。これと共に大斗の虹梁敷面も斗尻よりとれば端に從ひて高く作られてゐる。これに虹梁がかゝつた時、虹梁互ひの位置は端に近づくに從つて柱の伸びとこの大斗の虹梁敷面の高さの和によつて出來る差だけ高く位置することになる。

入側柱上にあるこの大斗の關係は外側通の大斗にもあつたものと推定もされる。單に想像に委せるのではなく、外側と入側とを繋ぐ繋虹梁に就ての構架を檢べるとこの考に一つの根據を與へる。

即ち、繋虹梁は他の奈良時代の遺構に見るものと同一の形式で彎曲の度の高いものであり、その曲線は中心に對して略、對稱を示してゐるのであるが、たゞ端に於て大斗（外側の）にかゝる部分と柱(入側の)に枘差しにかゝる部分とが異つてゐて、後者が前者に較べて細く作られてゐる、從つてこれが架けわたされる時外側の大斗にかゝつてゐる部分が水平におかれる——虹梁の下端が水平に作られてある——と柱にかゝる部分はその細まりだけの差を以て高くかゝる事となる。これは繋虹梁の總てにわたる性質であり、その下端の差は何れも一定とみなされる。更にこの柱にかゝれる枘穴の位置を柱天よりみると、同數値にあるものと考へられる。この二つの關係によつて、外側の大斗の虹梁敷面の位置は入側の柱の天と同じ反り上りをもつてゐるものと見られる。然るに外側柱の伸びは入側柱の伸びと一致せず、伸びが稍少なきため、そこに得られる差だけを、大斗の各々一つの敷面を變へて順次高くせねばならないことになる。これは正しく入側の大斗に於てみたものと一致してゐる。結局外側大斗も高さを中央より端に至るに從ひ高く作つてゐたものと考へなければならない。

大斗の丈が高くなることは又肘木の敷面も高くなることを伴ふ。桁は肘木に含まれてこの高さだけが順次反りとして現はれこゝに屋蓋の凹曲線を構成してゆく筈である。

更に、大虹梁より上にて合掌斗栱が支へる棟桁の高さは、順次高く變化して行つてゐるとは、實測數値上考へられず、却つて總てが同じ寸法に組み上げられたとみられ、此處に於ても又合掌上の斗の丈の相異で棟の反りの變化が作られ、それは母屋桁の反りより更に少なくなつてはゐるが、兎に角一柱間毎に相異して高くなつてゐる。

斯く柱毎に高さを異らしめた時これにかゝる桁は頭貫と同樣な考慮の下に1間毎に繼ぐことになる。即ち遺された桁の創建當初のものが3本共1間をわたすに過ぎない長さであるのは又當然である。

斯く組み上げられた桁はその位置により棟桁から母屋桁へかゝる棰の勾配は母屋桁から軒桁へかゝる棰の勾配より强くなつてゐる。從つて棰は母屋桁の箇所で折れる。前に記した通り創建當初の棰がこゝで繼がれてゐるのは頭貫なり桁なりが柱の箇所で繼がれたのと同手法である。軒は2軒であるため飛檐は一層その勾配が緩くなることになる。

以上の如く化粧小屋組構架の間に既に立派な屋蓋凹曲線を構成してゐるのであるが今は

この上に更に野小屋が組まれてゐる。しかもその材料は總て後補のものである。是は柱の伸びと大斗の高さを變へることで桁、棰の類が屈折線をなして、軒の反りと屋根の曲面とを既に作り上げ、その上に直ちに土を置き瓦を葺いて、屋根の形を作り上げる往古の屋根構架技法がはしなくも此處に遺つてゐるものと見て良くはないであらうか、奈良時代の遺構として殘れる建築の極めて稀なその中にあつてこの構架技法が持つ性質がその當時の一般的なものであつたか否かは決定するにしばらく時日をかさねねばならないであらうが、食堂の構架技法の特異さは、斯うした價値の充分にあるものと謂はねばならない。

4. 細殿の構造部材及技法

細殿の創建は詳かでない。古今目錄抄に食堂と並び存する樣に錄されてゐるが現在の細殿とは其の模が異つてゐるやうである。更に細殿の部材を見るに、食堂の創建當初のものと形式を等しくしてゐるものは兩妻に於ける虹梁のみで、それとも全く形式を眞似た後補のものであるとさへ見られる。少なくとも今の構造形式に改められたのは古今目錄抄の著された以後におかなければならないし、部材を見てもそれと思はれるものが主要構材の大部分を占めてゐる。

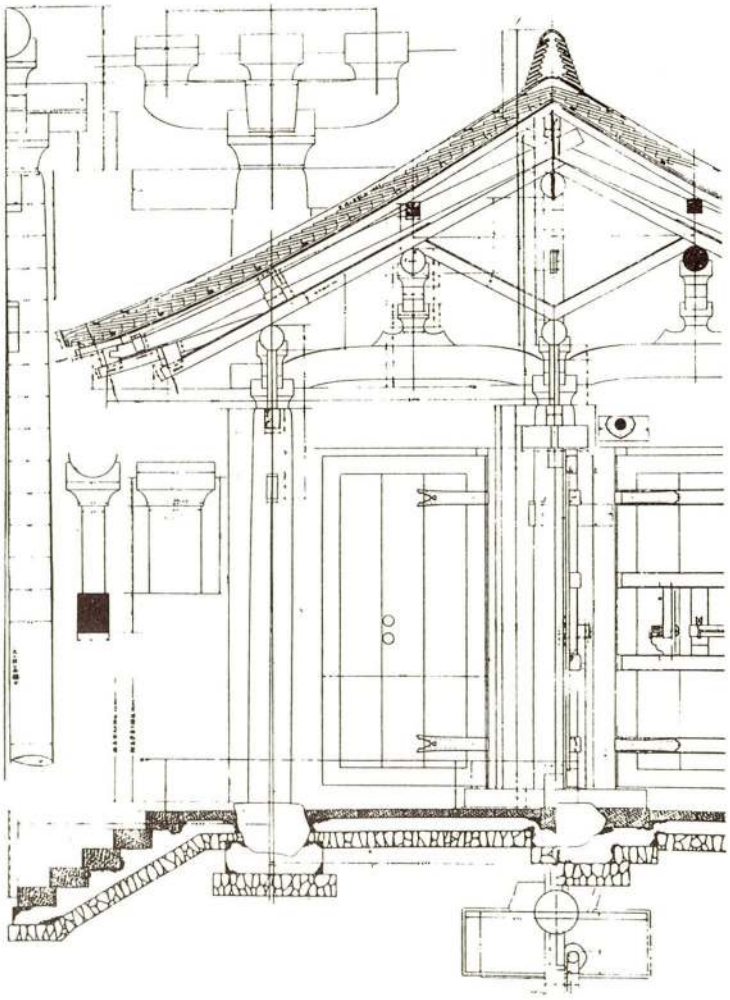
柱は自然石の上に立ち食堂の樣に枘を設けることはなく、頭貫にてこれを繋ぐ。頭貫は2間にわたるもの多くこの點食堂の夫とは異にする。繼手は柱上にて臺持繼と呼ばれるものに似た手法をとり、柱より貫の面に蟻をかけてとめる。大斗は雇枘にて坐り、虹梁は大斗に渡り腮にかゝり、肘木は虹梁と合欠きとし、桁は枘にて組立てられる。桁繼手は鎌繼とし垂掛りを上端に面取り、棰は合欠きとなつて棟桁上に組れる。

細殿の構架技法は先づ頭貫には反りを持たず、端にいたつて僅かな增しを有するのみ。從て端に位置する柱はそれだけの伸びを有する。この上に坐る大斗は悉く同一寸法を持つてゐるが、各隅の肘木は蟇股の方に增しを有すると共に上端には反りがある。桁の反りに伴れてこれに仕合せてある譯である。軒桁は反りも增しも並び有するが、これは妻より2間の內側から起り緩かに反り上る。虹梁は同一の大さであり、その上の大枘臺肢の形も變へず、斗肘木と共に軒桁と同じ反りを持つ棟桁を支へるのである。このまゝであれば軒桁も棟桁も同一の反り上りを持つてゐるものであるが軒先線を一層反轉せしめるため地棰の反りを變へて所謂捩れ軒の構造を採用してゐる。

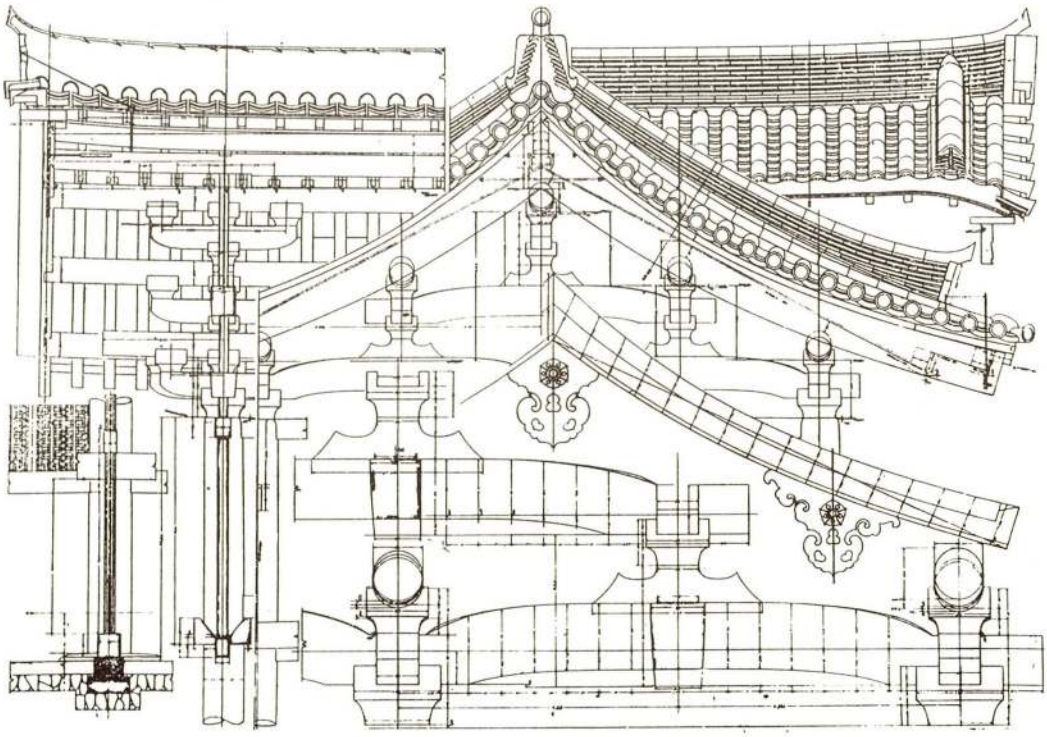
附　　言

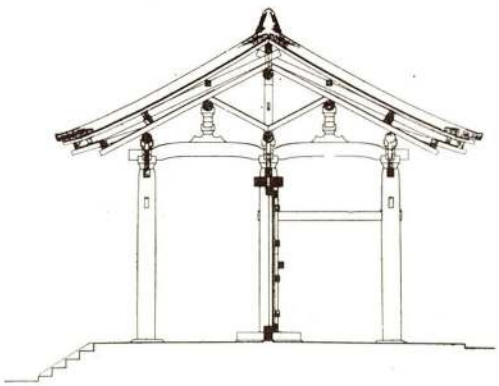
食堂と細殿とに就ては尙、說かねばならない點が多々存する。殊に今回の修理に現狀變更を行つた箇所に就ては夫々が建築技法に關する舊手法調査の結果によつたものであるだけ一應の說明を加へなければ了解して頂けないものであるが、紙數の關係上此處には止むを得ず割愛する。然し上記した此の兩棟の構造技法の性質とその相異は、最も決定的に示される時代差であつて斯うした點は、今回のやうな解體修理が行はれない限り明かにせられない問題であるため、特に此處に詳敍して見たのであつた、與へられた紙數に於て要を盡し得ず、文意紛亂せる點を諒恕願ふ次第である。　　(Syw. 10v. 3gt. 16nt.)

法隆寺東大門詳細圖 （共 1）

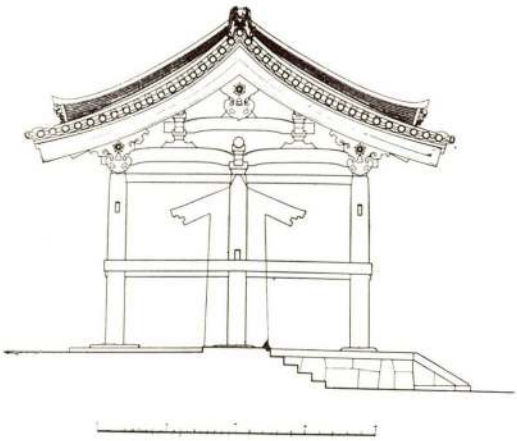


法隆寺東大門詳細圖 （共 2）

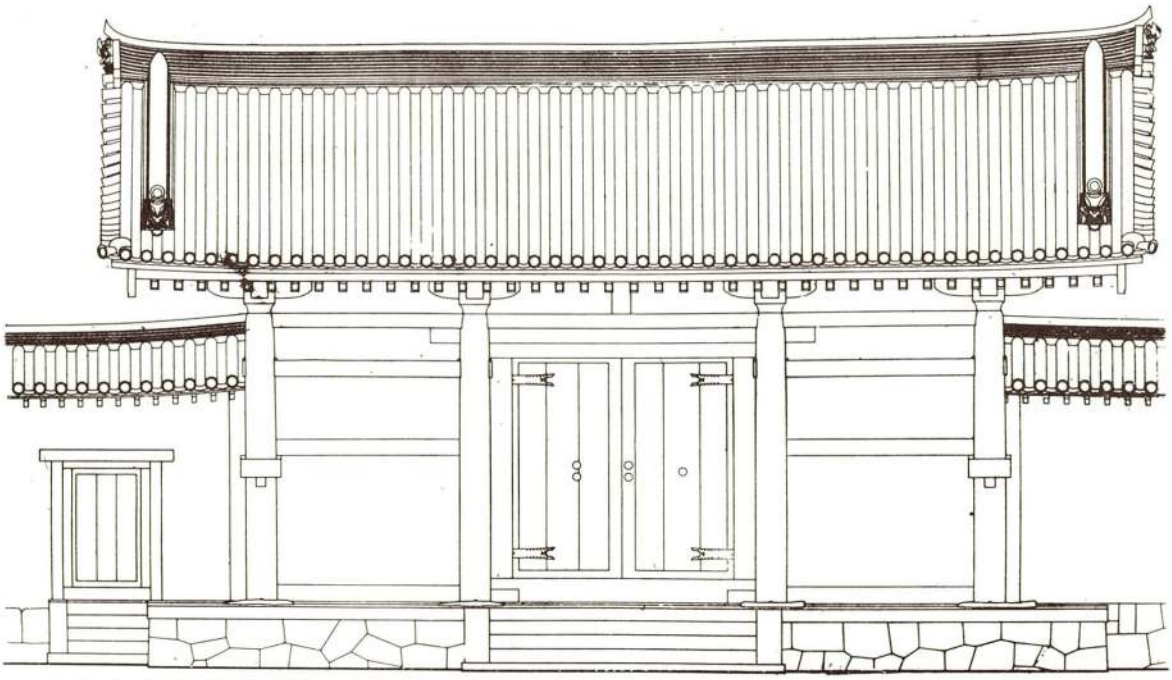




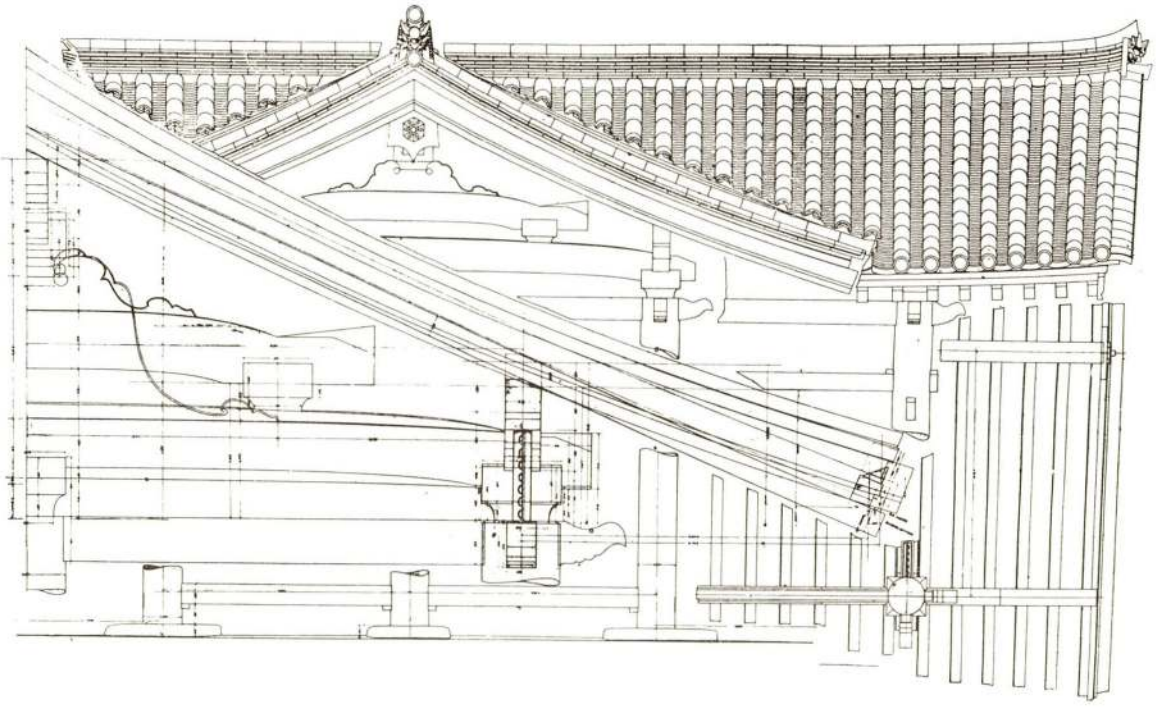
法隆寺東大門斷面圖



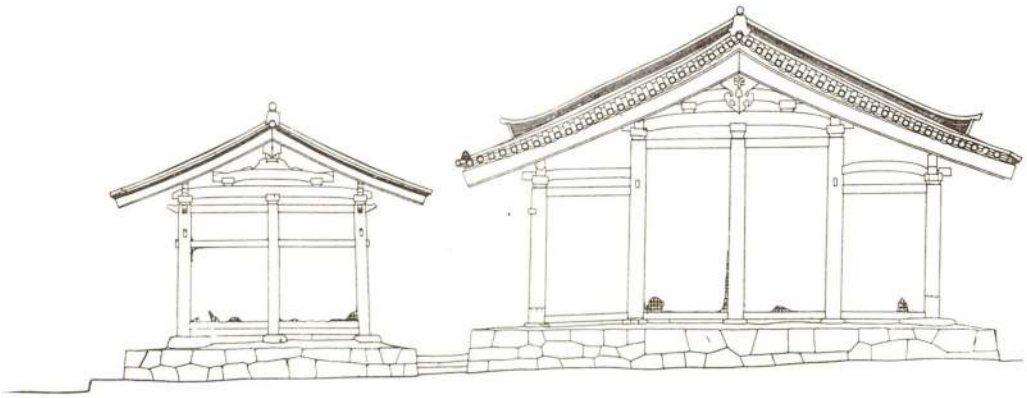
法隆寺東大門側面圖



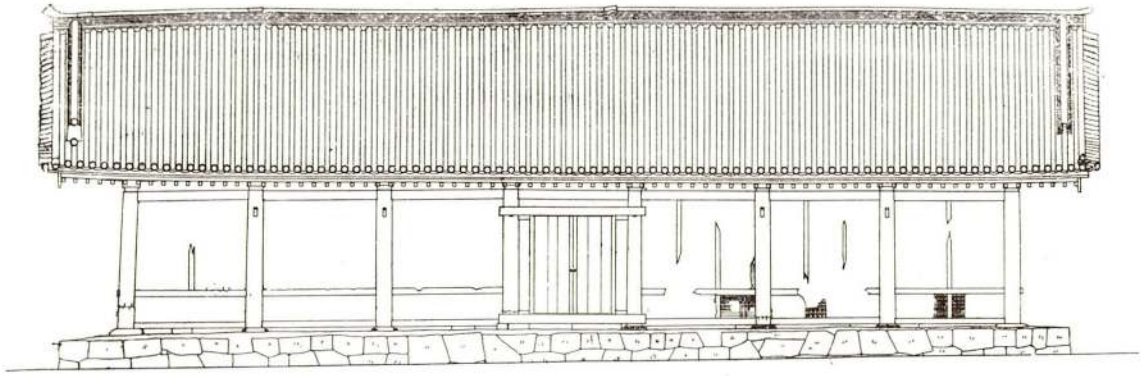
法隆寺東大門正面圖



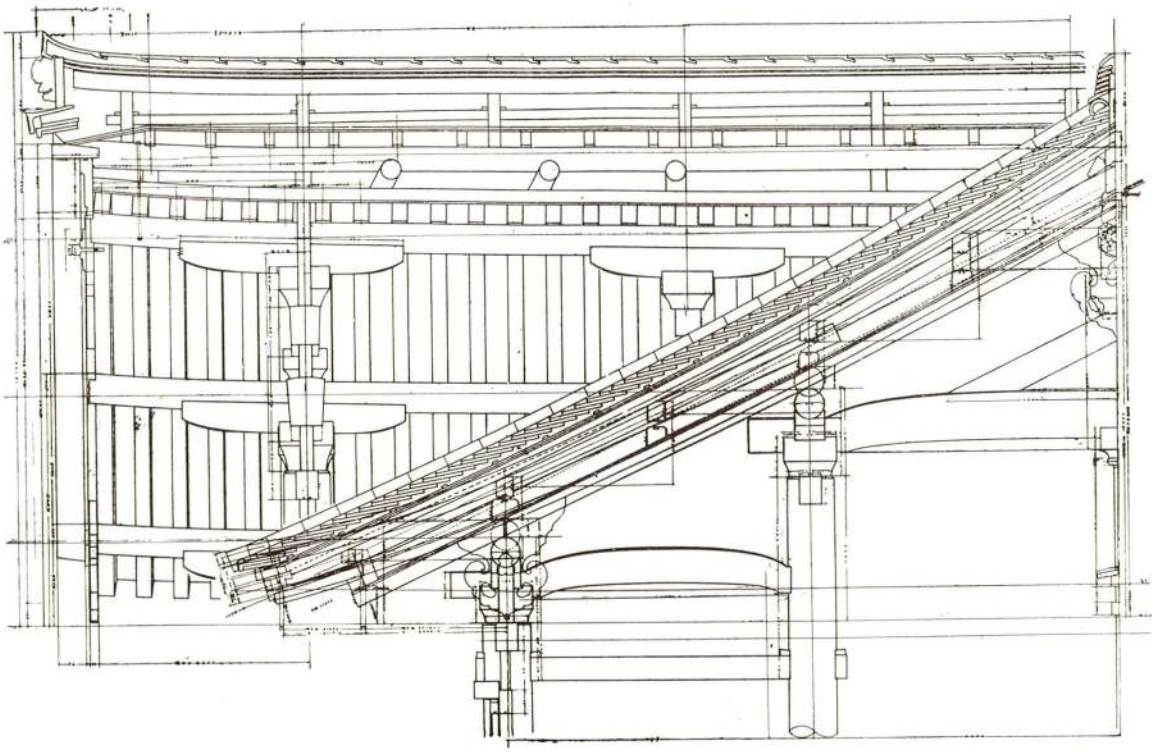
法隆寺細殿詳細圖



法隆寺食堂及細殿修理前側面圖



法隆寺食堂修理前背面圖



法隆寺食堂詳細圖



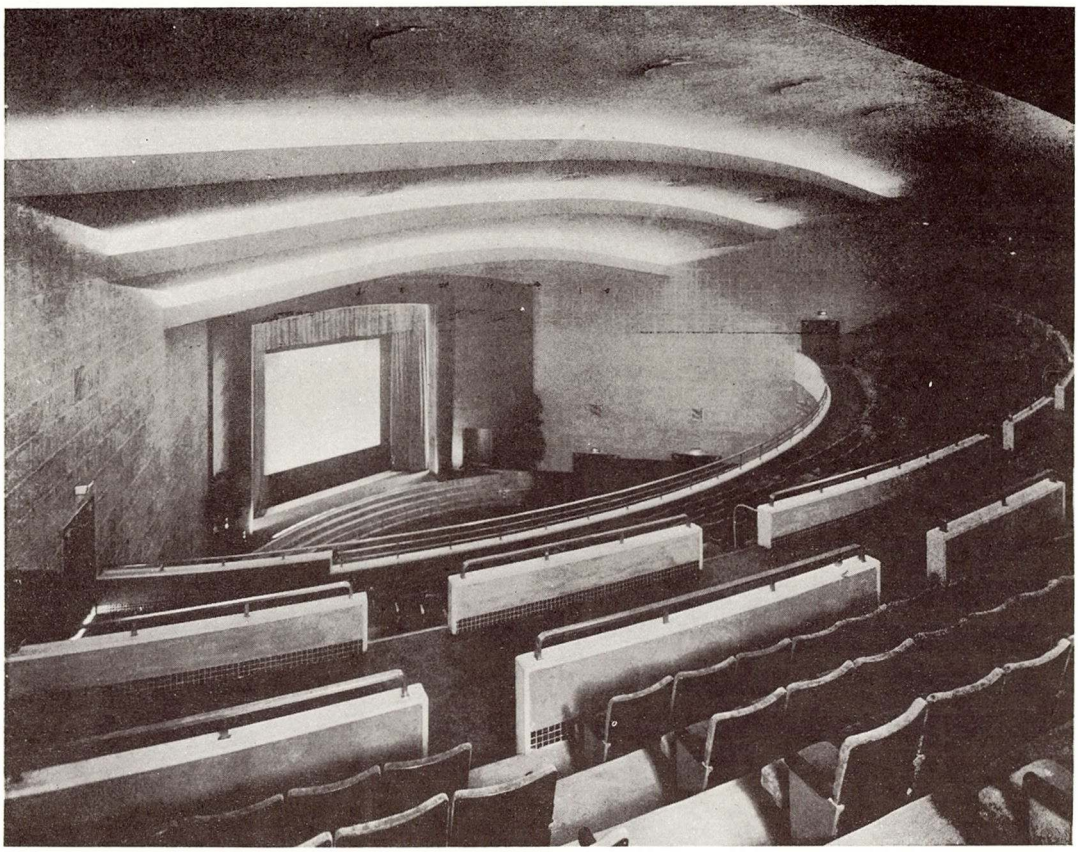
夜　景



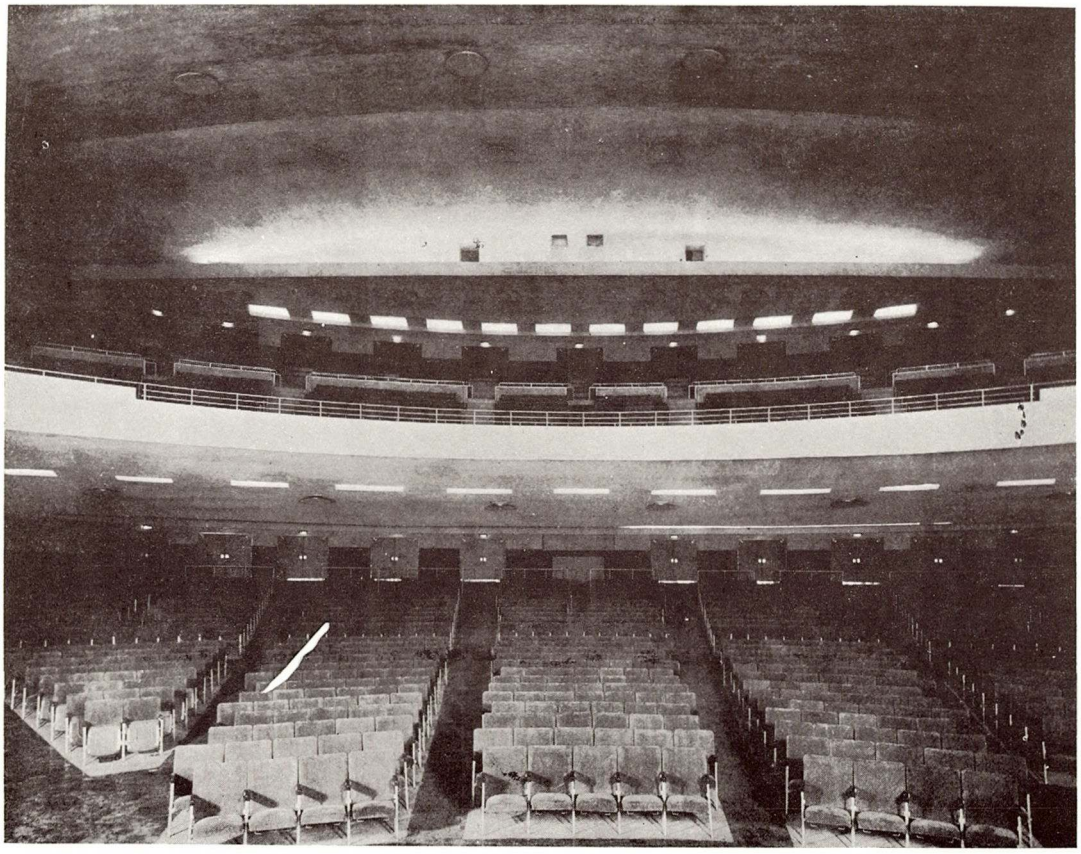
正面全景

神戸・聚樂館

設計施工　大阪木村組



2階観覧席より舞臺を望む



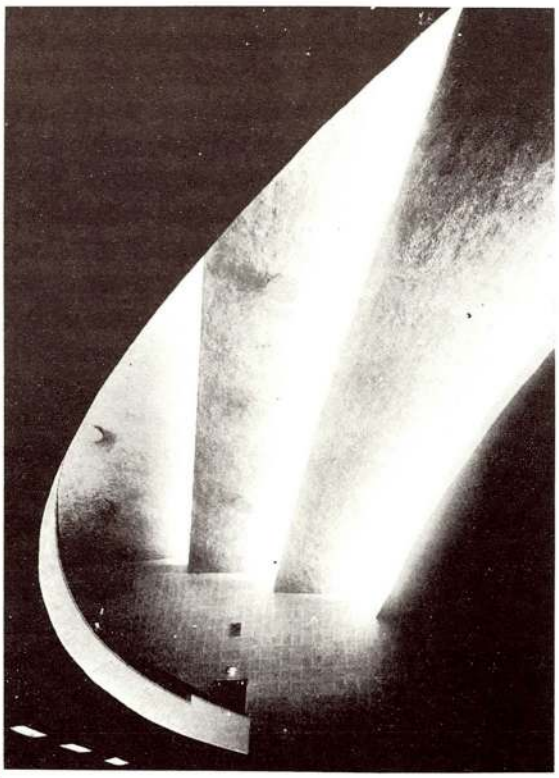
舞臺より観覧席を望む



1階観覧席の1部



休憩室

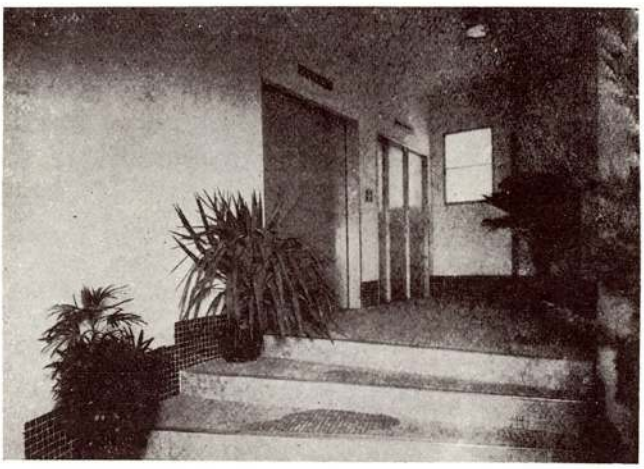


観覧席天井照明

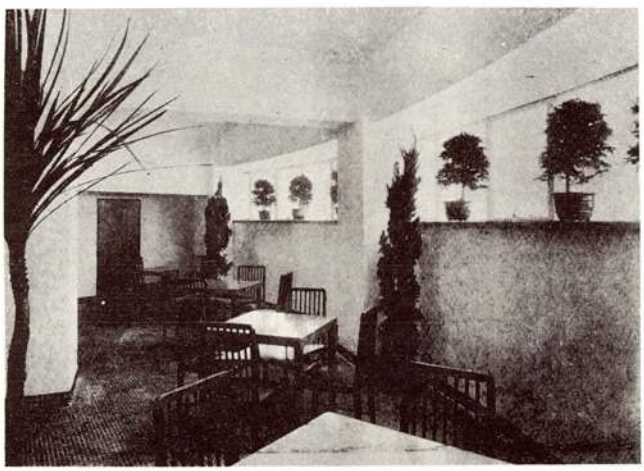
神戸・聚楽館　　設計施工　大阪木村組　71 IV



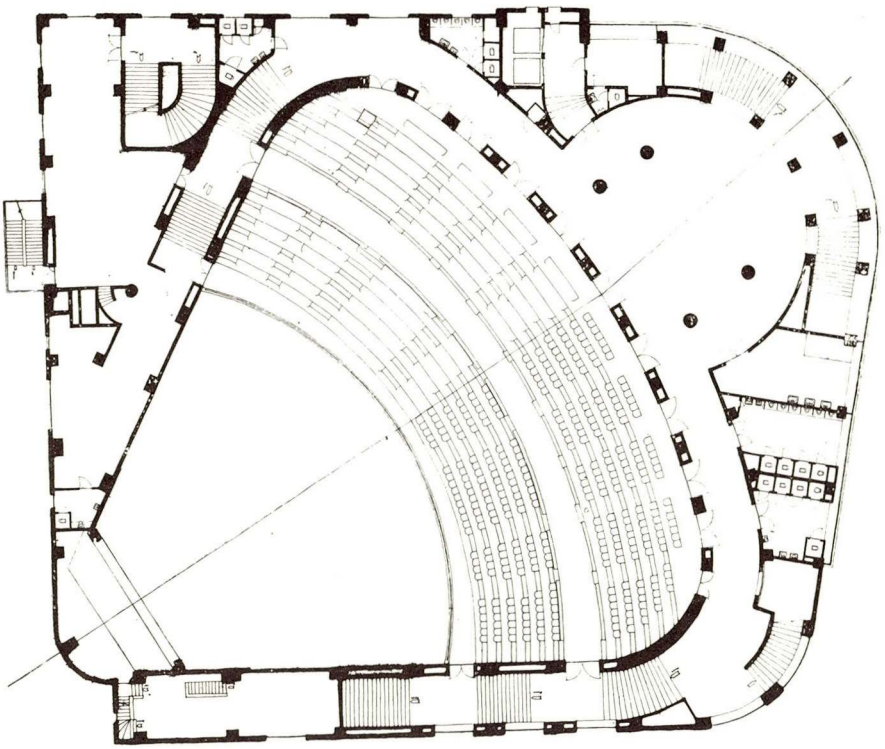
1階ホール



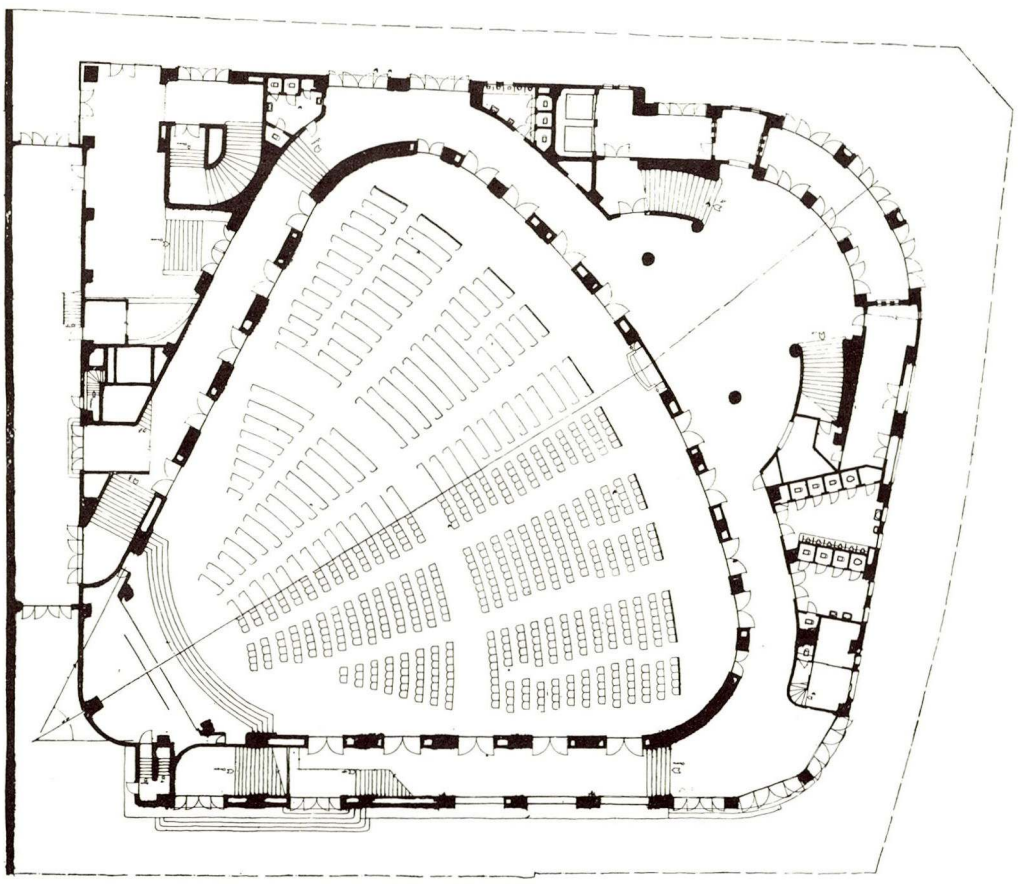
廊下1部詳細



喫茶室



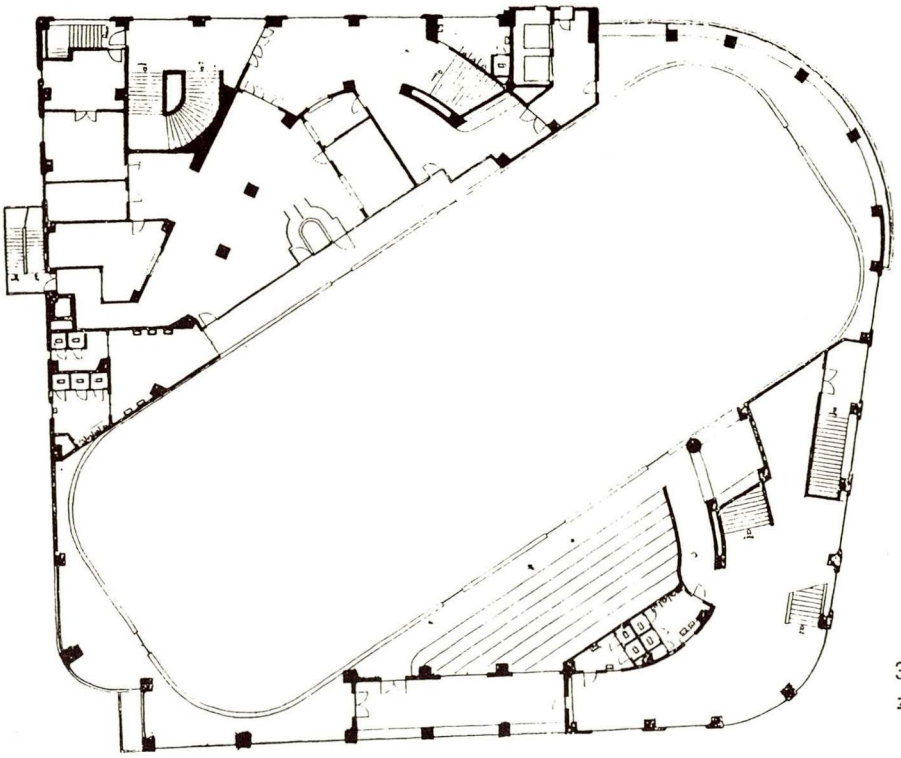
2階平面圖



1階平面圖

神戸・聚楽館

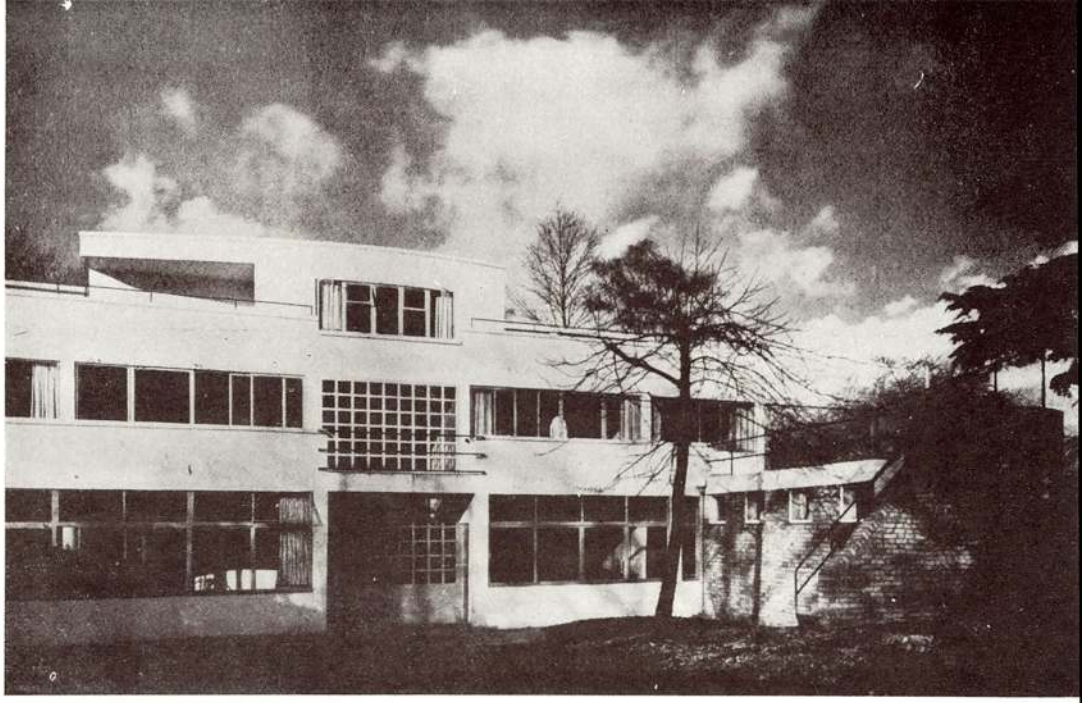
設計施工　大阪木村組



3階（スケートリンク）
平面圖

聚樂館改築工事概要

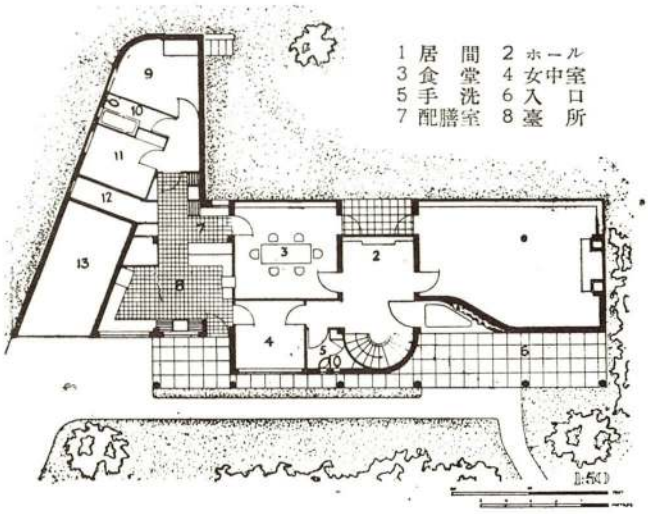
所　在　神戸市兵庫區水木通1丁目35ノ2番地
敷地坪數　898.3坪
總延數　2601.12坪
　内譯
　地　階　283.79坪　1　階　644.50坪
　中2階　167.33坪　2　階　623.92坪
　中3階　185.37坪　3　階　623.92坪
　屋　階　72.29坪
様　式　新興型式
建築物構造　鐵骨鐵筋混凝土造
　階　數　地上5階建
　高　さ　總高　120尺
　　軒高　102尺
建築工程　昭和8年9月22日　舊館取毀工事開始
　　昭和8年11月25日　地鎭祭
　　昭和9年12月15日　竣工
　從業延人員　65,300人
　鐵　骨　材　1,200噸
　鐵　筋　材　450噸
　セメント材　13,500樽
　設　計　大阪木村組設計部
　施　工　大阪木村組
觀客定員
　常設活動寫眞館　計　1,705人
　第1階　1,035人　第2階　670人
スケートリンク
　滑走面積　300坪　觀覽席定員　200人
構造概要
　主體軸部鐵骨鐵筋混凝土造體壁床版、屋根鐵筋混凝土造
　外裝
外部正面玄關出入口額緣水磨き岡山產錆石を使用腰錆石張り壁庇上端より光華石張り庇天より上部「パラペット」上端迄薄クリーム一色の「リソイド」塗り仕上げ「サツシユ」「ドアー」「シヤツター」等凡て鐵製「シルバーラツカー」塗を施工す
　内裝
先づ玄關は床壁は琉球產トラバーチン張り、ホール（休憩室）左右廊下、左右主階段共灰色、緣色の「ゴムタイル」を縞模様、市松模様に張り壁は天井下端迄鹽地柾板を縱張りなし廊下腰布張りペンキ塗り、天井コルタ吹付けペンキ塗り仕上げとす
觀覽席は映畫館として最も必要とする音響と視線に就て平面主體計劃に於て特に考慮し音響の効果を高める爲特選特殊の材料を適所に用ふ、腰は布張りペンキ塗り仕上げとし、壁「エターナイト」防音板厚2糎を用ひ、床「チヨコレート」色「ゴムタイル」を張り重厚な椅子を配置し、天井「コルク」吹付け「ペンキ」塗り仕上げ「プロセニアムアーチ」は「チーク」柾横板張りとなし「セルバ」透明塗りとす
電氣、照明
　映畫專門の劇場照明として特に留意すべき觀客の氣分を第一とし且視覺の疲勞を可成的に少くする爲凡て場内照明を「コーブ」照明とし映寫中と雖も或る照度の「コーブ」照明を與へ即ち觀覽席照明は幕合照明と映寫中照明の二部照明となし「オートデンマー」にて調光さる
觀覽席入口及館内要所の個所には非常照明として「パツフワーライト」を設備なし、之は地階第一變電所に設備の米國「ウエスチングハウス」會社製自動式ガソリン發電機より停電と同時に自動的に瞬時に送電點燈する「ステーヂ・プロセニアム・ライト」「スポツトライト」「フツトライト」「ドンチヨウ」の揚げ下げ場内「コーブ」照明、開幕、電鈴は凡て「リモート・コントロール」式に中3階に設置せる映寫室より制御し得
電力は神戸市電氣局變電所の各異なれる2系統より高壓地下ケーブル線にて1千キロワツトを受電なし變電室は地階及中3階2ケ所に設く
煖冷房及換氣裝置は「キヤリアー」式を採り冷凍機は切替式にて夏季冷房用他の時季はスケート用に利用なす何れも冬季外氣が華氏30度の時内部60度乃至65度とし夏季は外氣華氏90度の時内部70度内外とし更に四季を通じ「キヤリア」劇場用自動溫濕度調整裝置により調整なす



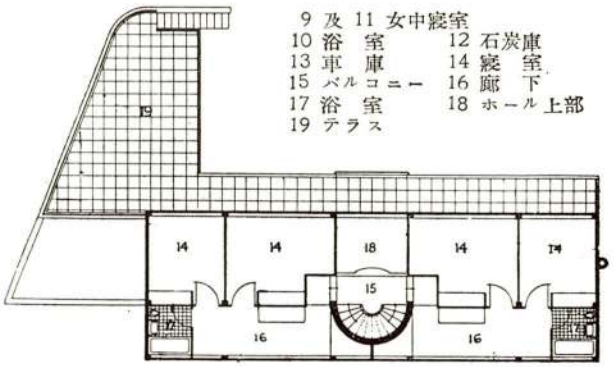
背面外観



道路側の入口ロジヤ、半圓形階段は煉瓦造である



1 階平面圖



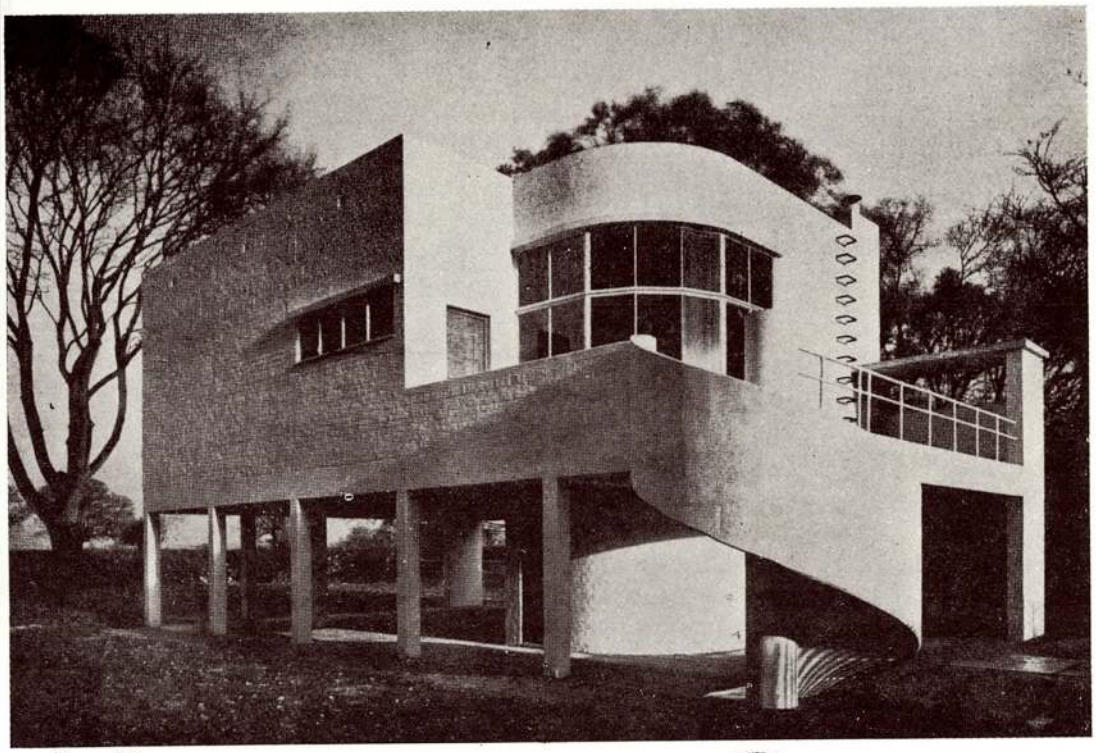
2 階平面圖

建物は2階建の鐵筋コンクリート造の部分と、1階建煉瓦造の家事用諸室の部分とからなる。コンクリート外壁は薄クリーム色ペンキ仕上、鐵筋コンクリート間仕切は厚4吋の上に2吋のコルクを張る。床版は穴洞タイル、家事用諸室の床はマグネシウムコンポジション仕上、其他は主としてセメント仕上である。

(Architectural Review 誌より本多正道)

(イギリス) Sydenham 丘上の住宅、ロンドン

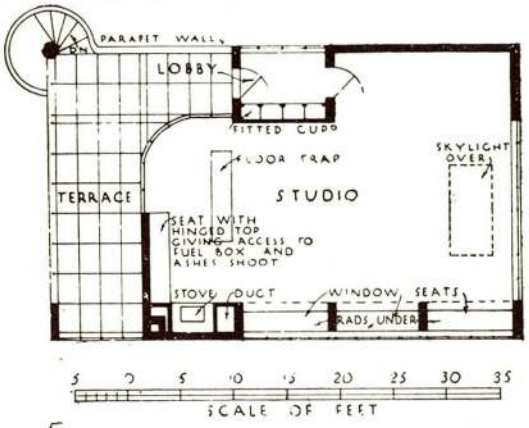
建築家 V. Harding



外　観

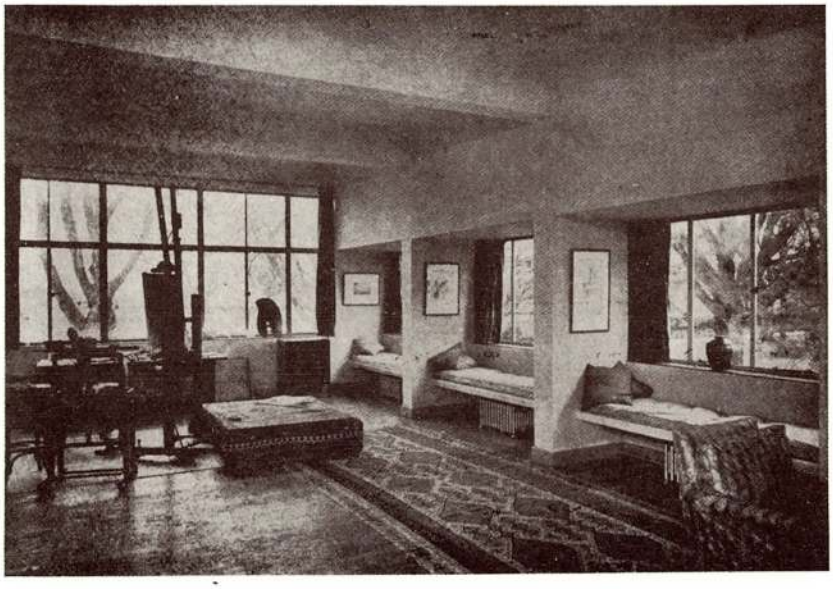
螺旋階段は R. Robertson の設計になり、各段同様な形の輪形のプレカスト・コンクリートをとりつけたものである。1階の天井もプレカスト・コンクリートの床版を以て造られ、1部畵庫の外は全部吹放しである

（Architectural Review 誌より　本多正潰）



5

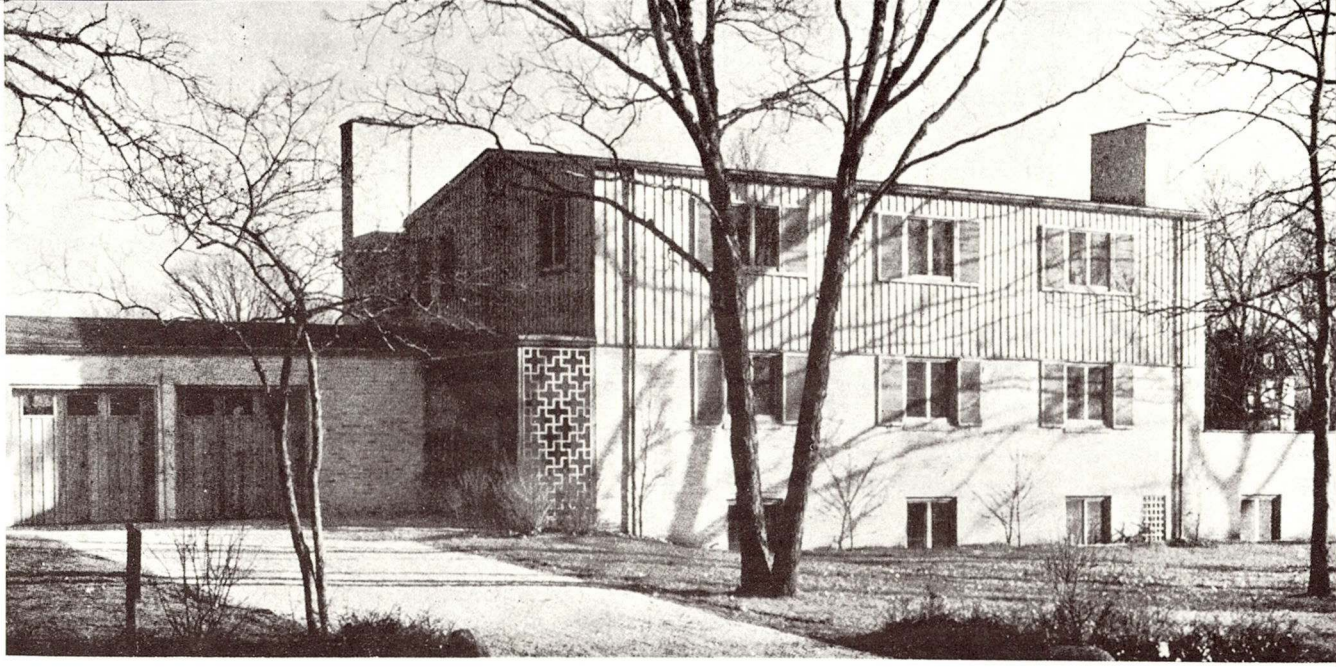
2階平面圖



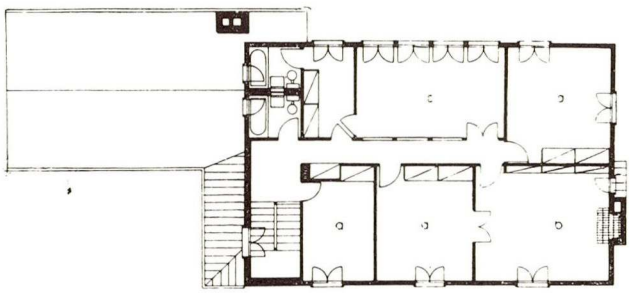
アトリエ内部

（イギリス）Augustus John 氏のアトリエ

建築家 Christopher Nicholson



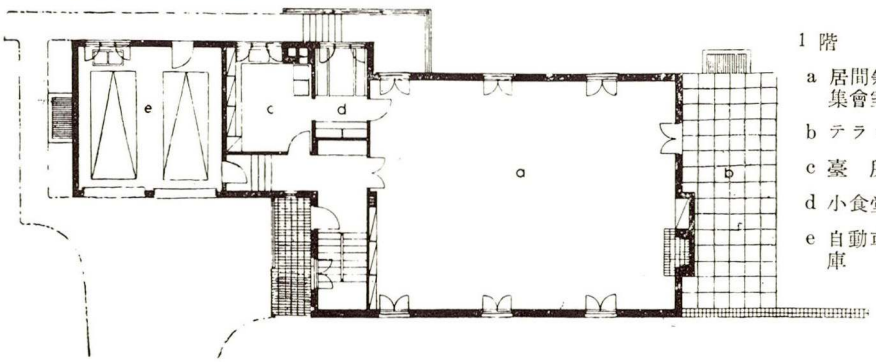
外　觀



2 階

a 寢室
b 居室
c 女中室

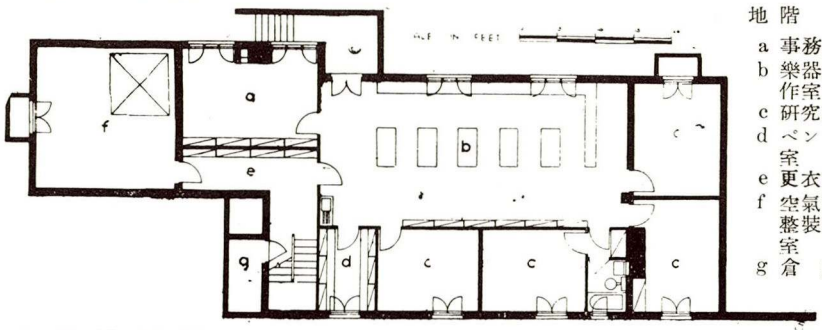
2 階 平 面 圖



1 階

a 居間兼集會室
b テラス
c 臺所
d 小食堂
e 自動車庫

1 階 平 面 圖



地 階

a 事務室
b 樂器製作室
c 研究室
d ベンキ室
e 更衣室
f 空氣調整裝置室
g 倉庫

地 階 平 面 圖

樂器の構造及製作法を歷史的に、理論的に、又は實地に教授する學校で、學校と1教授の住宅とより成つて居る。

1階の居室は食堂ともなり、讀書室ともなる樣に家具の設備が出來て居る。必要に應じて200人以上を收容し得る集會室ともなる。

構造は基礎から地盤面までは防水された鐵筋コンクリート造、地盤面上1階床までは煉瓦造、この部分は内部はプラスター仕上。1階床より2階床までは外壁は煉瓦と 2″×6″ の木柱とを竝用したる構造で、内部は居間ベニヤ板、その他の部分はセロテックス。2階床から屋根までは木柱と筋違との構造で、外部は圖の如く 1″×8″ の竪羽目板張である。外壁の木柱間には凡て 1″ 厚の Sprayo-Flake を以て絶緣してある。内部間仕切壁は木柱の兩側セロテックス張、1階間仕切は煉瓦の上に2″厚の Sprayo-Flake で音響絶緣を行つた上セロテツクス張。

床は地階コンクリート色モルタル仕上、1階床は下地 Sprayo-Flake の上に楓材張、2階床も同樣に楓板張とす。

天井は全部セロテツクス。

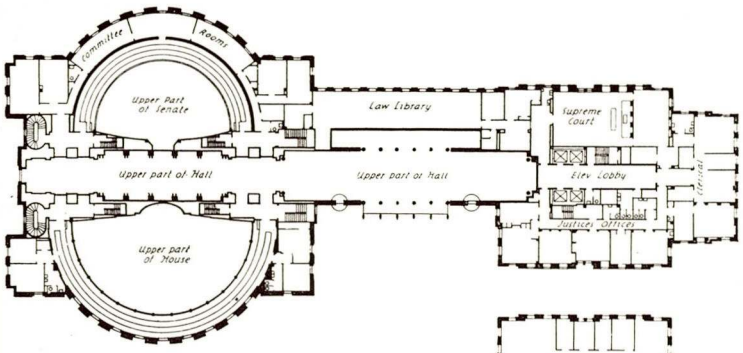
屋根は赤色のアスファルト板にて葺く。

工費は空氣調整裝置をも含んで立方呎當 29.8¢ である。

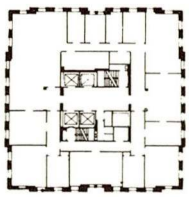
（Architectural Record 誌より　新名種夫）

（アメリカ）イリノイズの樂器工藝學校

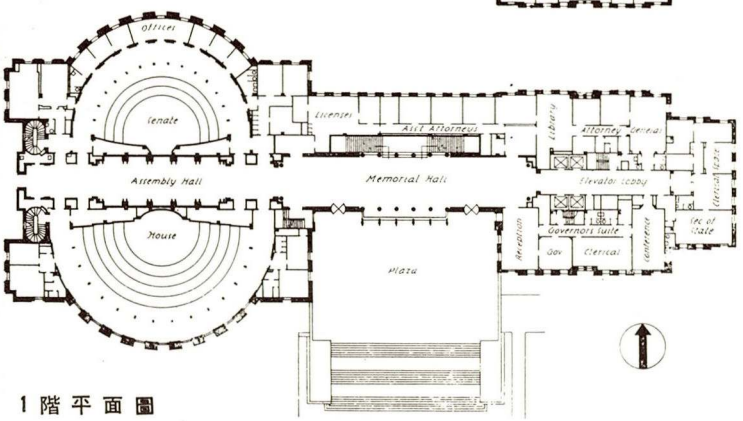
建築家 Paul Schweikher



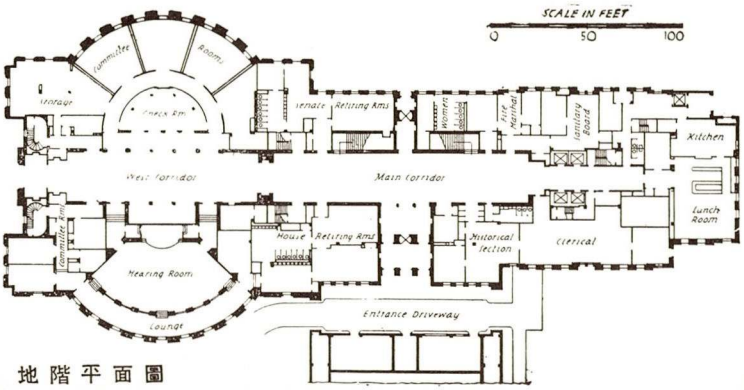
2階平面圖



塔屋平面圖



1階平面圖

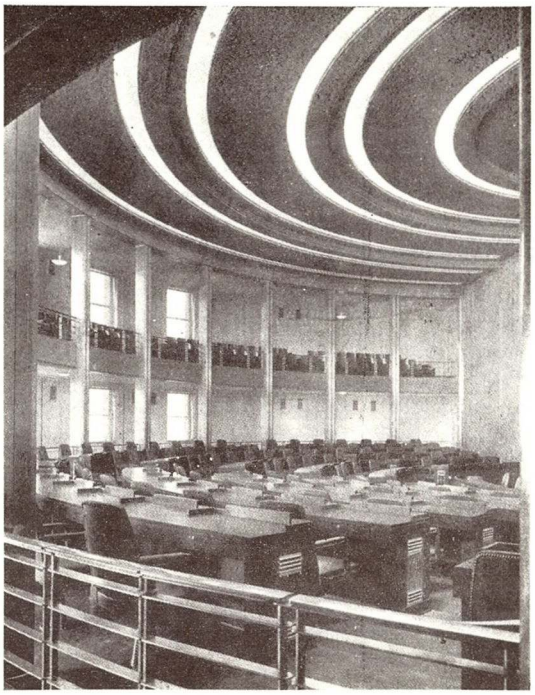


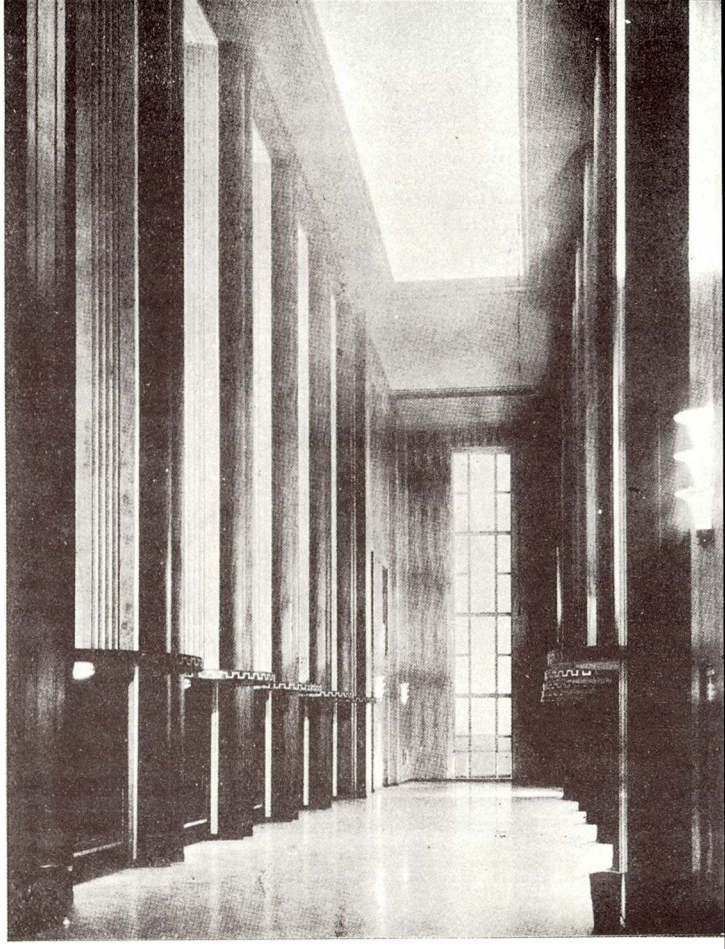
地階平面圖

米國に於ける州會議事堂建築の傳統的な様式を破つたものとして注目に値する。舊議事堂は1930年12月に燒失し、その代りに新築されつつあるもので、全館の竣工は1936年1月の豫定である。工費總額2,000,000 弗に達する筈である。

IV 78　（アメリカ）North Dakota 州會議事堂　　建築家 Joseph Bell DeRemer 及 William F. Kurke

下院議場内部





議場玄關廣間

下院の演壇



圖の廣間は、床は灰色の Tennessee Marble、壁は木理の捻れた楓、それに茶褐色のレザーの椅子が美しい色調の調和を見せて居る。議事のない日には入口が閉鎖されるが、隣接の Memorial Hall があるから一般公衆の爲には何等不便はない。

下院議場は、壁は自然色の栗材、柱型と手摺とはブロンヅ、これ等の程よき組合せの爲に煩雑なデイテイルの省略にも關らず、少しも威嚴を損しては居ない。

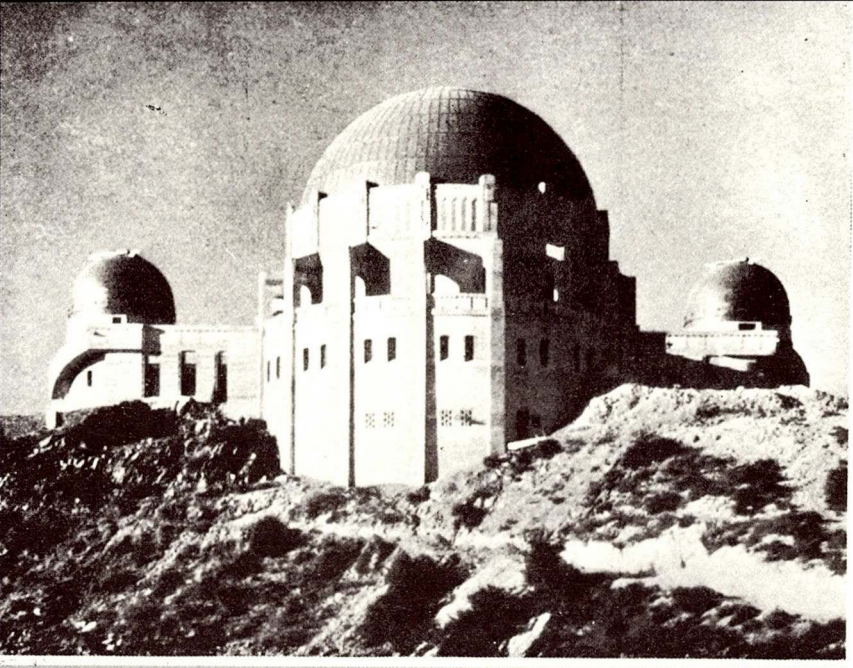
大天井及びギヤラリー下部天井に「防音タイル」、床にゴムタイルを使用した爲に反響が餘程減少した點に注意のこと。

下院の天井の照明は演壇の演説者の上に中心がありそれと同心圓の間接照明があつて、各議員の注意が演説者に集中せられる樣計畫されて居る。

(Architectural Forum 誌より　新名種夫)

(アメリカ) North Dakota 州會議事堂

建築家　Joseph Bell De Remer 及 William F. Furke

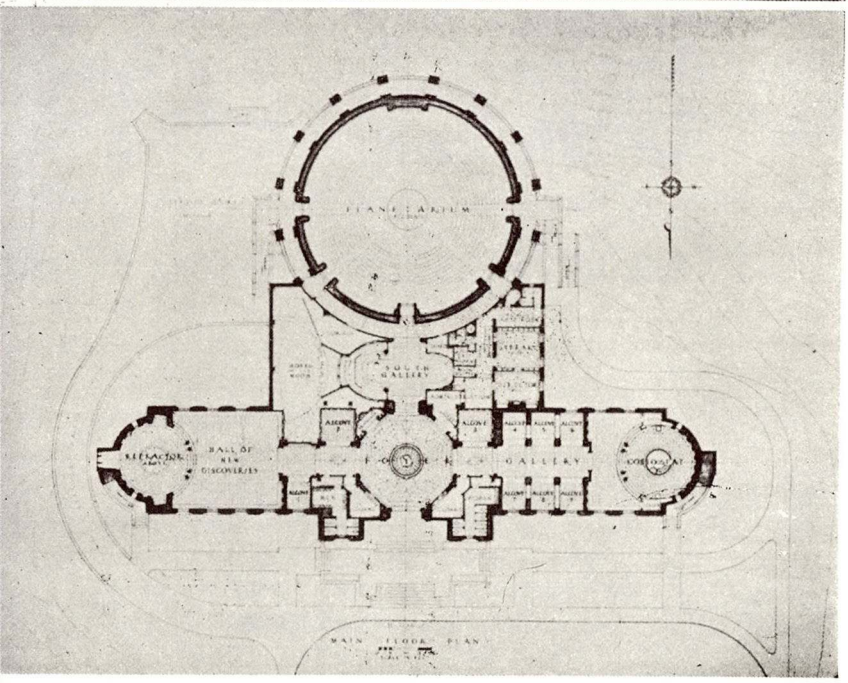


外　觀

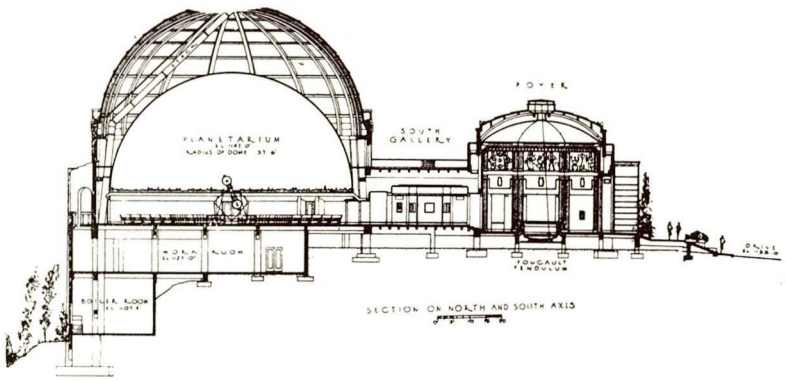
ホリーウツトの西部の傾斜地に建てられたもの。シカゴ及びフイラデルフイヤのそれと共に、アメリカに於ける3つの大天文臺の1つである。最近ニューヨークに出來上るものと加へると此程度の天文臺が合計4箇所となる。

平面圖の下方8角形が入口廣間で、ここには Foucault pendulrem が懸つて居る。その兩翼のギヤラリーは兩端部に小ドームを頂き、望遠鏡と Coelostat とが備へ附けられて居る。平面中央部左方の月の模型は日光に依つて實物の月と同樣の變化が生ずる樣に作られて居る。その右の方は事務室と圖書室とである。平面の上部圓形の部分が大ドームで12″の反射望遠鏡が据附けられて居る。

(Architectural Forum 誌より　新名種夫)

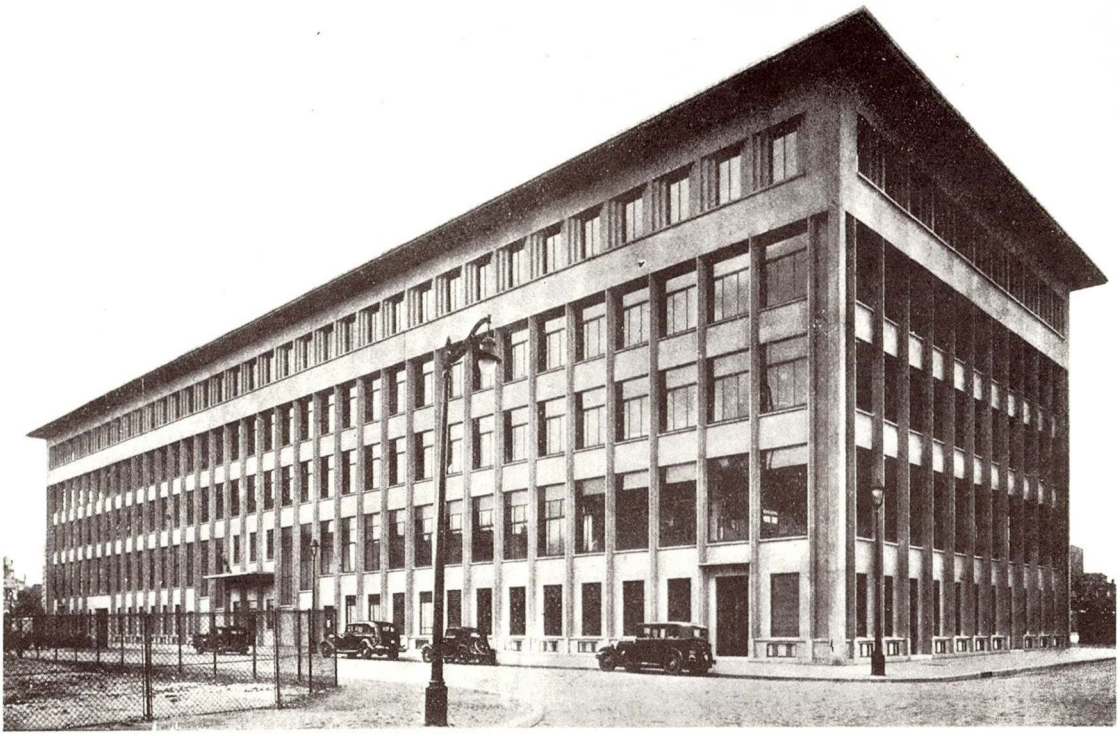


平　面　圖



斷　面　圖

IV 80　（アメリカ）ロスアンゼルスのグリフイス天文臺　建築家 John C. Austin 及 Fredric M. Ashley

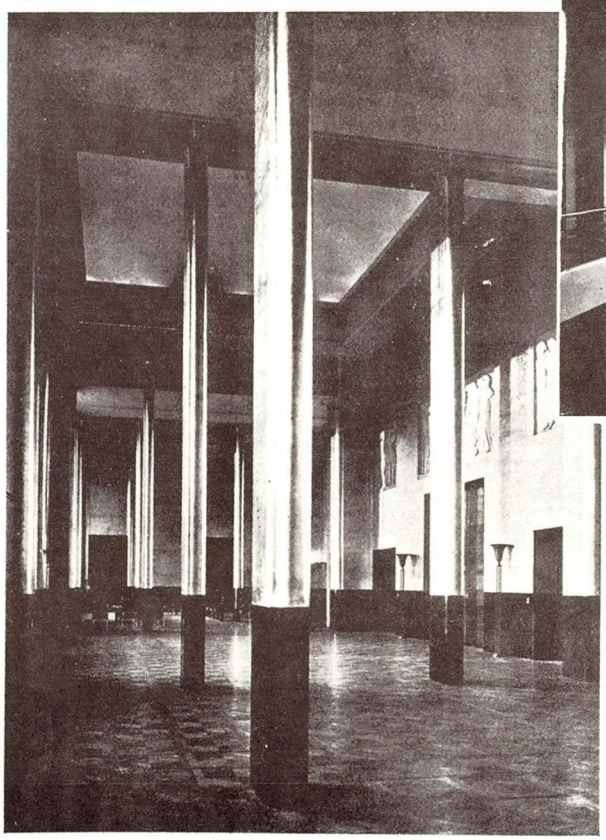


正面圖

事務的方面の廣間



正廳

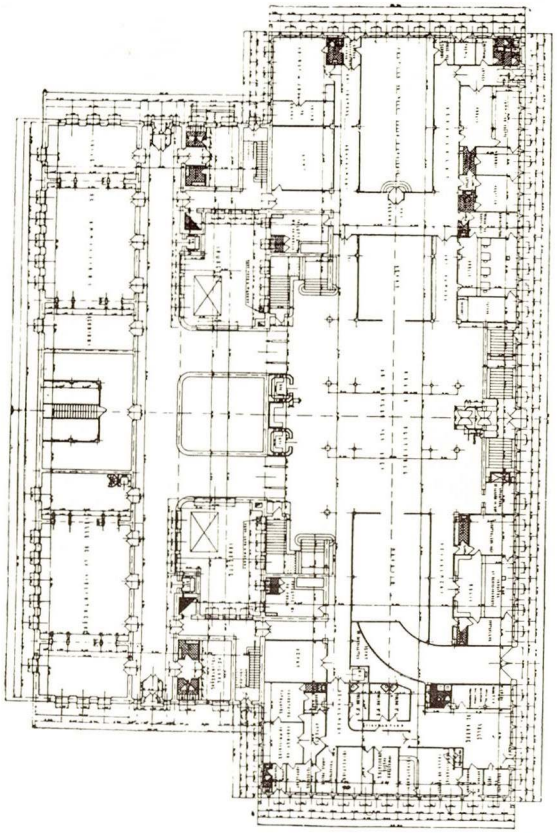


ブウロウニュ、ビランクウル市の中央部に1934年新廳舍が竣成して、大通にも多少の變更を行つてゐる。
新廳舍は大體
1)一般事務的方面
2)正廳、議場、結婚式場、市長及び助役室
の二方面に便なるやう平面計畫が企畫されてゐる。
フランス在來の役所では各部課が夫々壁で仕切られた割據的なものであつたのが、新廳舍では思切つて開放的なものになつてゐるのが新しい行方といへばいへるのであらう。
因にブウロウニュ、ビランクウル市といふのは巴里の西南に接しセーヌ河で取捲れた地域を占めてゐる巴里の隣接都市である。

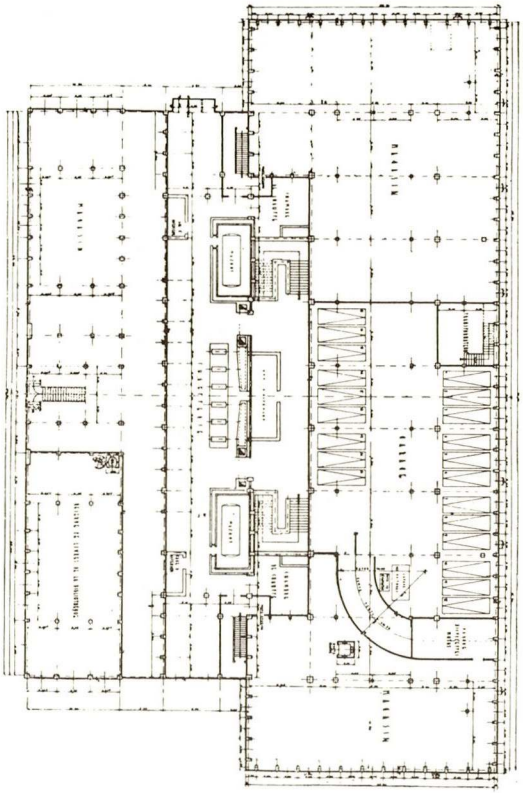
(L'Architecte 誌より　中西六郎)

(フランス)ブウロウニュ・ビランクウル市廳

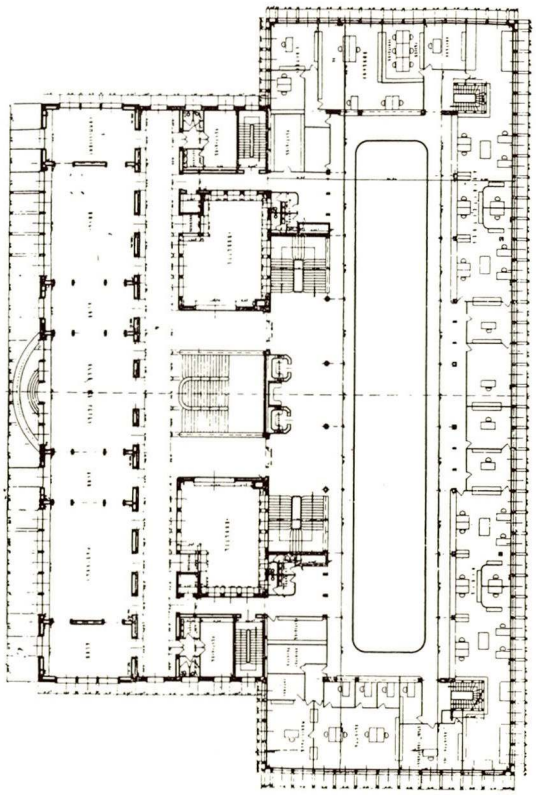
建築家 Tony Garnier 及 J. Debat-Ponsan



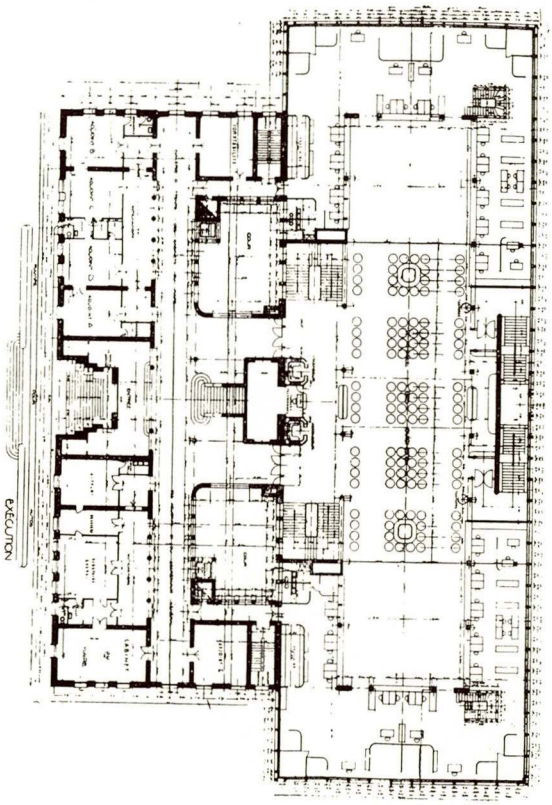
第 1 地 階 平 面 圖



第 2 地 階 平 面 圖



2 階 平 面 圖



1 階 平 面 圖

（フランス） ブウロウニユ・ビランクウル市廳

建築家 Tony Garnier 及 J. Debat-Ponsan

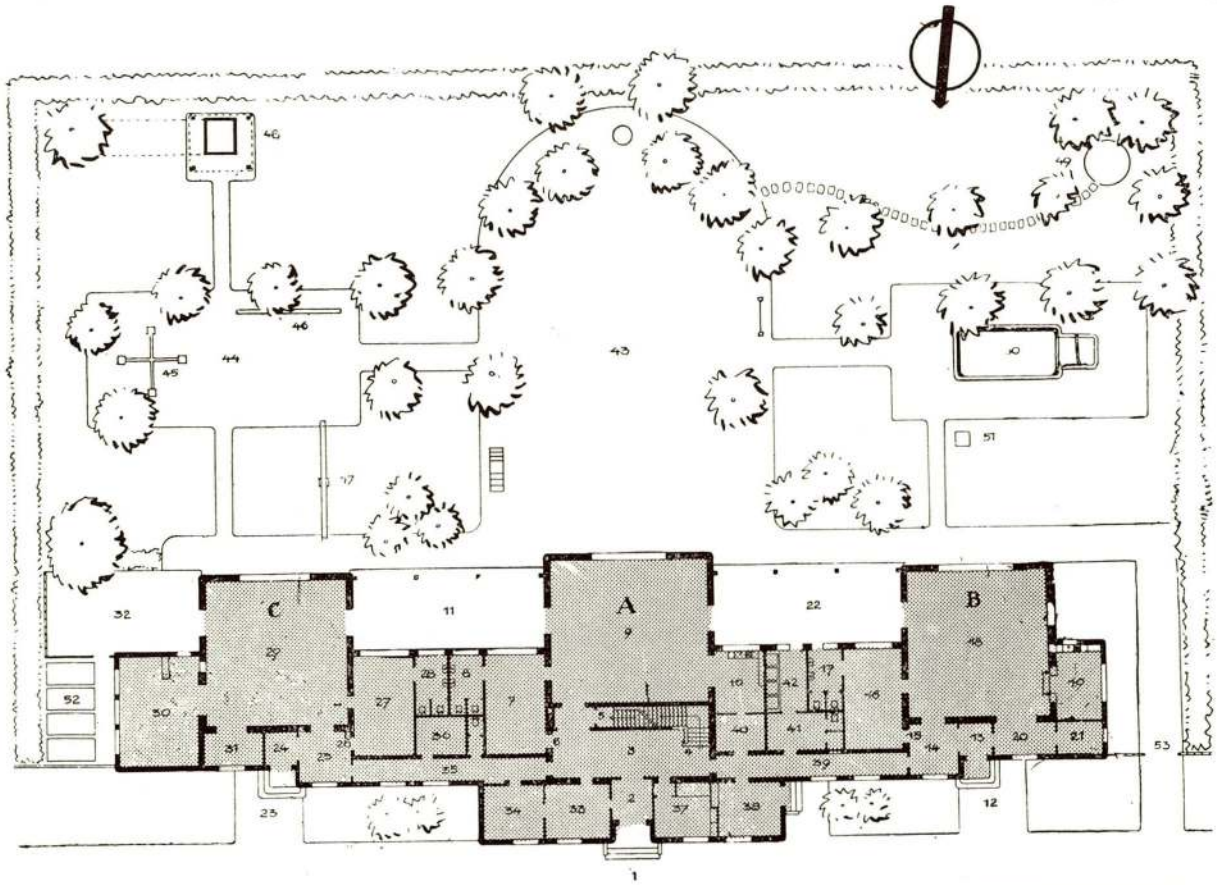
イタリアの婦人マリア・マンテソリー博士の教授法に則つて建築されたウイーンの「小兒の家」は、小兒の世界の1つの園ひとして極めて讓遜な態度で取扱はれてゐる。建物はA, B,C の3部分に分たれて各別々に入口、事務室、大ホール等あり、AとBは6歳以上、Cは1年級位の小兒各部約30～35人を收容する。

1、主要入口 2、玄關、3、ホール、4、體操場及休憩室への階段、5、地下室への階段、
A 部
6、入口、7、外套室、8、洗面及便所、9、ホール、10、家事用入込み、11、テラス、
B 部
12、主要入口、13、玄關、14、入口ホール、15、入口、16、外套室、17洗面及便所、18、ホール、19、家事用入込み、20、クラス入込彙應接室21、物置、22、テラス、
C 部
23、主要入口、24、玄關、25、ホール、26、入口、27、外套室、28、洗面及便所、29、ホール、30、作業場31、クラス用入込、32、テラス

平 面 圖



外 觀



（オーストリヤ）ウイーン「小兒の家」

建築家 Franz Schuster



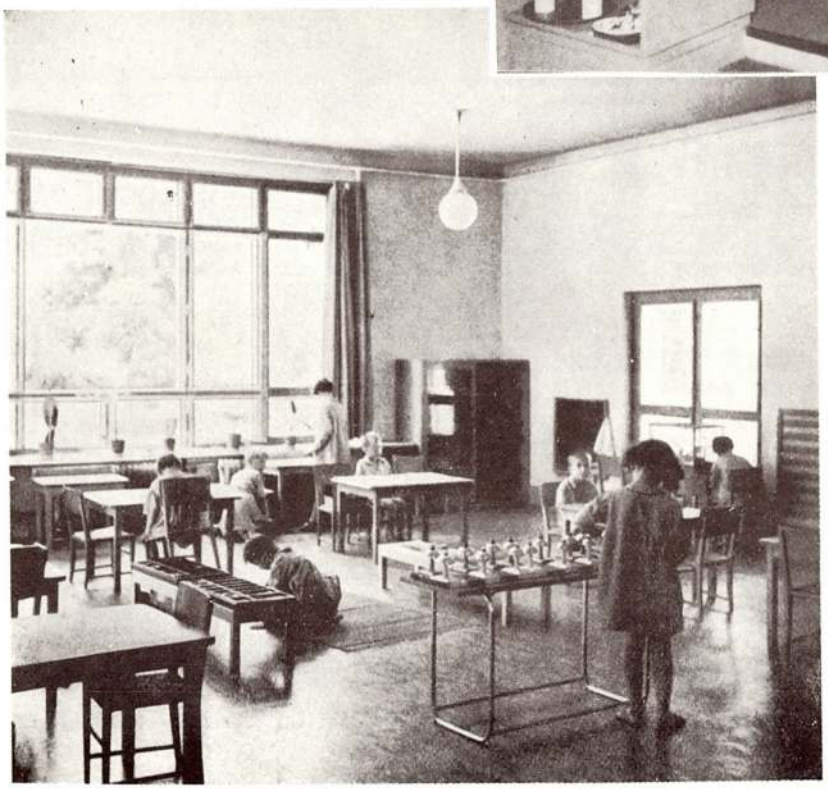
外套室　臺は靴の着脱に便なため設けたもの、

管理部
33、秘書室、34、園長研究室、35、廊下、36、大人用外套室及洗面所、37、門番室、38、厨房、39、廊下、40、食器室、
浴室
41、脫衣室、42、シヤワーバス、
庭園
43、遊び場、44、體操場、45、廻轉臺、46、平均臺、47、シーソー、48道具置場及馬屋、49、坐席及テーブル、50、水遊び用プール、51、日時計、52、植床、53、車道、



B 部の家事室

小供にも臺所の仕事を手傳はせるため、器具はすべて小兒に適する大きである



ホール

窓低く且つ窓臺廣く、物を置く事が出來る。

(Modern Bauformen 誌より

本多正道)

IV 84　(オーストリヤ) ウイーン「小兒の家」

建築家 Franz Schuster

市街地建築物法令並に關係命令の改正に就て

玉置豊次郎

日本建築協會並に建築學會の先輩會員諸君の非常なる御斡旋によつて出來ました市街地建築物法も公布を見ましてから既に16年の月日を閲することになりました、元來市街地建築物法といふ規程は取締を主眼として居る關係上、その間相當御迷惑を蒙られた方もあつたやうでありますが、結果から見て、大體先輩各位の豫想して居られた以上の好成績を今日擧げつゝあるといふことにつきましては、協會の會員の一員と致しまして、非常に喜ばしい次第と存じます。

偖而この16年の間に於きまして法令に規定致して居ります處の用途地域の問題或は高と空地の問題或は構造制限の問題につきましては、時代の趨勢、學術の進歩それから建築技術界の進歩によりまして、數回に渉り著しい改正もされて居ります只建築線の制度については建築線のことが法律の中に規定されて居る關係上、法律は無暗に動かすことが出來ませぬので、その儘につい今日まで手がつけられずに居つたやうな狀態であります、一方今日では百以上の日本の都市に市街地建築法が施行されて居ましてその大部分といふものは構造制限とか高さ空地の制限といつたものよりも寧ろ建築線制度に重きを置いて適用されて居るものが多いのであります、然るにこれは一度も改正されて居ないといふので、大分不都合があるといつたやうな聲を聞いて居つたのでありますが、幸にして、去年の議會の協賛を得まして、主として建築線に關する制度が改正されることになりました、さうしてそれに引續いて勅令、内務省令が改正されたのであります。その結果必然の順序と致しまして、各府縣の細則も改正されざるを得なくなりました。

それで、私と松井君が大阪の改正された細則をお話申上げて、京都の細則、兵庫縣の細則については各擔任者が別にお話をされることになるのでありますが、順序と致しまして、最初私は法律の改正された部分並にその要旨、その他内務省令の改正された部分についてお話申上げたいと存じます。

夫で先づ法律の改正になりました點から申上度いと存じます、今度は市街地建築物法では第七、第八、第九、第十、並に第二十三條が改正されたのでありますが、二十三條は大した問題ではありませぬので、結局第七條、第八條、第九條、第十條が問題になると思ひます、それで、この四ケ條とも何れも建築線に關する問題であります。

先づ第一に第七條でありますが、法文の改正と致しましては、從前は「道路敷地ノ境界線ヲ以テ建築線トスル」といふのを「道路幅ノ境界線ヲ以テ建築線トスル」といふ風に書替へられた丈であります。併し乍らその次の第九條及第十條の關係に於きまして、七條の但書に「但シ特別ノ事由アル時ハ行政官廳ハ別ニ建築線ヲ指定スルコトヲ得」といふ規定がありますが、この但書の運用が著しく變へられることになりました、元來この建築線の指定といふことは道路を新設する場合、擴張する場合、或は變更する場合の前提として、建築線を指定するといふことが一つあります、それからもう一つは道路の境界が、ちやんと決りましてその境界より更らに建築物を後退させる爲につまり路面の利用を有効ならしむる爲にその道路に沿ふ建築物を若干後退せしめたいといふ意味で後退建築線の指定といふのがあつたのであります。つまり建築線の指定には道路新設擴張變更する場合の前提とする指定と、それから道路に沿ふ建築物を後退させることを目的にする指定とから二つあつたのであります、處が後の方の場合、つまり建物を後退せしむるのを目的にする處の建築線の指定といふのはこの際廢めまして、それを後の壁面の位置といふ方に繰入れることになつたのであります、その目的は建築線制度を充實せしむるといふ趣旨にあるのであります。今日まで大阪では道路幅の境界から1尺5寸後退した處に建築線を指定されて居つたのでありますが、それが廢止にな

りまして、その代りにそれを壁面線といふ言葉で呼び變へられることになつたのであります。

その次に第八條の改正でありますが、八條の改正によりますと、今までは「建築線ニ接セシムルコトヲ要ス」といふ風になつて居つたのでありますが、今度は「道路敷地ニ接スルニ非レバ建築スルコトヲ得ズ」といふ風に書替へられました。その主眼とする處は建築線といふものと道路といふものとは不可分のものでありますけれども、建築線を指定されるといふことは必ずしも同時に道路が出來るといふことの前提でなかつたといふのが內務省の解釋であります、だからして、建築線が指定されてそれに接して家は建つたけれども、道路は出來ないでそのまゝになつて居るといつたやうな取扱をして居る府縣が他に澤山あつたのであります、それは如何にも不合理であるからして、家を建てるには飽くまでも道が出來るといふことを前提にして、道が出來なければ家は建てさせない、建築線が指定されて居る丈けでは家は建てられないんだといふ風に改正しやうといふのです、元來大阪に於きましては、大體建築線といふものと道路といふものとは同じ意味の言葉であるといふ風に解釋しまして、今迄の私共の取扱と致しましては、建築線を指定しますと家をお建てになる前に大體は道路を作つて置いて頂いたのでありますが、他の府縣では必ずしもさうではなかつたのであります、それでこの改正は大阪に於ては左程大した改正にはなりませぬけれども、府縣によりましてはこれは非常に大きな改正といふことになつて居ります、結局家を建てる前に必ず道が出來て居なければならないといふ風にしやうとするのがこの第八條の改正の要旨であります。

それで次の第九條の改正でありますが

本文は左程變つて居りませんが但書が改正になりました

「但シ建築物ノ地盤面下ニアル部分ハコノ限ニアラズ」といふ風に變りました、然るに從前の規定はその但書が「但シ建築線ガ道路幅ノ境界線ヨリ後退シテ指定セラレタルモノナル時ハ云々」でありました。

つまり從前の但書では先程申上げました處の後退建築線といふものを豫想して居つたのであります。處が今度はそれを廢めるといふことになりましたから、從前の但書がすばつと全部消飛んでしまつたのであります、その代りに地盤面下の規定が代つて挿入されることになしました。

その次第十條の改正は「行政官廳ハ市街ノ體裁上必要ト認ムル時ハ建築線ニ面シテスル建築物ノ壁面ノ位置ヲ指定スルコトヲ得」とありましたのを、その體裁といふ文句を計畫といふ文句に變へたのであります、體裁を計畫に變へただけでありますからして、簡單な改正であるかの樣に見えますが、それは先程申上げた通りに後退建築線といふものを廢めて、それを全部壁面線の方に持つて來る爲に、今度は體裁丈ではなくなつて、街の交通を圓滑ならしむる等といつたやうな大きい意味も含まれることになつたのでありますからして、體裁丈と云ふ文句では不充分になりましてそれを計畫といふ文句に變へたのであります。

次に勅令でありますが今回同時に勅令の一部分が改正になりましたが、これは大した問題ではありませぬから省略いたします。

それで今度は內務省令、即ち市街地建築物法施行規則の改正でありますが、これも差詰皆樣方の御設計に際して著しい影響を蒙られるといふやうなことはないと思ひますが、その內二三、これはといふ點を申述べますと

今まで地階の定義それから屋階の定義が非常に曖昧でありましてその爲め特殊建築物耐火構造規則邊りでは、3階の旅館は耐火構造にしろといふやうな規定があるのでありますが、この地階だとか屋階といふ定義が非常に曖昧であるのを幸にして妙な3階なのか2階なのかはつ切り判らぬといつたやうな設計が隨分あつた譯であります、つまり特殊建築物耐火構造規則の裏を行く爲にこの地階屋階の定義の曖昧なのを利用されて屋つたといふ形になつて居りました、それで都市の耐火建築物を增すのを主眼とする爲に、裏を行かれぬやうに地階屋階の定義を明瞭にするといふことになつたのであります。そこで、從前地階の定義「地階トハソノ床面、地盤面下ニアル階ヲ云フ、但シソノ床面地盤面下ヲ下ルコト一尺未滿ナルモノハ之ヲ第一階ト見做ス」つまり1尺1寸地盤から下つて居つたら地階であつて階數に入らないから事實3階建のものを1尺1寸下つて居るから2階と見て呉れるといふやうなことになつて居つたのであります、それを防ぐ爲に今度は但書を「但天井高ノ三分ノ二以上ガ地盤面上ニアル階ハ第一階ト見做ス」

といふ風に變へましたから、これによつて大體今までの定義がはつ切りすると思ひます。それから屋階でありますが、從前の定義は「屋階トハ屋根裏ニ設ケタル階ヲ云フ」今度の定義と本文は同じでありますが、但書をつけて「但、地方長官ソノ構造、用途、床面積ソノ他ノ狀況普通階ト大差ナシト認ムルモノヲ除ク」普通階と大差なきものはこれは屋階ではない、さうして特殊建築物耐火構造規則の制限を受けるんだといふことになりました。

それからも一つ第四條の改正でありますが、後退建築線といふものがなくなりましたから、從前の四條がけし飛んでしまひました、その代りに新たに「建築物ノ敷地ハ長二米以上道路敷地ニ接セシムベシ」つまり1尺接して居つても建築線に接すると云ふ事實には間違はないのでありますが家を建てるのに1尺位接して居るのでは不都合であるから少くとも長さ2米以上道路に接することが必要だといふことになりました。

その他もう一つの問題は、階段の規定が改正されたことであります、一般の階段構造制限は從前でもあつたのでありまして尙、特殊の用途に供せられる建築物の階段については一切之を細則に委ねられて居つたのであります、然るに先年京都驛の大慘事があつたりその他各處に階段の構造の不適當なる爲にぼちぼち災害があるやうでありますから特に多人數出入する階段については茲に一つ制限が殖へました、その制限の程度についてはお讀み願ふたら判る程度でありますから、說明は省略します。施行規則の方で申上げる主眼點は大體それ丈でありまして、今度は大阪府の施行細則の御說明を致したいと思ひます。

先づ第一章の總則についてはこれは讀んで頂いて、殆ど疑問點がない筈でありますから略します

その次第二章の地域といふことにつきましては曩に昭和6年の暮、7年の初に勅令、內務省令がうんと改正されました、その時に大阪の施行細則も同時に改正される筈であつたのでありますが、色々の都合で改正することが出來なかつたのであります、その爲に今度法律の改正を機會に當然前に爲さるべき改正が同時に爲されたといふことになりました、今度改正されました主要點は、從前勅令で各地域に建築することの出來ないものを種々擧げられて居つたのでありますが、大阪の施行細則では勅令に擧げられて居ないものを更らに多數列擧して居つたのであります、然るに前の勅令の改正の際に、大阪の施行細則に規定してあつたものをどんどん勅令の方に引つ張り上げてしまつたのであります、だからして大阪の細則の商業地域、工業地域の規定の中には重要なものが殘らなくなりました、それでこの際この二つの地域については全部廢止致しまして住居地域丈、勅令に持つて行かれなかつたもので重要なものを殘すといふ風になつたのであります、結局これは前に擧つて居つた數が減つたといふ丈でありまして、新たに殖へたのは一つ二つありますが、それは別に大したものではありませぬ、その內容については矢張り讀んで頂けば直ちに判るものばかりであります。

その次に第三章でありますが、建築線及壁面の位置、この第六條の改正は大阪の施行細則の今回の改正中最も重要なる改正の一であります、一應讀んで見ますと「第六條行政廳ノ管理ニ屬スル通路又ハ道路ニシテ幅員四メートル未滿ノモノニ在リテハ其ノ中心線ヨリ各二メートル距リタル線ヲ以テ建築線トス但シ幅員二・七三メートル以上ノモノニシテ已ヲ得ズト認ムルモノ又ハ土地利用上必要ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラズ」

前の規定は「幅員九尺未滿ノ道路ニシテ行政廳ノ管理ニ屬スルモノニ於テハ道路幅ノ中心線ヨリ各六尺ヲ距リタル線ヲ以テ建築線トス」

といふ風になつて居つたのであります。だからして單に文字を讀む丈では前の6尺が2メートルに變つたといふ丈に過ないのでありますが、實際は先程申上げた通りに後退建築線といふものがなくなつたのであります、だからして、相當な改正と云ふことになります、前の中心から6尺距つた處に建築線があるといふのは、中心から4尺5寸距つた處が道路の境界であつて、それからもう1尺5寸後退した處が建築線である、結局前の規定は9尺道が出來るのを前提として定められて居つたのでありますが、今度は後退建築線といふものがなくなりましたからして、茲に「中心線ヨリ各二メートル距リタル線ヲ以テ建築線トスル」といふことは、「中心線ヨリ各二メートル距ツタル線ヲ以テ道路ノ境界線トスル」といふことと同じ意味になつたのであります。だからして、4メートル未滿の行政廳の管理に屬する道路では必ず4メ

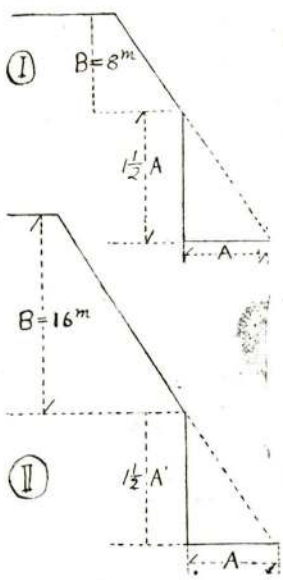
ートルまで道を擴げてさうしてそこに家を建てるといふことになつたのであります。その結果從前9尺であつたのが4メートルになりましたから道路と致しましては、4尺2寸廣くなることになりまして非常な改正であります。その要旨と致しましては御承知の如く大阪の中央部船場、島之內は舊豐臣時代、德川時代の地主の非常なる負擔によりまして、區劃整理が出來まして、今日立派な道が縱橫に通じて居ります、あれは地主の負擔によるのであります、それから今日の郊外で家がどんどん建つて居ります部分は矢張り地主の負擔に於て區劃整理を盛にやつて居ります、それにつきましては國も府も市も殆ど補償金も何も出して居ない、全部地主の負擔によりまして、最少限6メートル、廣い處では22メートル位の道がどんどん出來て居ります、然るに、大阪の中央部と現に區劃整理をやつて居る間の部分即中輪部では或は今宮にしろ或は鶴橋にしろ長柄にしろ福島附近にしろいづれも區劃整理をせずに昔の田畑がその儘町になりましてとても細い道がくねくね曲つて居る譯ですそれでそれらの部分は大都市としての面目をまるで備へて居ない、さういふ部分は早晩非常な金をかけて改良をせんければならぬ譯でありますが、他の部分に於きましては地主が自ら道路改良をして居るのに、その邊の部分については改良ずみの地方の人の稅金によつて改良をしてやらなければならぬといふことはないと思ひます。それ丈惡い部分はその邊の惡い部分の地主さん自身で改良をされるのが當然ではないか、かういふ風に考へられるのであります。即ちかういふ風な規定に因りますといふと、家が改築される度にかういつたやうな地主さんの負擔で改良される、さうして大體地主さんの負擔がこれによつて平等になるといふ考へ方を有つて居るのであります、が併しこれは法規としては非常な改革でありまして、實際今直ぐ全部この規定通り勵行していくといふことは困難であります、中には旣に從前の規定によりまして、9尺道が立派に出來て居る處もあると思ひます、それらの處の一軒が普請をするについてその爲にその家丈引つ込むといふことになりますといふと、前齒が1本拔けたやうになつて、寧ろそれは改良にならずに體裁を惡くするといつたやうな關係をも思ひまして、但書を設けて、「幅員二・七三メートルコレハ九尺以上ノモノニシテ已ヲ得ズト認ムルモノ又ハ土地利用上必要ナシト認ムルモノハ此ノ限ニアラズ」と云ふことにしました、現に立派に9尺で出來て居る、或は寧ろ4メートルまで擴げる必要はないといつたやうな部分についてはわざわざそれは4メートルまで擴げないで從前の通り法律の二十六條に規定されて居る通り9尺そのまゝでやつて行かう、とかういふ考へ方を有つて居ります、そうですから前から土地が揃つて居るといつた部分に於てはこれは大體さう大した制限にはならぬと心得て居ります。

その次に第七條、「建築物ノ壁面ハ建築線ヨリ四十五センチメートル以上後退セシムベシ但、路面上二・五メートル以上ニ在ル蛇腹、出窓、門柱袖壁、袖柱ノ類ハ此ノ限ニ在ラズ」

これは前の1尺5寸後退して家を建てるといふのと同じ規定で、只前は建築線の問題だつたのが今度は壁面線の問題に變つた丈であります、その2.5メートル、大體8尺でありますが、從前の規定も8尺以上の蛇腹、出窓は出ても差支へなかつたのでありますが、今度も名前は變つたけれども、實質的には從前と何等變らないといふ趣旨で規定された譯であります。

その次、第八條は大したことはありませぬ。

第四章高及空地、これは施行令第十條に規定されて居る各々の場合について詳細に考へたのであります、勅令の第十條と申しますのは、高及空地の制限について、特に差支へない部分をうんと緩和しやうといふ規定なのであります、それで、この四章についてはその緩和しやうといふ精神に基きまして、その方法を詳細に規定したのであります。大體と致しまして九條、十條は前の規定と略變りないのでありますが、先づ九條から申上げますと、或道路に面して家を



建てる場合、住居地域外を例にとりますと圖示Ⅰの通り B は8メートルに限定されて居るのでありますが敷地が公園等に接するときBをⅡの如く16メートルに迄緩和しやうとするのです。

第十條は

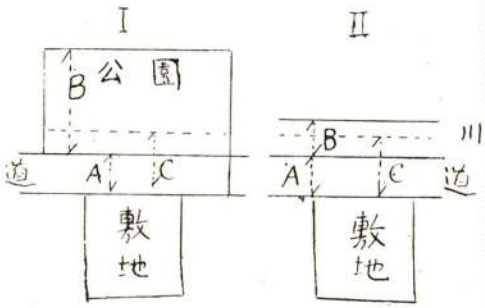
建築物ノ敷地ノ前面道路ノ對側ニ公園、廣場、河、海ノ類アルトキハ令第七條又ハ同第八條ノ規定ノ適用ニ關シ前面道路ノ對側境界線ヨリ之等ノ幅員ノ二分ノ一以内ニシテ且、道路幅員ノ二分ノ一以内ヲ前面道路ノ幅員ニ加算シタルモノヲ以テ前面道路ノ幅員ト看做ス

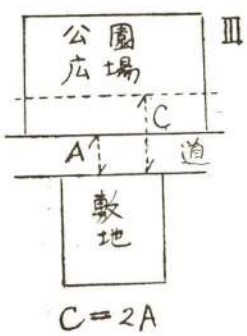
左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ前項ノ適用ニ關ノ道路幅員ノ二分ノ一ヲ道路幅員トス

一、敷地ノ前面道路ノ對側ニ公園又ハ廣場ノ類アルモノニシテ交通上特ニ支障ナシテ認ムルトキ

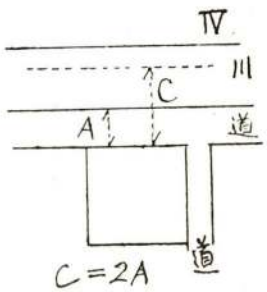
二、敷地が別ニ他ノ道路ニ接スルトキ

こう棒讀にしますと非常にやゝこしいですが、これを圖示しますと第一項は A が事實上の前面道路幅員であるがこの際 C を前面道路に見やうと云ふのであります、C は圖の Ⅰ, Ⅱ の如く二通りあることになります、特別の場合として、緩和しやうといふのが二項であります。



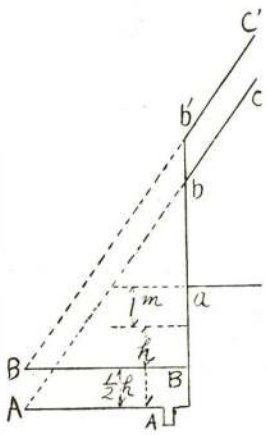


二項の第一號は對側に河海でなしに公園廣場の様に人の入つて行ける處であつて交通上支障のないとき第二號は別に道があつてその建物内の人が前面道路にのみあふれ出ないと云つた様な場合であります、それを圖示しますとⅢ, Ⅳ の様になります。



第十一條　建築物ノ敷地ノ地盤面ガ前面道路ノ中央ヨリ一メートル以上高キ場合ニ在リテハ令第七條第二項ノ前面道路ノ中央ハ其ノ高低ノ差ヨリ一メートルヲ控除シタル殘ノ二分ノ一高キ位置ニ在ルモノト看做ス

これは敷地が路面から1メートル以上高いときに限るのであつてその時は圖の様に實際は AA が路面であるのを BB の所に路面があるものとして高の緩和をしやうと云ふのです、ですから勅令通りに行くと abc が建物の外廓になりますがこの條文によつて $ab'c'$ が外廓となることが出來ます。



第十二條の規定は建築協會に籍を置かれる程の方々の今までの最も大きな問題であつたのであります、處が今度これをうんと緩和しましたからして、この改正は皆様方に對する非常に大きな贈物だと私共心得て居ります、だからして隨分今まで仕事に心配された會員もこの改正によりまして、相當ゆつたりした氣持になつて頂けるんぢやないか知らんと思ふのであります。

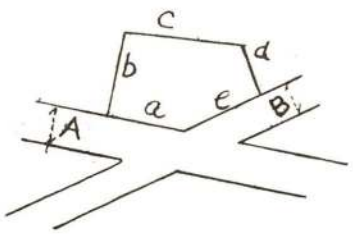
第十二條　左ノ各號ニ掲グルモノハ令第十四條但書ノ角地又ハ地區トス但、住居地域内ニ在ルモノヲ除ク

一、幅員六メートル以上其ノ和二十二メートル以上内角百五十度以下ノ二ノ道路ニ依リ成レル角敷地ニシテ其ノ道路ニ接スル長ガ敷地周圍ノ三分ノ一以上ノモノ但、面積千平方メートル以内ノ部分ニ限ル

元來この第十二條の規定といふのは空地を緩和し

やうといふのでありますが商業地域とか工業地域未指定地域に於てはさう空地は要らなくても住居地域といふ處はこれは特定の場所でありますからして、幾らその土地自身として條件のよい處でありましても住居地域内丈には空地を緩和するといふことは合理的でないといふので、住居地域内丈はこの空地を緩和せぬといふのであります、先づ第一號でありますが讀んだゞけではこれも非常に判り難いのでありますが、御説明致しますと、A B 2本の道路がありまして、AB は各幅員6メートル以上であつて A と B の和が22メートル以上A と B の交角が150度以下そして

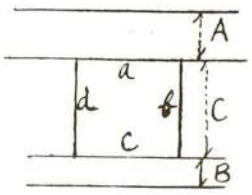
$$a+e>\frac{1}{3}(a+b+c+d+e)$$



つまり廣い道路に接して居る部分が長いから空地制限はいゝだらう、道路も事實空地なんだからこの道路が廣い場合にはこの家自身としては空地が廣くなくてもいゝぢやないかといふ爲に幅員といふのが一つの制限、角が一つの制限、それから敷地の周圍中道路に直接に接する部分、この三つの條件が揃へばこれは宜しい、それから「但シ面積千平方メートル以内ノ部分ニ限ル」これはどういふ意味かといふと敷地面積が全體が假りに1,500平方メートルあるとする、さうするとその内1,000平方メートルの部分に空地がいらないからして、差引500平方メートル丈については空地が要るといふことです、敷地が 1,500平方メートルなれば通常商業地域であれば300平方メートルの空地が要るけれども、この場合になりますと100平方丈でよろしいといふことになるのであります。これは前の規定と比較して頂きますとこの 1,000平方メートルといふのが非常に寛大なことになつて居ります、次は二號であります。

二、幅員六メートル以上其ノ和二十二メートル以上間隔二十メートル以下ノ道路ノ間ニアル敷地ニシテ其ノ道路ニ接スル長ノ和ガ敷地周圍ノ四分ノ一以上ノモノ

これは、表にも裏にも廣い道路があつてその二つの道に挟まれた部分のことでありまして



AB おのおのが6メートル以上、A と B の和が22メートル以上、そして C が20メートル以下の場合であつて

$$a+c>\frac{1}{4}(a+b+c+d)$$

の條件が揃へばその敷地には空地がなくともよいと云ふのです、この場合には何平方メートルに限るといつたやうな限定はありませぬ。

次は三號でありまして

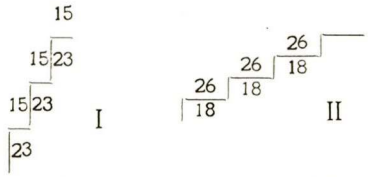
三、公園、廣場、河、海ノ類ニ接スル敷地ニシテ前各號ニ準ズト認ムルモノ

つまり道路に挟まつた敷地だけでなしに一方が道路で他方が河であつても構はぬといふのです。

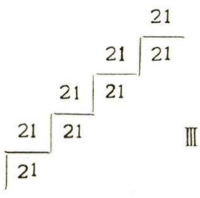
その次、第五章でありますが、この五章は讀んで頂いて判り難いといつたやうな點は一つもないのであります、文字通りであります、只一寸申上げて置きたいのは御承知の如く大阪には北の大火直後大阪府建築取締規則といふものが出ました、これは建築行政の歴史の上に於きまして、特筆大書せらるべき大文字でありまして、この時代としては世界中でも珍らしいと申上げてよい程完備された立派な規則であつたのであります、處が明治42年にその規則が出まして、その後市街地建築物法が餘程遅れて出たのであります、そして今まで大阪に於きましては、建築取締規則も施行され、市街地建築物法も施行され、二つとも平行して施行されて居つたのであります、しかるに後から出ましたのは法律である、先に出たのは府令であります、だから内務省は方針と致しまして、市街地建築物法に類似するやうな建築規則を廢めて呉れといふのであります、それで歴史的に見て非常に貴重な規則であつたのでありますが、それをこの際廢めたいと思ふのであります、その前提と致しまして、今まで取締規則に規定されて居つたが、市街地建築物法令にはなかつたといふ條文があるので今度の改正に當りまして、それを施行令の中に入れることになりました、だからして從前のその施行細則と、今度の施行細則とを比較すると第

五章で相當殖へたかの如くなるのでありますが、今迄兩方のものを施行して居るので有ますから實際上に於ては殖へたことにはならぬのでありますさて條文の說明にうつり度いと存じますが

第十三條も第十四條も第十五條に致しましても讀んで字の如しであります第十六、十七條に階段の規定がありますがこれについては曩に申上げました如く今回の內務省令の改正に際しましても階段の規定が改正されたのでありますが、先の規定を讀んで頂きますと自然お判りなるのでありますがあの規定は普通の住家では勾配がIの樣に相當急であります、特に多人數の場合には勾配がII の樣にうんと緩になります、處が木造の料理屋などで



IIの樣な勾配にすると事實上プランが成立しないことになつて非常に困ります、そこでその中間を行つたものがこゝに書いてあるのであります Ⅲの樣に丁度適當な勾配になります。



次はこの第十六條の冒頭に「當廳ニ於テ告示シタル」と云ふ文句がありますがその告示といふのは細則と同日に出た大阪府告示第百五十六號の第三條にあります、かういつたやうな種類の建築物であつて省令に云ふ多人數に該當しないものはこの規定によることになります。

第十七條には階段の數の規定がありますが、これも前よりは緩和されて居ります。

第十八條は長屋の規定でありますが、これも前規定の施行については相當困難があつたのでありますが、今度は幾分合理化されて居ります。

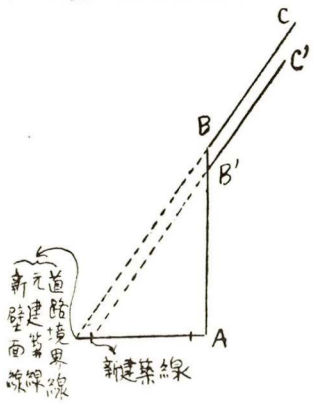
第十九條も大したことはありませぬ。

第二十條は新たに出來た規定でありますが、今日の設計にはかういふものはありませぬが、2階に土格子、鐵格子のある家でこの間も女給さんが5人も束になつて死んだと云ふやうなことがあつたので、今後新らしく出來るのを防がうといふので新規定として定められました。

第二十一條は風壓の規定でありますが、これは從前のものを合理化するといふことになつたのであります。

私はこゝまで說明させて頂きまして後は松井君が引受けて與れることになつて居ります。(拍手)

一寸追加して申上げて置いた方がよからうといふのでありますが、御承知の如く今迄建物の高さを計つて頂くのに、大阪では建築線間の距離を以てやつて頂いて居る譯であります。



即ち圖の如く元は建物の外廓は ABC であつたのであります、處が今度は後退建築線といふものがなくなつて壁面線といふことになりましたので、勅令の第九條の適用がけし飛びましたから、今度は建物の外廓が A. B. C となりまして高さに於て2尺2寸5分程損をされることになりました、これは私共の本意ではなかつたのでありますが、高さをお計りになる時にはその點を一つ御注意されることを望みます。(拍手)

市街地建築物法施行細則(大阪府)に就て

松井清之助

引續いて大阪府の施行細則第六章、手續に關する部分の說明を申上げます、何分時間が少いので

充分に說明を申上げることが出來ないかも知れませぬが、私自身としては充分お判りになつて頂けるやうに申上げたいと思ふんであります。先づ二十二條から逐條的にお話して參りますが、二十二條には認可を要する建築物の追加と申上げますが內務省令第百四十三條にあります處の法第十四條の建築物と同じやうに認可を要する建築物の種類であります。これを讀上げますと

第二十二條　規則第百四十三條第一項第五號ニ依リ指定スル建築物左ノ如シ

一罹災地ニシテ當廳ノ指定シタル區域內ノ建築物ニシテ罹災後三月以內ニ建築スルモノ

これは火災などが廣範圍に起つて、その一定の區域內に於ては、大體3月のの間に計畫しそれについて將來どういふ具合にしやうかといふことが略、見當がつくだらう、その間丈、つまり3月の間丈はどんな建物を建てるのでも必ず認可申請を要する、かういふ具合になつて居る。

二都市計畫トシテ決定シタル土地區劃整理區域內ノ建築物ニシテ當廳ノ指定シタル期間內ニ建築スルモノ

これは都市計畫として決定致しました處の土地區劃整理區域でありまして、大阪府下に於きましては大體梅田の驛前とそれから堺の淺香山と二つあるのみでありまして、他に澤山區劃整理區域はありますが、之等は都市計畫として決定したものではありませぬ、從ひまして、この例は極めて少いのです。

三都市計畫法第十條第二項ノ風致地區內ニ建築スルモノ

勿論風致に關係して居るので、簡單に建てられない。

四令第一條乃至第三條又ハ本令第九條ニ揭グル建築物

これは用途、地域制限に觸れるもの、つまり勅令の第一條乃至第三條に揭ぐる建築物は住居地域に禁止される建築物の種類、商業地域に禁止される建築物或は工業地域でなければ建てることの出來ない建築物などの種類が書いてあります、之等の種類の建築物は總て認可申請を要する。又は細則第五條に揭げてある種類の建築物は認可申請を要することになるのであります。

イ　工場、ロ　集會場又ハ公會堂

ハ　寄宿舍、常設展覽會場、百貨店又ハ勸工場

ニ　自動車の車庫

ホ　貸事務所

ヘ　集合住宅

ト　診療所及齒科診療所

これらの用途のものは全部さうなります。

六建築面積六百平方メートルヲ超過スル建築物

七床面積千平方メートルヲ超過スル建築物

これらの種類のものは新築、增築、改築、移轉又は用途を變更する場合には總て認可申請を要する次に

八別ニ告示シタルモノヲ除キ他ノ法令ニ依リ建築物ノ位置、構造設備又ハ敷地ニ關シ許可又ハ認可ヲ要スル建築物

から書いてあるのでありますが、この告示といふのは協會發行の分の34頁に

第四條　細則第二十二條第八號ニ依ル建築物左ノ如シ理髮店、牛乳販賣店、獸肉販賣店、冷氷貯藏場、芝居茶屋、待合茶屋

かういつたものは認可申請が要らない八は一寸お讀みになると判り難いことゝ存じます、これは實際どういふ用途に使ふものが之に該當するかといふことをお話申上げた方が早いかと思ひます、將來またかういふ種類のものは追加されて行く譯でありますが、今私の手許で判つて居るのを概略申上げますと、神社、寺院、敎會所、學校、幼稚園、市場、形像、旅館、下宿屋、競馬場、游泳場、牛乳搾取場、その他危險物品取扱場或は貯藏庫といふやうな處であります、かういふやうな用途のものは總て認可申請を要する、かういふことになるのであります。

次は第二十三條及第二十四條の說明を致しますこの二つの條項は新たに細則に加つたものでありまして、是は先刻話がありましたやうに、昭和7年2月1日から施行されました施行規則の百四十四條の二といふ規定から生れて來たものでありまして

第二十三條　規則第百四十三條ノ建築物ニシテ別ニ告示シタルモノニ付テハ認可ヲ要セズ但シ第三十一條ニ準ジ届出ヅベシ

認可申請はしなくてもいゝが、届出をしなければならぬ種類のものを規定して居るんでありますこの告示は、その冊子の35頁の第五條に規定されて居るのであります。

第五條　細則第二十三條ニ依ル建築物左ノ如シ但

シ市街地建築物法施行規則第百四十三條第一項第一號、第二號又ハ第五號ニ該當スルモノヲ除ク

一　鐵骨造又ハ鐵造ニシテ建築面積五十平方メートル以下且高五メートル以下ノモノ

二　鐵筋「コンクリート」造、石造又ハ煉瓦造ニシテ建築面積十五平方メートル以下且高四メートル以下ノ平家建物

三　物干、物見臺等屋上工作物ニシテ面積二十平方メートル以下ノモノ

大體これ位の種類のものは認可申請を要せずに只届を出せばいゝ、たゞ間違のないやうにして頂きたいのは、その但書にあるものは除かれるんであります、さうすると百四十三條の第一項第一號第二號といふのはどういふものかと申しますと、第一號は法律第十四條により規定された特殊建築物のものは總て届ではいけないといふことになります、又第二號と云ひますのは、防火地域、美觀地區の中に建つものは届ではいけない、それから又は第五號に該當するものと申しますのは、この細則の第二十二條に、つまり今説明申上げました認可申請を要する種類として府令の中に——列擧されて居ります處の用途に供する建築物或は二十二條の一號、二號、三號などに規定されて居ります處の特定の區域中の建物は矢張り認可申請を要するのであります。主として住家とか商店とかの建築物に附屬する處の鐵骨造の極く輕微なもの丈が届でいゝといふことであります。

次に、二十四條でありますが、これは全く手續の要らないものであります。

第二十四條　規則第百四十三條ノ認可申請又ハ同第百四十四條ノ届出ヲ要セザル建築物左ノ如シ但シ規則第百四十三條第一項第二號及本令第二十二條第一號乃至第三號ニ該當スルモノヲ除ク

一　容量一立方メートル以下ノ水槽ノ類ヲ支承スル建築物ニシテ高五メートル以下ノ鐵骨造ノモノ

二　高九メートル以下ノ煙突ノ類

三　高三メートル未滿ノ木造又ハ鐵骨ヲ有スル「メタルラス・コンクリート」造ノ墻壁、障塀若ハ門戸ノ類ニシテ建築線又ハ道路境界線ヨリ一メートル以上ノ距離ニ在ルモノ

四　物干、物見臺等屋上工作物ニシテ面積十平方メートル以下ノモノ

五　工事用假設小屋、板圍又ハ假足代類

かういふ種類のものは手續が要らない、これも但書がありまして、防火地區と美觀地區、罹災地、都市計畫として決定した土地區劃整理區域内、風致地區、この五つの區域内に建てるものは手續が要るのであります、非常にこの點手續の簡易化を計つたのであります、第二項は從來相當疑義を皆樣有たれて居つたと思ひますが

令第三條ノ二ニ該當スルモノヲ除キ工場ノ當時使用スル原動機馬力數ノ變更ニ因ル用途變更ヲ爲サントスル場合ニ於ケル規則第百四十三條ノ認可申請ハ之ヲ省略スルコトヲ得

工場の馬力數の變更—5馬力の工場を10馬力にする—これは市街地建築物法では規模の用途變更であります。この手續は從來もとつて居りませなんだが、こゝで工場の馬力數の變更については手續を要しないものであるといふことを明確にし、反面に於きまして、馬力數の變更は用途の變更であるといふことを明かにしたのであります、勅令の第三條の二に該當するものと申しますと、當該地域に建築することの出來ない種類の工場—つまり住居地域で申上げますといふと勅令第一條では3馬力を超過するものは住居地域に認めて居ないのであります—若し住居地域に5馬力の工場が存在致すとすれば、それは住居地域では適格でない、所謂不適格工場と稱せられる種類のものであります、この不適格工場の5馬力を10馬力にするといつたやうな場合は明かに用途變更の手續を必要とするこの令第三條の二に該當するのを除いて他の馬力數の變更は手續を要しないのでありますから申上げても住居地區の2馬力の工場を4馬力にする場合に手續が要らないとお考へになりますと非常な間違でありまして、住居地域内では3馬力を超過することは勅令の第一條の規定で許されないのでありますから、勿論その場合には出來ないし、又しやうと思へば地方長官の特殊の認可を得なければならないといふことになるのであります、先づ手續に關する合理化、簡易化と云ふものはこの二十三、二十四條によりまして大いに考へられたのであります。

次に二十五條でありますが、これは認可申請書に關する規定でありまして、從前からの規定でありますが、今度は明かに申請書の樣式を決めたのであります、この本文を讀んで見ますと

第二十五條　規則第百四十三條第一項ノ建築認可ヲ受ケントスル者ハ摘要書、設計書及圖面ヲ添附シ別記樣式第一號ニ依ル申請書正副二通ヲ提出スベシ仍必要ト認ムルトキハ他ノ圖書ヲ提出セシムルコトアルベシ

道路ノ占用其ノ他他ノ法令ニ依リ建築前ニ許可又ハ認可ヲ受クベキ事項アルモノハ其ノ許可證又ハ認可證ノ寫ヲ添附スベシ但シ之ニ依リ難キ場合ハ其ノ事由ヲ具シ之ヲ省略スルコトヲ得

第三十四條第一項ノ規定ニ依リ許可、認可又ハ承認ヲ受ケタル事項アルモノニ在リテハ其ノ事項、當該條項竝ニ許可、認可又ハ承認年月日及記號番號ヲ附記スベシ但シ同條第二項ノ規定ニ依リ併記スルモノニ在リテハ許可、認可又ハ承認ヲ受ケントスル事項、當該條項及其ノ事由ヲ記載スベシ

第一項ノ申請書ニハ敷地所有者ノ氏名、住所並ニ敷地使用上故障ノ有無ヲ附記スベシ

樣式第一號は25頁に出て居りますこれは最後に一括してお話申上げやうと思ひます。第二十五條の認可申請書の内容は從前と大差ないのであります。第二十六條これは認可申請書につけて頂く摘要書の内容であります、之も從前の摘要書と大同小異でありまして、說明を省略して置きます。

第二十七條、これは認可申請書につけて頂きます設計書の内容であります、これも從來の規定と大差ないのであります。

第二十八條は認可申請書につけて頂きます處の圖面であります從來のものよりも多く提出して頂かなければならぬものが加へられたのでありますこれは段々建築工事が大規模になりますといふと從來の規定にある圖面のみでは充分に審査することが出來ない、從ひまして新らしく附加へましたのは第六號にあります處の基礎平面圖、第九號の詳細圖、それから第十號の根伐、山留工事圖かういふやうなものでありまして、他は大體從前のものと同じであります。

第二十九條、從來からあつた規定でありまして、一時に設計圖面を全部提出されることが出來ない場合從來の例から申上げますと、高層建築物の基礎の計畫丈は出來た、その上部に建つ處の大體の規模は計畫出來たが、規定にある處の總ての圖面、設計書などを整へることが出來ないといふ場合にその提出された基礎工事に對して認可された場合があります、で、さういふ場合を茲に規定されて居ります。

第三十條、これは新たに加へられた規定でありますが、こをも先刻お話を申上げましたやうに、昭和7年2月1日から施行されて居ります改正の施行規則の中に出て居ります、4メートル以上の擁壁は認可申請を要するといふことになつて居るんであります。

それから第三十一條であります、これは認可申請を要しない、届出をしなければならぬ建築物の届の書式でありまして、これも新らしく樣式を作りまして、樣式第三號による正副2通を起工10日前に提出して頂けばいゝ、之は從來のものと大差ないのであります。只この場合に添附して頂く摘要書、設計書及圖面でありますが、之等のものは認可申請書のものと略同じでありますが、特に届書については認可申請のやうに全部の圖面を要しない、第二十八條の五號から十一號に列擧されて居るやうな例へば基礎平面圖、或は根伐圖面とか、或は構造上緊急なる部分の詳細圖といふやうなものが要らない、かういふことになるんであります。

次は第三十二條、設計變更の手續であります、これは從來の規定と同じでありますが今度改正致しまして、從來認可申請と届の場合と別な條項で規定して居つたのを一括してある、既に一應認可申請され或は届出をされたやうな建築物に於てその竣工前にその内容の變更といふやうなことになる場合には認可申請なり届出をして頂く、これは從前の規定と同じやうな譯であります。それから第三十三條でありますが、これは新たに加はりました規定でありまして、特に御注意願ひたいと思ふのであります、先づその條項を讀んで見ます。

第三十三條　規則第百四十三條ノ認可ヲ受ケ又ハ同第百四十四條ノ届出ヲ爲シタル建築物ニシテ第二十六條第一項第四號ノ事項ヲ變更セントスルトキハ摘要書及配置圖ヲ添ヘ其ノ旨届出ヅベシ

第二十六條第一項第四號と申しまするのは15頁の4行目にある敷地面積であります、認可を受け或は届出をして出來上つた處の建築物その建築物に附屬して居る處の建築敷地が、狹くならうとする時、或は大きくなる場合もあるのでありますが、この四號の事項―建築面積―を變更せんとする時は摘要書及配置圖を添へて届出をして頂かなけれ

ばならぬ、かういふことに改正されたのであります。で、今迄一つの建築物の認可を住居地域内でとれば空地が4割であつた、それを從來は規定がなかつた爲めに、何時の間にかその内の2—3割は他の敷地に流用するといふやうなことも往々あり得たのであります、かういふ場合に勅令の第十四條にあります處の空地制限を嚴守して行かう、さういふ場合には直ちに届出をして合法的でないものは許さない、合法的のものは認めて行かうといふやうに特にこの條項を加へたのであります。次に第三十四條でありますが、これも新らしい規定であります、從來大阪府の細則に於きましては法、令規則その他の規定によりまして、許可認可承認を要するものは規則第百四十三條に依つて認可申請を要するといふやうに規定して居つたのでありますで、この度はその條項がなくなりましたので、又一方茲に掲げましたやうに、法、令、規則、特殊建築物耐火構造規則又は細則によりまして許可、認可、承認を受けるといふやうな事項を有つて居りますものは、個々の事項について許可、認可、承認なりを受ける爲に申請書を提出せねばならぬ、さういふものは單獨に手續をすることが出來る、で、届出を要しない建築物であつても、その一部分に特に認可、承認を受けなければならない事項があれば、その承認を先づ受けて置いて、後の工事は至急にやる、かういふことになる譯であります、總て法、令、規則などにある許可、認可、承認を受けんといふやうな場合には、認可申請書につけます處の摘要書なり設計書なり或はその他のものに準じて正副二通を提出しなければならないかういふことになつて居るんであります、この第二項にありますやうに之等の許可、認可、承認を受けんとする申請は規則第百四十三條の認可申請書の中に又届書の中にさういふ事項を併記することが出來る、かういふ具合に規定されて居るのであります。で、かういふ認可申請書又は届書に併記された場合には、建築の認可或は届書の副本を交付、つまり届をして、その副本が届けた人の手許に戻つた時には許可があつたものと見做すといふ具合に第三項に規定されて居る次第で、副本が戻つて來れば許可も届出も一緒に濟んだ、認可申請も同樣であります。之は非常に簡單な取扱にしてあるんでありまして、三十四條の第一項に於ける許可認可承認を特に受けなければならないといふやうな事例は實際問題としては比較的少ないと思ふのであります。

次は第三十五條で、これも從來から規定してあるものでありまして、市街地建築物法の適用區域が變更されたり或は設定される場合に、建築中のもの或は建築工事に着手せざるも設計あるやうなものに對する經過規定でありまして、これは從來のものと同じであります。

第三十六條、建築線指定申請に關する規定でありまして、建築線の指定申請をするものは從來土地所有者のみに限らず借地權者でも建築線指定の申請が出來たのであります、併し乍らこの度改正致しまして、土地所有者、土地區域整理組合又は耕地整理組合といふものが建築線の指定を申請することが出來るのみで、他のものは認めないといふことになるんであります、その申請書の内容が第二項にありまして

建築線ノ指定ヲ受ケントスル者ハ圖面及關係書ヲ添附シ別記樣式第四號ニ依ル申請書正副二通ヲ提出スベシ其ノ變更又ハ廢止ノ申請ヲ爲サントスルトキ亦同シ、必要ト認ムルトキハ前項以外ノ圖書ヲ提出セシムルコトアルベシ

その關係書或は圖面の内容が第三十七條及第三十八條に規定してあるのであります、これはお讀みになれば判ると思ひます。

第三十九條は建築工事中に於いて届出を要する工程であります、これは從來あつたのでありますが此度少し届出を要する工程を追加致しました、夫は三號の「上棟シタルトキ、四號ノ鐵骨工事ニシテ鐵骨ノ建方ニ着手シタルトキ」夫から第五號「鐵筋「コンクリート」工事ニシテ基礎、各階床及屋根ノ配筋ニ着手シタルトキ」の三號であります、第三項の分は風水害以後特に木造建築物の如きは上棟の際筋違、方杖を特に注意しないと思はぬ災害が起るといふことが判つて居りますので、特にかういふ時分に届出を願ひたい、かういふ次第で追加されたのであります、その他は從來の通りであります。

第四十條、これも從來からある建築現場の標示、それから現場に於ける書類備付に關する規定であります。

第四十一條は從來認可申請書或は届書に就て起工が6ケ月間以内にされないといふやうな場合には失効の規定があつたのでありますその失効規定

を廢止しまして、今度はさういふ場合に取消又は屆出の場合に無効とすることがある、かういふ具合に改正したのであります、この改正によりまして、自然効力を失ふことはないが、かういふ時は取消される場合がある、かういふ具合に變つたのであります、だから取消のない場合が原則であつて、6ケ月經つても矢張りそのまゝその申請が有効であるといふことになります。

次に四十二條でありますが、是は新たに追加されたものでありまして、從來とても勿論これ丈のことは出來たのでありますが、細則に明かに規定されたのであります。

第四十二條　建築工事ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル時ハ工事ノ中止其ノ他必要ナル措置ヲ命ズルコトアルベシ

一　保安上危險ト認ムルトキ

二　衛生上有害ト認ムルトキ

三　法、令、規則、特殊建築物耐火構造規則又ハ本令若ハ之ニ基キテ發スル命令ニ違反シタルトキ

四　許可、認可、承認又ハ屆出ト異リタル工事ヲ爲シニルトキ

茲に列擧されたやうな場合には工事中止その他の措置を命ず、これも從來とても勿論やつて居つたのであります。

第四十三條でありますが、これは從來から、ある工事者の變更命令に關する規定であります。

樣式の方の說明に入らうと思ふのであります。

樣式第一號はお手許の印刷物にありますやうに建築認可申請書で大體13行原紙をお使ひになる場合には25頁に印刷してありまする全部が入らないやうであります、從ひまして、後の2行はその裏に廻るといふやうなこともあるのであります。

次に樣式二號摘要書は特にこの用途の部分を幅を廣くしてありますのは、今度細則の改正によりまして、工場などの場合にはその用途に關して詳しく書いて頂くやうになつて居りますので相當の幅を以てこの中に書いて頂かなければなりませぬので、特にこの印刷にも幅を廣くしあるのであります13行原紙になりますと大體後の2行位が次の處に行くかと思ひます、それから建築物表の記載方について申上げて置きますが、先づ名稱と書いてある處には一つの建築敷地内にあります處の建築物の各棟の名稱が入つて來る譯であります、例へば大きな敷地の中の工場でありますと、事務所とか、或は何工場、或は倉庫或は自動車車庫、危險物品置場といふやうな名稱がこの處に出る譯であります。その下の構造種別の處には從來の通り種々の構造により、鐵筋コンクリート構造或は木造といふやうなこと、何階建といふやうなことが出て參ります。それから建築面積、高、軒高、工事要旨は從來通りその1行にずつと書いて頂くことになります。各階の軒高の他に基礎、深といふやうなものが從來あつたのでありますが、それはこの度省略して總てこれは圖面の方に明かにして頂くことに改めたのであります。次の行からはその名稱にある處の例へば事務所なら、事務所の第1階、第2階といふやうなもの或は地階第1階、第2階といふものを構造種別と書いてある欄の處に書いて頂くことになるのでありますその行の處に第1階の建築面積、次に第2階の建築面積といふやうに書いて頂きまして、各階毎に工事の樣式があればそこに書いて頂くといふことになるのであります。最後の部分の床面積には合計を書いて頂くといふことになるんであります。

次は樣式第三號でありますが、これは大體樣式第一號と同じ要領であります。

樣式第四號は建築線指定に關するものであります。

それから樣式第5號は建築工事現場に掲げて頂きます處の標札がどういふやうな大さのものであるかといふやうなものであります。

大分時間もとりましたからこれ位で說明を終ります。　（拍手）

認可ヲ要スル建築物分類表

類別	規則第百四十三條ニ依リ要認可ノモノ	該當條項
區域地域別	防火地區內	規則一四三、2
	美觀地區內	同
	罹災地ニシテ指定區域內（三月以內）	細則二二、1
	都市計畫トシテ決定シタル土地區劃整理區域內（指定期間內）	同 2
	風致地區內	同 3
	道路、河川敷、府公園地又ハ都市計畫法第十六條第一項ノ土地等ノ境域內	同 8
用途別	法第十四條ノモノ	規則一四三、1
	令第一條ニ揭グルモノ	細則二二、4
	令第二條ニ揭グルモノ	同
	令第三條ニ揭グルモノ	同
	細則第五條ニ揭グルモノ	同
	工場、集會場、公會堂、寄宿舍、常設展覽會場、百貨店、觀工場、自動車々庫、貸事務所、集合住宅、診療所、齒科診療所	細則二二、5
	神社、寺院、敎會所、學校、幼稚園、市場、形像、廣告塔ノ類、浴場、旅館、下宿屋、簡易宿、貸間ノ類、競馬場、游泳場、肥料藏置所、牛乳搾取場、家畜市場牛馬宿、牛馬市場、米倉庫、納屋、禽畜飼養場、危險物品貯藏庫、貯藏槽置場、詰換所等	細則二二、8
構造別	鐵筋コンクリート造	規則一四三、3
	鐵骨造、鐵造	同
	石造、煉瓦造	同
	木骨造其ノ他木造ニ非ザルモノ	同
規模別	階數三以上ノモノ	規則一四三、4
	建築面積六百平方米ヲ超過スルモノ	細則二二、6
	床面積千平方米ヲ超過スルモノ	同 7
雜	擁壁（高四メートルヲ超ユルモノ）	規則一四三、二項 同 一四四、4

*（註） 倉庫納屋トハ明治四十一年府令第七十八號倉庫納屋其ノ他ノ建築物取締規則ノ適用ヲ受クベキ建築物ヲ、禽畜飼養場トハ大正四年ノ府令第七十四號禽畜飼養場取締規則ノ適用ヲ受クベキ建築物ヲ、又危險物品貯藏庫、同貯藏槽、同置場、同詰換所トハ大正十四年府令第八十八號危險物品取締規則ノ適用ヲ受クベキ建築物ヲ謂フ

市街地建築物法施行細則(京都府)の改正に就て

板井公威

私から京都府細則の今回の改正について簡單に申上げたいと思ひます。

京都の細則は去る昭和7年3月3日に可なり大きい改正がありまして、今回は法、令、規則の改正に伴ひまして、不都合を生じたもののみについて一部分の改正をしたのであります。で、今逐條的に改正になつたものについて御説明申上げたいと思ひます。

この第二條中に「醍醐警察署ヲ山科警察署ニ改ム」といふことは單に警察署の名稱が變つたから改正になつた丈のことであります。

それから第五條中第一項に左ノ但書ヲ加へ第二項ヲ削ルとありまして、其の但書と申しますのは「但シ知事ソノ必要ナシト認ムル時ハ此ノ限ニアラズ」と云ふのであります、元來この第五條と申しますのは「建築許可申請、建築認可申請又ハ建築届出ヲ爲サントスル者ハ其ノ敷地ノ所有者及使用權者又ハ建築物ノ所有者ノ承諾ヲ受クベシ」とありまして、第二項としまして「必要アリト認ムル時ハ前項ノ承諾書ヲ添付セシムルコトアルベシ」といふのであります、これは建築物法としましては多少行過る感じがありますが、この條文のなかつた前には他人の土地に勝手に建築出願をしまして、その家を建てゝしまつて、その認可や承認を楯にとつて却て自分の方に有利に種々のことを展開しやうといふやうな不心得のものがありました爲に地主側は非常に困つたのであります、それで地主の方面からの要望もありまして、地主の承諾を得たといふことを明かにして認可をするといふ風に地主側の不安を少くするといふ趣旨が多分に含まれて出來たのでありますが、この條文が出來て見ますと、今度はあべこべに地主の方から却つて之を惡用しまして、地代の釣上とか他の何か爲にする爲に不當な申出をして、それに應じなければ建築の承認を與へて呉れないといふやうな場合も可なり多くなつて來ましたので、これでは却つて弊害がありますので、建築物法の趣旨にも反するといふ風に考へられますから、その第二項の「必要ト認ムル時ハソノ承諾書ヲ添付スベシ」といふやうなものを削つてしまひして、その代りに建築敷地として土地を借りて居るといふことが明瞭ならば單に不當の値上の材料に使つて居るといふやうな場合には必ずしも承諾を要しないといふ風に改めたのであります。

次に第六條の二であります、これは法第八條の改正によりまして、建築物の敷地が建築線に接する事を要する代りに、道路敷地に接せしむる事を要することになりました爲に、單に建築線に接して居つた從來の敷地では建築する事が出來ないやうになりました、その爲に先づ道路を完成して然る後に建築をするのが當然でありますが、從來のやり方もありますし、それまでにしなくても先づ道路の完成の見込がある、近い將來に於て道路實現の見込があるというやうな場合に於いては法第八條の但書を適用しまして、次の各號に該當するものは許可する事が出來る樣になつて居ります、第一號としまして「昭和十年一月三十一日以前ニ指定シマシタ建築線ニ接スル敷地」第二號としまして「罹災地住宅經營地區其ノ他一團ノ土地ニ亘リ指定シタル建築線ニ接スル敷地ニシテ近ク道路竣成ノ見込アリト認ムルモノ」第三號に「前條ノ建築線ニ接スル敷地」茲に前條と申しますのは京都府細則の第六條で御座いまして、即ち法第二十六條の道路でない、幅員9尺未滿の通路に建築線が指定してありまして、その建築線に接する敷地、これを認めるといふことであります。第四號は「河川水路溝渠等ノ敷地ヲ距テヽ道路敷地ニ接スル敷地」これは橋を架けるなり溝蓋を設けるなりして連絡してあれば認められるといふのであります第五號は「山間部等ニシテ家屋連檐ノ見込ナシト認ムル土地ニ於ケル敷地」これも山小屋などで將來家屋が建並ぶ見込なきものであります、之等は道路がなくても認められることを明かにしたのであります。次に第六條の三は新に加へられたのでありますが、これは規則の第四條の改正によりまして、建築敷地が道路敷地に接すべき狀態の標準を

示された爲でありまして、その結果、京都府に於きましては以前は建築線に接する標準としまして建築線に接する部分の長さ 1.5 メートルを要求して居つたのであります、處が、今度2メートルとなりました爲に從來行つて居つたことが即ち、既に認められ 1.5 メートルとして實施したやうな敷地に對しては殊にそれが通路狀態となり兩側に家屋が建ち並んでゐると云ふやうなものは之を救濟しないと非常に困難であるといふ場合もありますので、昭和10年1月31日以前に存在し、現に長さ 1.5 メートル以上 2 メートル未滿の道路敷地に接する建築物の敷地は規則四條の第一項の規定に拘らずその建築を許可することあるべしと緩和したのであります。尙第二項として古い昔から存在して居る狹い專用通路でまだ一度も建築物法の適用を受けて居ないやうな處があります、それも周圍の狀況として敷地に通ずる通路を廣くすることの出來ない狀態のものであるとか、又用途上餘り危險がないものは今度新らしく擴げるのであつても尙 1.5 メートル以上道路敷地に接するものは認めることが出來るやうにされて居るのであります。これは非常な緩和だらうと思ひますが、古い取扱の歷史がありまして、2メートルにすることの困難なる處に限り止むを得ないもので、之を救濟する事が出來るやうになつて居ります。次に細則第九條であります、これは建築線が後退して指定されて居つたものでありますが、その建築線の後退といふことを止めまして、壁面の後退を指定することに變更されたのであります、從來は劇場、活動寫眞館、演藝場、觀物場、集會場、公會堂等の建築物の建築線は夫々規定に從つて或程度の後退をする事になつてゐたのでありますが、これに新らしく百貨店を加へそれ等の建築物の「主タル出入口ニ面スル道路敷地ノ境界線ヨリソノ觀客、定員又ハ收容人員七百五十人以上ノモノハ五メートル二百五十人以上ノモノハ三メートル、ソノ他ノモノハ二メートルノ距離ヲ後退シタル線ヲ以テ前面ノ壁面ノ位置トス但シ上階ノ壁面等ニシテ知事ノ許可ヲ受ケタルモノハコノ限ニアラズ」といふやうに改正されたのであります、それで原則として、今申上げますやうな距離を後退することになつて居りますが、これは主に交通上の問題でありますから、雜踏しても餘り交通妨害にならないやうな上階の壁面は知事の許可を得まして多少指定壁面の位置から外に出すことを認めるといふ風になつて居るのであります、この上階の壁面の突出を認めるといふのは、建物の種類によつて違ふのでありますが、劇場、活動寫眞館、演藝場といふやうなもので表に看板や廣告等を取付けるものであれば先づ認めない、軒庇蛇腹等であればそれは差支へない、併し百貨店のやうなものは看板を見る爲に人が停滯して交通妨害になると云ふことはないのでありますから上の方は出しても差支へないことになるだらうと思ふのであります。

第十八條は階段に關するものでありますが、避難階段を非常階段に改めた丈であります。

その次の第十九條、之も階段の規定でありますが特殊の建築物のものであります、改正された部分は避難階段を「非常階段」に改め更らに第二號を次の通りにして居ります。

二　蹴上及踏面ノ寸法ハ各段均一ナラシムルコト

特にかういふ風になつて居りますが、改正前の細則第十九條を讀んで見ますと

第十九條　集會所、公會堂、說教所、敎會堂、寄宿舍、合宿所、百貨店、商品陳列場、觀物場、遊技場、宿屋、席貸、待合、貸座敷、料理店、飮食店、及之ニ類スル建築物ノ階段ニシテ、公衆ノ用ニ供スルモノハ別段ノ定アル場合ヲ除クノ他左ノ各號ニヨルベシ、但シ上階各階ニツキ居室面積「公衆ノ用ニ供スル露臺ハ居室ト見做ス、以下之ニ同ジ」三十平方メートル以下ノ場合ハ第一號乃至第六號ノ規定ニヨラザルコトヲ得

一　階段ノ幅ハ內法九十センチメートル以上トナシ踏場及昇口、又ハ降口ノ足溜ハソノ幅及長サヲ階段ノ幅以上ト爲スコト

二　蹴上二十一センチメートル以下、踏面二十一センチメートル以上トシ各段均一ナラシムルコト

三　廻リ階段ヲ設ケザルコト

四　適當ナル手摺ヲ設クルコト

五、六、七、これは上階の床面積に對する階段の數を規定してあるのでありますが省略します、この場合第二號の階段の蹴上踏面の寸法を拔いてしまつたといふ理由は、これは今列擧しました處の種類の建築物の階段は原則としまして多人數の使用に供する階段になるといふ風に考へた結果であ

ります、併し乍らその内の極く規模の小なるものは先刻もお話になりましたやうに、この規則二十九條の階段を適用すると殆ど計畫が成立たないやうな場合もありますので、それは無論緩和するのでありますが、その程度は從來取扱つて居つた程度までゞありまして大體標準としましては規則第二十五條第二項の後段の踏面26センチメートル以上、蹴上18センチメートル以下の階段を用ひるといふ意味であります。

次に第三十七條の二は新に加へられたのでありまして「建築物竣工シタル時ハ建築物檢査證ヲ貼付スベシ、但シ大修繕大變更、用途變更又ハ一部ノ增築改築ノ場合ハコノ限ニアラズ、前項ノ場合ニ於テ建築物所有者占有者ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ」といふのがそれであります、これは檢査濟の建築物を誰にも判るやうにするためで、惡意でなくて借受けたり、使用したり賣買したりして思はぬ困難に逢着するといふやうなことを防ぐ爲めに加へられたものであります。

京都府細則の改正としては大體以上申上げました通りであります。

甚だ簡單でありました。　（拍手）

市街地建築物法施行細則(兵庫縣)の改正に就て

本田林八

私は只今御紹介に預りました本田で御座います今夕は鳥井技師が詳しくお話申上げる筈でありましたが相憎二三日前から風を引きまして、此處に先程一緒に參りましたけれども8度以上に熱が上りました、どうも堪えられないから私に代つてやれといふやうなお話で、こゝに立ちましたやうな次第で御座います、從つてお話申上げる內容順序等に於きまして、別段腹案も有ちませぬので、お話申上げることが前後致しましてお判り難い點が多々あると存じます、この點豫め御諒承を願ひます。

兵庫縣と致しましては、今回の法規の改正によりまして、當然改正しなければならぬ處の部分とこの機會に於きまして從來多少不備と考へて居つた點を少し部分的に改正したのであります。で、先づ改正されました細則の順序によつて簡單にお話申上げます。細則の第五條、これは直接法規の改正に關係はないのであります、單に字句の改正で、區劃整理施行者といふ前に「土地」といふ字を入れて、更らに下に「等」といふ字を加へる、これは耕地整理組合かういふものの承諾書といふやうな意味でこの字を入れた丈に止るのであります。

第二章の見出しの建築線の次に「壁面ノ位置」といふ言葉を入れたのであります、これは既に御承知の通り壁面の位置の指定を法律の第十條で致しました爲に茲に見出しに入れたのであります。

次は第六條、これは法律の第七條及第八條の改正に伴つた改正であります、從來兵庫縣と致しましては幅員9尺未滿の公道は例へそれが1尺、2尺幅であつても道路敷地の中眞から4尺5寸後退したる線を以て建築線とする、かういふことに一般に指定して居つたのでありますが、今回の法の改正の精神に鑑み又一面從來から『畔道の如き公道は耕地を對象として存在して居たもので市街地として考へる場合に區劃上甚だ不適當なものが多いのでこれが改正の必要を感じて居たのでありましてこの機會にこれを』6尺以上9尺未滿と改め6尺未滿のものは一應總て棄てゝしまつたのであります、で6尺以上9尺未滿の公道にありましてはその路幅の中眞線より4尺5寸後退したる線を以て建築線とす、これも從來は多少不備でありまして、道路敷地の中眞線といふことになつて居ました爲に實際歩き得る處の道の中眞とは一寸外れた感じがあつたのであります、それで路幅といふことは實際人の通り得る所でその道幅の中眞これを考へたのであります、茲にこの道丈に日本尺を用ひて居りますが、これは御承知の法律がまだ道路は9尺といふあの言葉が改正されて居ない爲に他の部分はメートルに變へましたが、この道に關する限りあれと歩調を合せたがいゝといふことで

矢張り尺を使つて居るのであります。第三項に於きまして、第一項の建築線に接する建築敷地にありては法第八條の許可を受けたるものと看做す、これは御承知の通り法第八條の但書で、道路敷地に接しなくても許し得るといふやうなことがありますから、細則第六條で決めた6尺以上9尺未滿の公道は旣に法第八條但書により許可を得たものと看做すといふことを茲に一般に明かにしたのであります。

次に第七條はこれも法第八條の改正に伴つたものであります、これは從來と殆ど內容は變りませぬ只變りました處は下記各號の一に該當する土地に於て必要と認むる時は建築線を指定す、これは從來は指定することあるべしといふことになつて居ました、今回は原則として必要と認めたときは指定をする、かういふことに改めたのであります これは道路の開設の如きは御承知の通り或程度個人の自由といふことはあるかも知れませぬが、地方長官が建築線を指定するといふことは道路用地を確保するといふ意味を有つて居る、その目的で建築線を指定する、だから此の建築線間は必ず道路となるのであります、地方長官がさう考へて居るやうな建築線と個人が自由に作り得る道路は必ず一致させやう、かういふことであるのであります、それで必要と認めた時は建築線を必ず指定するといふことになりまして、從來の一番終ひにあつたものが一に上つて居ります、道路の開設變更擴張又は整理を要すると認むるもの、その他の內容は從來と同じで御座います。次が第八條に行きまして、これは壁面の位置指定でありまして、從來は法の第七條但書の建築線を運用して居つたのでありますが、今回法規の改正が壁面の位置の如きものは第十條で所謂建築線と全然引離してこれをやるべきものだ、かういふことになりました爲に從來建築線でやつて居りましたのを、壁面の位置の指定に改めたのでありまして、その內容は從來と少しも變りがないのであります、只茲で「左ニ揭クル建築物ヲ建築線トスル場合ニアリテハ、ソノ敷地前面ノ建築線ヨリ左記各號ノ距離ヲ後退シタル線ヲ越ヘテ壁面ヲ突出セシムルコトヲ得ズ但シ特別ノ事由アル場合ニハ別ニ壁面ノ位置ヲ制限スルコトアルベシ」壁面の位置は必ずしも一定しなくてもいゝ、かういふ考からその線を突出してはいけない、かういふことに變へたのであります、ですからその線から越えさへしなければよいのでそれをやられる人の如何によつて壁面の位置は多少でこぼこが出來るやうな事になるのであります、要するに或る一定の線から出なければいゝんぢやないか、かういふ考で、突出せしむることを得ずといふことに書いてあります、尙一、二、三項共建物といふ言葉を今回建築物に改めたのであります。

次は第十條で、これは法第八條と九條に多少關連して居ります「建築物ノ敷地ニシテ公園、廣場、河、海ノ類ニ接スル時ハソノ接スル道路ノ建築線ヨリ道路幅員ノ一倍二分一以內ニシテ且二十四メートル以內ノ區域外ニアル建築物ノ各部分ノ高サハ支障ナキ場合ニ限リ、ソノ接スル公園、廣場、河、海等ノ對側建築線マデノ距離ヲ限度ト爲スコトヲ得」これは從來道路境界といふ言葉を使つて居りましたが、今回建築線の位置が改正され法のある場合は法敷の部分は使つてもいゝといふ風になりました爲に前に述べました距離の起算點を之に合ふ樣に變へたのであります。

次が第十四條で、これは何等法規の改正に關係なくこの機會に僅かに字句を變へた丈であります

次は第十五條で、これは角地その他の地區の空地關係の條文であります、從來この條文は甚だ判り難い嫌があつたのでありました、今回は內容は少しも變へて居りませぬ、多少これで判りよくなるんぢやないかといふやうな意味で、茲に改めたに過ぎないのであります。これは御覽下さればお判りになることゝ存じます。

次は第十八條で、これも敷地內の設備の問題でありまして矢張り字句を少し改めた丈でその內容はちつとも變りないのであります、これは併し一寸讀みますと「建築物ノ敷地ニハソノ接スル道路及建築線ニ沿ヒ適當ナル勾配ヲ有スル溝渠ヲ設クベシ、但シ必要ナシト認ムル場合ハコノ限ニアラズ前條及前項ノ溝渠ハ幅內法二十センチメートル以上深十センチメートル以上ノモノヲ云フ」かうなつて居りまして、一面所謂完全なる道路には必ず側溝がありますが、その場合も作らなければならないかといふやうなことになりますが、これは無論但書により側溝があれば必要がない理屈になるのであります。

次は第二十二條、これは防鼠設備の問題で兵庫縣にはこの規定があります、つまり建物の基礎で

ありますが防鼠材料を以て基礎を造るといふその根本は省令第二十三條から來ました防鼠設備の問題であります、そこで「基礎ノ深ハ四十五センチメートル以上幅ハ二十五センチメートル以上デ底部カラ二十センチメートル以上ハ二十センチメートル迄減ズルコトヲ得」といふこの次の20センチメートルを今回18センチメートルとこれまで減じたのであります。これは事實但書を以て取扱上今までやつて居つたことでありますが、今回これを合理化して實際にやつて居りました18センチメートルに變へた丈のものであります。

次は第二十五條で、これは階段の問題であります、階段は先程お話がありました通り省令を以て、一部、多人數といふ言葉が入つて、それに對する階段の勾配が決つたのであります、それで、兵庫縣の細則としましては、從來は公衆又は多人數この二つの言葉を使つて來て居りましたが、今回省令がこれを示したのでありますから、公衆用の階段について簡單に茲に擧げられて居ります。

第二十五條　階段ハ別段ノ定アル場合ヲ除ク外ノ左ノ規定ニヨルベシ

一　公衆ノ使用ニ供スルモノハ蹴上二十センチメートル以下、踏面二十一センチメートル以上ト爲スコト

これは從來幅も入つて居つたのでありますが、多人數の程度に到らざる人數の少いのは幅は普通階段でいゝんぢやないか、だが勾配丈はもう少し何とかしたいといふことは再三起り得るのであります、ですから幅はこゝに入つて居ませぬが、勾配丈はもつとゆるくする必要ありとする時にやらせやうといふことで勾配のみを茲に決めたのであります。

二　多人數の使用ニ供スルモノハソノ階段ノ幅踊場ノ長及幅ハ各內法一メートル以上トシ廻リ階段ト爲サザルコト

これも內務省令で勾配は決つては居りますが、その幅員が決つてないのでありますから、之を從來通り細則中に殘して置ました。

更に廻階段ではいけない、かういふことにしたのであります。

第二十七條、これは屋上工作物の所謂物干類で物見臺等ノ屋上工作物ニシテソノ床面七平方メートル以上ノモノハ不燃材料ヲ以テ構成スベシ但シソノ床面ハ不燃材料ヲ以テ被覆スルコトヲ得

とあり、これも今回の法規改正に直接の關係はありませぬ、從來はその骨組が鐵材であれば床は板でよろしいぢやないか、又骨組が木造であるならば床は必ず不燃材料を以て被覆せよ、かういふことに取扱つて居つたのでありますが、今回少しく强くしまして、骨組は全部不燃材料で構成せよ但しその床組は被覆でよろしい、從來よりも今回は强くなつたのであります。

次は第三十條であります、これは長屋の制限で第1號に單に「道路ハ建物ノ前面ニ於テ之ヲ有スコトといふ點を改めた丈であります、これは從來の細則で、法第八條の建築線は建物の前面に於て之を有すること、かういふことが書いてありましたが、今回建築敷地は道路敷地に接せしめやうといふことに法律が改正されました結果茲に道路といふことに變へたのであります。

次が第三十二條であります、これは强度計算に適用します處の床の荷重であります、從來の細則では床の種類は旅館、下宿屋、寄宿舍、貸座敷の類といふことでありましたが、今度共同住宅といふものを入れたのであります、更らに動荷重 370 を 320 に低下したのであります、これは例の建築學會の調査によりまして、この種の如きものはかういふ程度でよかろうといふやうに旣に公表されて居りますやうな次第で、先づそれと歩調を合せてそれを適當とするといふ様な意味で 370 を 320 に下げたのであります。

次は第四章の申請手續であります第三十四條これは今回の法律の改正に關連するものであります建築線ノ指定解除又ハ變更ノ申請ヲ爲サントスルモノハ第一號樣式ノ申請書ニ地圖ヲ添付シ提出スベシ、申請者土地所有者ニアラザル場合ニハ土地所有者ノ連署又ハ承諾書ヲ添付スベシ從來是丈になつて居ましたのに茲に但書を入たのであります「但シ土地區劃整理施行者又ハ耕地整理施行者ニシテ規約及本申請ニ關スル決議事項寫ヲ添付スル場合ニハコノ限ニ非ズ」從來は原則として地主の承諾がなければ建築線の申請といふことは出來得なかつたのでありますが、土地區劃理或は耕地整理もまだ殘つて居ります、かういふものは知事が認可するもので、多少これを助成していゝぢないか、それで規約なり又この建築線申請に關する處ゟ決議事項を出せば之を認めやうといふ風た加へ

られたのであります。更らに第二項で御座います地圖の作製方は同じでありまして、第二號のイ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、チまで同じで今回リが附加つたのであります、この(リ)は

リ　前項ノ建築線ニ係ル道路及路面ノ位置竝幅員

道路の開設擴張を必要と認むる時は原則として知事が指定をするといことになつて居ります、それと同じやうに爲す爲に道路は法のある場合は所謂建築線と一致しませぬがこの場合路面の位置は何處までも建築線と同じ場所にさせやう、といふ意味でこのリが加つたのであります。

次が第四十六條であります、これは建築物の竣工屆前建築主、法定代理人、輔佐人さういふものが變つた時には屆出をせよ、で築築主の異動は必す連署が要る、新舊の人の連署が要るといふ風に從來なつて居つたのでありますが、これはさう再三は起りませぬが、時たま甚だ不都合なる場合が起り得るのであります、實際上合理的にその建築物を譲つて、その後に於て新建築主が名義變更をしやうとすると前建築主が何か利益問題等で、感情問題もありますが、之に連署を拒むといふ者があります、かういふのは殆ど事實上その人が惡いと知り得た場合でも今までは茲に明示して居りましたので、出來なくて困つた事例があつたのであります、それで今回は連署を爲すこと能はざる場合はその事由を具し、その事實を證する書類を添付すべし、といふ事に致しました、これは今申上げましたやうに特別の場合には必ずしも連署を要しない、かういふことにしたのでありまして、單に何か旅行をして居るとか、一寸今居ないとかいふやうな簡單な、さういふ理由でなくて、極く特別な場合を意味するのであります。四十六條はこれが加つた丈であります。

次が一號樣式であります、この樣式も從來は申請者の住所氏名、資格、關係土地の位置それから申請事項といふ事になつて居ましたが今回最後の方に申請の事由、何が爲に建築線の申請をしたかといふその事由を一つ書いて貰ひたいといふことで、申請事項の次に申請事由、かういふことが入つたのであります。

甚だ簡單でありましたが、只今申上げた處が今回改正になつたので、尙これに告示が一つ出て居ります、それは法律第八條の但書で認め得る處の標準概目であります、これは公道は先程申上げました通り細則の六條によりまして、特別申請をしなくてもよろしいといふことになつて居ましてその他のものが告示されて居ります、それを先程京都からもお話があつたやうですが大體似て居ると存じます。

「市街地建築物法第八條但書ノ規定ニヨル許可標準概目(細則第六條三號ノモノヲ除ク)ヲ定ムルコト左ノ如シ」

一　昭和十年一月三十一日以前ニ指定シタル建築線ニ接スル敷地ニシテ當區ニ於テ支障ナシト認ムルモノ

1月31日以前に指定しました建築線は一應は全部認めてよいぢやないかとも考へられますが、これは今回法律改正の精神に鑑みまして總て無條件でいゝといふことも一寸具合が惡いので「支障ナシト認ムルモノ」かういふことになつて居ります

二　罹災地區、住宅經營地區ソノ他一團ノ土地ニ亘リ指定シタル建築線ニ接スル敷地ニシテ近ク道路竣成ノ見込アリト認ムルモノ

かういふものは但書で認めるといふことになります。

三　幅員六尺以上ノ通路ニ沿ヒ指定シタル建築線ニ接スル敷地

實際歩き得る幅が6尺以上ある通路に沿ひ建築線の指定を受けた場合は認めるのであります。

四　河川、水路、溝渠等ノ敷地ヲ距テ、道路敷地ニ接スル敷地

五　山間部等ニシテ家屋連檐ノ見込ナシト認ムル土地ニ於ケル敷地

かういふ場合には法律の但書を使ひまして完全な道路敷地に接しなくてもよろしい場合があるといふことになつて居ります。

尙私はその建築協會の册子をまだよく拜見して居りませぬが、先程鳥井技師より聞けば二、三字の間違つた處がありますやうであります。以上で私の話を終ります甚だ失禮致しました。(拍手)

アスファルト防水施工に關する研究

建築倶樂部にて。昭和10年3月7日夕。
材料委員會「防水施工に關する研究會」
席上談話概要筆記

出席者　奥山　岩吉　　大西　幸七
　　松井　邦彦
出席委員　高橋　榮治　　松久保敬三
　　楠瀬　　澈　　作間日出生
　　境　　正一　　高岡與三吉
　　高松平太郎　　吉本政次郎

プライマー　下地と防水層とは密着する必要がないからプライマーを塗らなくともよい、やつても下地の塵埃を取るに役立つ位に過ぎない。或る種の材料を使へば防水の下地モルタルも不必要な位である(A説)。普通のルーフキングやフエルトの防水ではプライマーは矢張使用すべきものと思ふアスファルトが塗り難い、其の上第一職工の氣分が違ふものである、プライマーも塗らないのかと輕蔑してかかるから善い仕事が望み得ない(B説)。全然不必要でもなく又絶體必要なものでもないが先づ有つた方が良い(C説)。

アスファルトの熔融　先づ材料にも依るが普通は180度～200度位が適當である。200度以上になればアスファルトが變質するから惡い。尤も時季にもよるので、四月から十月頃までは180度とし他の時季は多少加減すべきである。熱を低める方は危險は少ないが塗り難い。

熔融釜　釜の改良は必要である、現在のものは甚だ不完全で附近を汚したり又火事等の危險もあり最も重大な溫度の調節や均一等も困難である。近頃重油でやるのは稍々良いが、これからは二重底にするか、スチームでやるとかが必要である。然し今の所では施工者の資力で持ち得ないのは殘念である。是非之れは改良して頂きたい。

フエルト　防水には普通ルーフキングが使用せられるがこれはルーフキングの代りにフエルトを使ふ方がよい。但しフエルトは充分吟味して使用すべきである、尤もルーフキングより、フエルトの方が一見して質の善惡が見分け易い利點もある。其の上アスファルトの着きもよく、又薄くて仕事も仕易い。然しアスファルトはルーフキングのみを使用した時よりも分量を多く使用することと胡麻化し無しに施工せねば其の目的を達しない。

ルーフイング　ルーフイングは一號品位が最適である。表面の雲母粉を全然とらずに施工しつゝある現狀は歎かはしい、これは充分な施工費を出して完全に取除く樣にしなければならぬ。

有孔性材料　コットンとかヘシヤンの類は從來施工されたものを修理の際見ると殆んど炭化して其の用をなして居ない。これは施工の際普通の熱ではアスファルトが充分に附かず氣泡が其の網目に出來て結果が惡い、氣泡が出來ない樣にするにはアスファルトの熱を上げなければならぬ、そうすれば材料が燒けて仕舞ふと云ふ始末である。

被覆　上部表面の被覆保護層は絶對に必要である、これは充分叮嚀に下の防水層を傷付けぬ樣に注意して直ぐ施工せられたい。

施工一般諸注意　樋の落口は出來るだけ下げて注意して施工すること。
隅は一旦切つて別に立ち上りを貼り他のルーフイングで叮嚀に隅を押し附けてやること。
裏日本と表日本とは防水施工にては差異がある、特に裏日本の工事は嚴重を要すること。
礦物質のルーフイング、その値段だけの有効さは保證し難いこと。
電工、衛生工等が無意識に防水層を破り且跡を完全に修理しない爲に從來は隨分雨漏りがした。斯の如き不法を充分避くべきこと。
防水層を煉瓦壁で押へる時は防水層の上に1寸乃至1寸5分のモルタルを塗り煉瓦壁をそれに密接して築いて貰ひたい、このモルタル塗りを止めるならば煉瓦壁と防水層との間は充分にトロをつめるべきこと。
パラペツトの立上り押へを充分注意して貰ひたいこと等。

結論　設計者、監督者、施工者、三者とも一體となり防水施工の重要さを悟り、種々研究の上協力し、且互に信賴して、誠實な仕事をなすべきである。

設計者監督者はその方針、材料、材質等常に研究すべく、施工者は出來得ざる樣な單價で工事を引受けることなく誠意誠心完全な施工に志し監督者の意に從ひ仕事を愛し名を重んじて業界の發達を期せられたい。

時　　報

法　　令

○岸和田市ニ市街地建築物法全規定適用ノ件

内務省令第十四號

昭和三年内務省令第六號中「岸和田市」ヲ削リ同市ノ區域ニ對シテハ昭和七年内務省令第一號附則第二項及昭和七年内務省令第二號附則第二項ノ規定ヲ適用セズ

昭和十年三月十六日

内務大臣　後藤　文夫

（參照）

昭和三年三月十五日内務省令第六號ハ市街地建築物法施行令ニ依ル市指定ノ件ナリ

（岸和田市は昭和3年4月1日より市街地建築物法の緩和規定を適用されて居りましたが前省令により昭和10年4月5日より全規定を適用されることになりました）

○岸和田都市計畫區域内市街地建築物法適用區域擴張ノ件

内務省告示第百四十五號

岸和田都市計畫區域内左ノ區域ニ昭和十年四月十一日ヨリ市街地建築物法ヲ適用ス

昭和十年三月二十二日

内務大臣　後藤　文夫

泉北郡忠岡村

泉南郡春木町、貝塚町、北中通村、佐野町ノ各全部及八木村、山直下村、南掃守村、土生鄉村ノ各一部（府縣道小栗街道東側境界線以西竝ニ同境界線以東四十メートルノ區域）

○大阪府下十四ケ町村ニ市街地建築物法適用ノ件

内務省告示第百四十六號

左ノ各區域ニ昭和十年四月十一日ヨリ市街地建築物法ヲ適用ス

昭和十年三月二十二日

内務大臣　後藤　文夫

大阪府豊中町、三鄉村、布施町、小阪町、長瀨村、彌刀村、加美村、高石町、大津町

（以上9ケ町村及び岸和田都市計畫區域内市街地建築物法適用區域は全規定が適用されます）

内務省告示第百四十七號

左ノ區域ニ昭和十年四月十一日ヨリ市街地建築物法ヲ適用シ其ノ區域ヲ同法施行規則第百四十九條ノ二ノ規定ニ依リ指定ス

昭和十年三月二十二日

内務大臣　後藤　文夫

大阪府高槻町ノ一部（大字高槻、上田部、芥川、郡家、西天川、眞上下、安滿、別所、古曾部、土橋）

内務省告示第百四十八號

左ノ區域ニ昭和十年四月十一日ヨリ市街地建築物法ヲ適用シ其ノ區域ヲ同法施行規則第百四十九條ノ二ノ規定ニ依リ指定ス

昭和十年三月二十二日

内務大臣　後藤　文夫

大阪府箕面村

内務省告示第百四十九號

左ノ區域ニ昭和十年四月十一日ヨリ市街地建築物法ヲ適用シ其ノ區域ヲ同法施行規則第百四十九條ノ二ノ規定ニ依リ指定ス

昭和十年三月二十二日

内務大臣　後藤　文夫

大阪府池田町

内務省告示第百五十號

左ノ區域ニ昭和十年四月十一日ヨリ市街地建築物法ヲ適用シ其ノ區域ヲ同法施行規則第百四十九條ノ二ノ規定ニ依リ指定ス

昭和十年三月二十二日

内務大臣　後藤　文夫

大阪府長野町

内務省告示第百五十一號

左ノ區域ニ昭和十年四月十一日ヨリ市街地建築物法ヲ適用シ其ノ區域ヲ同法施行規則第百四十九條ノ二ノ規定ニ依リ指定ス

昭和十年三月二十二日

内務大臣　後藤　文夫

大阪府柏原町

（以上5ケ町村は市街地建築物法の緩和規定が適用されます）

小住宅設計圖案募集

月刊雜誌『住宅』は創立第20周年を記念する爲に下記の通り小住宅設計圖案の懸賞募集をしてゐる。

小住宅設計圖案懸賞募集規程

（第1部と第2部に分れてゐます）

	延坪數	第1次審査に提出する圖面	第2次審査に提出する圖面
第1部	15坪まで	平面圖のみ（縮尺50分の1） （此の圖面は返送せざる故第2次審査のため控案を用意してをく事）	配景圖（外部） 立面圖（50分の1）3面以上（うち2面は配景圖に表れざるもの） 平面圖（第1次審査に提出したものを書く）
第2部	35坪まで	平面圖のみ（縮尺100分の1） （此の圖面は返送せざる故第2次審査のため控案を用意してをく事）	配景圖（外部） 立面圖（100分の1）3面以上（うち2面は配景圖に表れざるもの） 平面圖（第1次審査に提出したものを書く）
		第1次審査〆切　5月15日正午迄	第2次審査〆切　6月25日正午迄

第1部と第2部と、違ふところがあるからよく御注意下さい。

1. 設計の要旨

新時代に於ける小住宅建築の改良、延ひては生活樣式の改良に資せんがため、下記の如く汎く一般に募集す。

2. 應募設計要件

a 敷地　東京又は大阪近郊にあるものとし、其の大きさ、方位、道路、隣地との關係など任意に想定すべし。
（其の狀況に就いては平面圖に圖示すること）
但し、市街地建築物法の適用を受くるものとす。

b 建築坪數（兩部共疊2枚を以つて1坪となす）上欄參照のこと。

c 所要室　室數、大きさ、任意とす。

d 家族數　任意に想定すべし。

e 構造樣式　總て任意とす。

3. 所要圖面並に審査方法

a 平面圖（北を必ず圖面の上部にすること）
此を第1部、第2部共に、昭和10年5月15日正午迄に下記宛に提出されたし。第1次審査をなし、秀逸30案を選出し、當該者に通知をなし、更に下記圖面の提出を要求す。

b 配景圖（外部）

c 立面圖3面以上（うち2面は配景圖に表れざるものとす）
尙設計說明はその概要を簡明に圖面の餘白に記入のこと。

d 平面圖　第1次審査に提出したるものを再び書き添へること。

以上を昭和10年6月25日正午迄に提出のこと。
第2次審査をなし入選者を決定す。

4. 入選者の等級並に賞與

	第1部		第2部	
	賞與	人數	賞與	人數
入選	50圓副賞（甲）	3人	50圓副賞（甲）	5人
佳作	10圓副賞（乙）	5人	10圓副賞（乙）	5人

第1次審査を通過したる秀逸のうち入選、佳作以外のものに第1部、第2部共副賞（丙）を賞與す。
尙、第2部の賞與は、封川居主、井村健次郎氏の寄贈になるものなり。

5. 入選者發表

第1次審査の結果は5月末日迄に當該本人に通知をなし、且『住宅』7月號誌上に發表す。
第2次審査の結果は『住宅』8月號誌上に發表す。

6. 審査員（50音順）

住宅改良會顧問　封川居主　井村健次郎氏
大阪市役所建築課技師　工學士　伊藤　正文氏
三越住宅部技師　工學士　岡田　孝男氏
住宅改良會顧問　工學博士　武田　五一氏
神戸高等工業學校教授　工學士　瀧澤　眞弓氏
大阪市立都島工業學校教諭　中野順次郎氏
京都高等工藝學校教授　工學士　本野　精吾氏
及び本會側
住宅改良會主　西村辰次郎氏
同　設計部主幹　本間　乙彦氏
同　編輯部主事　小林　清氏

7. 應募心得

a 第1部、第2部に分たるも何れを撰擇し又兩部共應募するも差支なし

b 第1次審査の圖面は大判ケント八ツ切大（又は之と同大の白色畫用紙）に、第2次審査圖面は大判ケント半截大、（必ず1枚に納むること）（又は之と同大の白色畫用紙）に墨書し、陰影又は色彩を施すべからず、配景圖は此限にあらず。

C 圖面には暗號を（文字にして、右下隅に）附し、別に暗號並に住所、氏名、職業（勤務先）共を記せる紙片を密封し、封書の表面には前記暗號を記すべし。
第2次審査に提出する圖面は暗號を附するのみにてよし。

d 審査の結果に對して說明を求め、又は異議を申し立つることを得ず。

e 應募圖案に關する一切の權利は本會に歸屬するものとす。

f 應募圖案は一切之を還附せず。

g 應募圖案發送先（第1部、第2部、同封するも差支なし
大阪市西區土佐堀船町8番地
住宅改良會宛

本號執筆者紹介

（五十音順）

伊藤忠太　工學博士　東大名譽教授　早稻田大學教授
板井公威　工學士　京大建築學科卒　京都府建築技師
淺野清　名古屋高等工業學校卒　法隆寺國寶保存工事々務所技手
大瀧正雄　工學士　東大建築學科卒　文部省囑託法隆寺國寶保存工事々務所技師
杉山信三　京都高等工藝學校卒　法隆寺國寶保存工事事々務所技手
武田五一　工學博士　法隆寺國寶保存工事々務所長
玉置豊次郎　工學士　東大建築學科卒　大阪府地方技師
濱田青陵　文學博士　京都帝國大學教授
藤島亥治郎　工學博士　東京帝國大學教授
藤原義一　工學士　京都帝國大學講師
本田林八　兵庫縣建築技師　兵庫縣建築課
松井清之助　工學士　京大建築學科卒　大阪府建築技師

會　　報

會員　德政金吾氏

會員德政金吾氏昭和10年3月19日病を以て逝去せらる寔に哀悼に堪へす茲に照肖と略歷を掲げ謹みて弔意を表す



德政金吾氏は明治10年3月7日千葉縣市原郡東海村に生れ明治33年2月工學院建築科(第22回)を卒業し直に清水組本店に入社し同36—7年頃同組大阪支店に勤務し同39年博多支店長に進み更に大正6年4月大阪支店長となる

大正14年9月本店土木部長となり歐米各國を視察して同15年4月歸朝爾後同店を勇退し自ら德政工務店を經營し今日に至る

氏は資性温厚特に部下を愛し其度量の寬大なる點は一同の敬服する處なりし、趣味として古代人形其他歷史的捜査に興味を持ち殊に埃及王統譜及古代日本と埃及等の著あり

我日本建築協會に於ては創立當初より熱心なる會員にして常に會の爲多大なる努力を爲し常務、委員長、監事等を歷任し本會の爲に甚大の貢献を爲したり現に建築材料陳列場幹事長として今後更に理想的施設を期待したりしに其半に於て長逝せらる實に哀悼に堪へざる次第なり

乍然家庭に於ては長女佐和子殿は同志社大學教授村井氏に嫁し次女藤子殿は大阪菅原辯護士に嫁し何れも和氣藹々たるものあり且男子なかりし爲特に村井氏の息を嗣子として愛撫教養し居り今日に至れり故に一面より之を見れば所謂功成り名を遂げられたるものにして又以て瞑すべきか享年59歲

木材市場品寸法規格案に關する意見交換會

時　　2月26日午後7時—9時

所　　建築倶樂部別室

出席者　副會長　武田

主　記　池田

編　輯　島田

會　員　小川安　阪井　後川　鈴木

園部　高岡　增山　松久保

村野　中島　黑田　佐藤

1 午後7時一同着席し武田副會長座長となり開會を宣し本夕の出席を謝し本意見交換會を開催したる理由を簡單に說明し

1 次て昨年度材料委員會委員長たりし主記池田宮彦氏より本件の經過を報告し尙御斷りの點あり即ち本案メートル法を用ひず尺貫法によりたるは組合の希望ありしを以てなること又本案は最後案にあらず實は今後に於て之れが特設委員會を設け調査研究の上協會案を作りたき希望なり不取敢昨年材料委員會にて成案のものに付意見交換會を開きたるものなれば腹藏なく御意見を發されたき希望を述べ順序として書面にて御意見を送付ありし方12名あり之を披露致したしとて朗讀をなす

1 次て意見交換することゝなり之を摘記すれば左の如し

S. 1 自分は品等規格に付意見を書面にて提出せり寸法、品等規格何れも重要なるは言を俟まず故に品等規格をも早く決定せられむことを希望す

1 寸5割の次に寸7割乃至寸8割を加へられたし

Y.S 1 希望であるが寸4割の一行を加へられたし

2 6分と8分との間に7分ぬきの欄を設けられたし

3 單に軒先長押等の外に何々記入すること

4 丈材なるものは10尺に働かしたし
丈材は10尺5寸に2間材は12尺5寸にしてほしい

K. 1 メートル法を用ゆること（ラウンドナンバーを用ゆること）
2 長さは現はしたる寸法に働かしたし
3 長さに1割の切り捨てを入れられたし

RS 1 全部メートル法に依られたし
2 間の名稱を殘したければ1間は1米とか2間は何米としたし

1 次に稱呼に付意見を聞くに大多數の意見として米寸法を用ゆるを可とす

1 次に長さに付檢討
疊との關係上之を纏めるに難色あり

M. 1 第2表中寸法の2寸5分等を除き粍のみにしては如何
2 稱呼は過渡期なれば二五角を粍角としては如何
3 稱呼は粍を用ひ寸分は括弧にて包むことにしては如何

1 次に池田主記より尙御意見あらば書面にて提出方を希望し本夕の御來會を謝し閉會を告げたり

設備委員會（第1回）

時　2月27日午後7時50分—9時
所　建築倶樂部別室
出席者　委員長　小笠原
幹事　增井
委員　神谷　竹內　田中　西村　塙　村田

1 午後7時50分小笠原委員長座長となり開會
1 先づ本年度研究方針に付協議をなし曩年よりの研究項目を取調べ引續き調査研究を進むることゝし下の事項に付研究を始むることに決定
(1) 一般建築施工上に必要なる設備の研究中
(イ)デレツキ其他機械
(ロ)一般の附帶設備施工上に關し現場に於て特に注意すべき要點等
1 次回委員會には上記の研究資料持寄りのこと
1 4月よりは下の事項を研究し專門家の臨時委員を依囑し研究を進むること
(2) 建築物附帶設備の研究
(イ)電燈、電力通信設備
(ロ)煖冷房、換氣設備
(ハ)給水給湯設備
(ニ)衛生工事
1 昨年調査研究を終りたる「コンクリート」配給所に關する件は常務會に意見を督促すること

常務會（第5回）

時　3月4日午後5時30分—8時
所　建築倶樂部別室
出席者　理事　片岡會長
監事　岡部監事　澁谷監事
常務　伊藤主記　池田主記　北垣主記
中澤主記　伊東主計　清水主計
谷　主計　岡田編輯　島田編輯

議事
1 3月例會に關する件……可決
2 春季大會に關する件……未決
3 建築學會より昭和10年度大會を京阪神に於て擧行に付援助方依頼の件……承認
4 住宅委員會より分科設置に付委員增員要求の件……可決
5 住宅委員會より委員1名辭退に付補缺の件……可決
6 耐震耐火建築禮讃映畫製作に關し脚本を懸賞募集の件……未決
7「市街地建築物法令」出版委員會設置の件…否決
8「建築構造圖集」編纂委員會設置の件……未決
9 會員詮衡……

報告
1 木材市場品規格案に關する意見交換會經過報告

災害調査委員會（第11回）

時　3月5日午後6時30分—9時30分
所　建築倶樂部別室
出席者　委員長　波江
幹事　黑田
委員　中島　矢田　山田　篠原　渡部　本多　松井　淺野　宮脇

1 午後6時30分波江委員長座長となり開會
下の事項に付協議を進めたり
(1) 豫算並編輯方針は前回委員會の決議に依り實行に移ること
(2) 編輯分擔に依り必要なる寫眞分類を開始すること
(3) 古建築風水害被害寫眞を大阪毎日新聞社に注文すること
(ヶ) 次回委員會を3月13日(木)開會すること

建築會館委員會（第1回）

時　3月5日午後7時—8時
所　建築倶樂部
出席者　委員　阪井　鈴木　谷　松室

副會長　松井
主記常務　伊藤

1 午後7時開會
1 會員委員會建築會館委員會兩委員席を同じくし松井副會長及伊藤主記列席して開會
1 先づ松井副會長より本夕の出席を謝し兩委員會の今日迄の經過を說明し希望を述べ本夕は先づ委員長及幹事の互選を行はれんことを希望したり
1 依つて互選を行ひ下の通當選したり
委員長　竹腰　健造氏
幹　事　鈴木　末尾氏
同　谷　民藏氏
1 尙毎月會合定例日を下の通申合をなす
毎月定例日　第4月曜日

會員委員會（第1回）

時　3月5日午後7時—8時
所　建築倶樂部
出席者　委員　今林　澁谷　富士岡　松本
副會長　松井
主記常務　伊藤

1 午後7時開會
1 會員委員會建築會館委員會兩委員席を同しくし松井副會長及伊藤主記列席して開會
1 先づ松井副會長より本夕の出席を謝し兩委員會の今日迄の經過を說明し希望を述べ本夕は先づ委員長及幹事の互選を行はれんことを希望したり
1 依つて互選を行ひ下の通當選したり
委員長　富士岡重一氏
幹　事　今林彦太郎氏
同　酒井勇三郎氏
1 尙毎月會合定例日を下の通申合をなす
毎月定例日　第2月曜日
1 次て入會々員勸誘方法其他に付意見の交換をなし散會せり

材料委員會（第2回）

時　3月6日午後6時20分—10時30分
所　建築倶樂部別室
出席者　委員長　高橋
幹　事　松久保
委　員　楠瀨　作間　境　高岡　高松　吉本
實務家　松井邦彥　大西幸七　奥山

1 午後6時20分一同着席し高橋委員長座長となり開會
1 委員長より本夕より「アスファルト」防水に付研究を進めたく先づ其施工より始めたき旨を告げ就ては實務家の松井邦彥氏外2名の御來會を願ひ御多用中繰合せ本夕此處に御出席を得たりとて3氏を紹介し愈々研究に入り協議の結果先づ3氏より交々意見を聽き後質問檢討に入る順序となし研究を進めたり（要領速記は會誌に委員會報告として別度掲載）

法制委員會（第2回）

時　3月6日午後7時—8時
所　建築倶樂部
出席者　幹事　玉置
委員　山口

1 市街地建築物法令第5版改訂編纂に付會長より別紙の通當委員會に援助方依囑あるを以て協議の結果承諾の旨回答することに決す
1 右取調べの爲特別委員會を設けることに決し委員は下記4氏に依頼すること
玉置幹事、內藤委員、宮脇委員、山口委員
1 特別委員會の會合は編輯に於て作成中の「ゲラズリ」が出來次第會合すること
「ゲラズリ」は4名各1通宛準備すること
1 京都府、愛知縣、兵庫縣各府縣改正の分を蒐集すること（これは編輯に於て蒐集しある筈）

住宅委員會（第2回）

時　3月7日午後6時50分—9時
所　建築材料陳列場
出席者　委員長　葛野
幹　事　小川陽　小川安
委　員　赤松　岡本　木村　黑澤　小林　塚本　長谷部　松本　增山　三木　本野

1 午後6時50分葛野委員長座長となり開會、本夕は第1分科第2分科合同して先づ研究問題に付協議し左の事項の研究必要なることを檢討せり
郊外住宅街に就て
社宅或は特殊住宅街に就て
3 次で前回に引續き左の事項研究
1 床（和洋）　2 床下　3 疊
4 疊の材料
2 研究する住宅の標準は中流以下の住宅なること中流住宅は工費150圓前後のものと概念を定む和洋兩樣とし和風より先に研究すること
（詳細は別途會誌に掲載）

設備委員會（第2回）

時　3月13日午後6時50分—9時
所　建築材料陳列場別室
出席者　委員長　小笠原
幹　事　末澤
委　員　神谷　竹内　田中　塙　村田

1 午後6時50分小笠原委員長座長となり開會
1 前回委員會協議に從ひ昨年に引續き工事場假設備に要する重なる器具機械の研究を始む、即ち
1 杭打器械
(1) 二本子手引のもの
根切なき場合3間杭位
根切ある場合5間杭位まで
モンキー 100 貫前後
數多き場合は電働ウキンチを使用す
同板打にも最も多く使用す
(2) 櫓組
高さ50尺乃至80尺位の高さとす
モンキーは200貫以上1噸半位
右は電働又はスチームウキンチを使用するドロツプ式とす
尙同樣にして
スチームハンマー（重量約7噸まで位あり）のものは
單式　錠を上げるとき蒸氣力を用ひ落下は自然とするもの
複式　錠の上下共蒸氣力を使用するもの
右器械は舶來としては
マキアナンテリー、ユニオン、ナショナル等多く使用し國產として油谷式を最も多く使用す
右等蒸氣機械のものは櫓の底面が巾約10尺長30尺位あるを以て現場のスペースに依り使用方法考慮を要す
1 掘方用機械
土の揚げ方は一般にリフト又はデレツキを使用するが
特に　バケツトコンベヤー／パワーシヤベル　等を使用す
1 デレツキ
3脚デレツキ／ガイデレツキ　等を最も多く使用す
1 ポンプ(水替用)
ダルマポンプ(手押用)
セントフユーガルポンプ(電氣及發働機用)
根切深き場合は之を2段に使用するものとす
1 コンクリート工事用としてミキサー
昨今は殆んど國產で電働が多い
場合に依り發働機のものもあり時に依り宜利なり
最少3切練より27切練位まであり
右ミキサーと同時に
イナンデーター、ウヲーセリリーター
ポンプクリート、等あるも之等は尙使用に際し十分に考慮研究を要するものとす
勿論外にタワー、シユート、ホツパー、カー等を附屬せしむるものとす
1 釣り足場
一時外國製のものを使用したるも最近は國產にて適宜架構するも大體フニツシユの工事か建物作業用として有効なるも建築現業には矢張足場を架設する方が便利で釣足場を使用する場合少し
1 ウキンチ
一般に手働と電働との2種ありて直働の力は最大4噸位なり
1 次回委員會には各付帶工事に付施工上特に現場監督者の注意すべき要點に付研究することとす
1 本委員會定例日に付目下申合せし第2第4の水曜日は委員中差支ある旨申出ありしにより更に協議の結果左の通變更することに決せり
毎月定例日　第2第4の金曜日とす
右各委員に通知すること

災害調査委員會（第12回）

時　3月13日午後6時30分—8時30分
所　建築倶樂部
出席者　幹　事　黒田
委　員　淺野　谷　內藤　本多　三浦　宮脇　矢田　山田

1 午後6時30分黒田幹事座長となり開會
本夕は委員長缺席に付左の事項を議し散會したり
(1) 各自分擔の原稿は本月中に完成のこと
(2) 次回委員會を4月4日(木)開會すること
(3) 右2項は本夕缺席者に通知すること

敎化委員會（第2回）

時　3月14日午後6時30分—7時
所　建築材料陳列場
出席者　委員　酒井　中野　堀口
1 本夕は委員長及幹事缺席にして其他の出席者少數なりしを以て研究を進めず意見交換の後散會したり

三　月　例　會

時　3月17日午前8時45分集合午後3時解散

所　　法隆寺修理工事見學
出席者　荒木正巳氏外87名
1 世界最古の木造建築物として有名なる大和法隆寺の根本修理は着手後既に一年に達し着々進捗しつゝある趣なり尤も當協會は昨年6月着手早々6月例會として見學したるも尙此際之が工事現場を見學するは最も有意義なりと3月例會として本日見學旅行を決行せり
1 天氣晴朗寒氣尙去らざれども絶好の旅行日和にして午前8時45分の集合時には大軌電鐵上六驛に來會する會員諸氏既に六十餘名を算す
1 一同は午前9時8分發天理行電車に乘込み出發す
1 同10時11分郡山驛に着下車し驛前に用意せる乘合自動車に分乘し直に出發法隆寺に向ふ乘車20分間にして法隆寺門前に到着下車
1 門に入り境内善住院に歩を進め同院に於て一先づ休憩時に10時40分
1 同所に午前11時より同寺修理事務所技師服部勝吉氏の修理に關する講演を聽き正午之を終り晝食をなす
1 次で午後1時より服部技師の案内により一同修理現場を巡回見學をなし
1 同2時半之を終り一同集合の上伊藤主記より代表して本日の見學に付服部技師に對し深甚の謝辭を述べ一同にも挨拶の後閉會を告げ散會したり時に2時40分

常　務　會（第6回）

時　　3月18日午後5時30　—7時30分
所　　建築倶樂部別室
出席者　理　事　片岡會長　松井副會長
　　監　事　岡部監事
　　常　務　伊藤主記　北垣主記　中澤主記
　　伊東主計　清水主計　島田編輯
　　三浦編輯

議　事
1 春季大會計畫及委員依囑の件……可決
1 建築學會大會關西地方にて擧行に關する件承認
1 木材市場品規格案に關する委員會特設の件可決
1 建築年鑑出版委員會特設の件……可決
1 設備委員會より申出の「コンクリート配給所」に關する件……回答決定
1 材料委員會より座談會速記並に會誌掲載に關する要求の件……可決
1 耐震耐火建築に關する映畵脚本懸賞募集案の件……都市武裝促進委員會へ廻附
1 日本ポルトランドセメント同業會より「コンクリート」夜間講習會開催に付後援方依頼の件……承認
1「市街地建築物法令」出版に關する件……可決
1 建築倶樂部併合に關する件……未決
1 會員詮衡

報　告
1 市街地建築物法令改正に付講演會開催の件
　　附　新聞記者速記に關する件
1 3月例會終了報告
1 2月分會計報告
1 雜誌入札に關する報告
1 建築學會會長交迭報告
1 大阪材木商同業組合祭典執行の件
1 日本放送協會に進言書の件

都市計畫委員會（第2回）

時　　3月19日午後7時—9時
所　　建築倶樂部
出席者　委員長　鳥井
　　幹　事　吉田
　　委　員　喜多村
1 午後7時鳥井委員長座長となり開會
1 南大阪中心地阿倍野橋附近の改造に付研究を進め結局之を懸賞募集する希望となり之を會長に要求することに決す

材料委員會（第3回）

時　　3月19日午後6時40分—9時
所　　建築倶樂部別室
出席者　委員長　高橋
　　幹　事　松久保
　　委　員　楠瀨　高岡　道田　吉本
　　專門家　田島氏
1 午後6時40分高橋委員長座長となり開會
1 防水紙に付研究し意見の交換をなす
1 アスファルトに關する研究會（專門家の出席を求め尙會員の有志參加を希望）開催を次回定例日になし會員參加希望の會告を常務會の承認を經て會誌に掲載することに決定
1 右研究會には先づ日本石油會社大阪支店へ適當なる技術者の出席方を依頼することに決定す

會員動靜

入　會　者

會　　員
村野　威夫君　北區松ケ枝町31（株式會社大林組）

森　忠一君　府下南河內郡丹南村大保47
池田　忠治君　西區江戶堀北通1ノ43（設計監督自營）
加藤　新君　東淀川區三津屋北通2ノ19（株式會社三越大阪支店家具裝飾部）
野田　進君　西成區粉濱東之町3ノ13（合名會社竹中工務店）

地方會員

永田　茂君　名古屋市西區堀內町2ノ33（愛知縣總務部營繕課）
大須賀唯一君　京城府黃金町4ノ259（朝鮮殖產銀行營繕課）
三浦　末吉君　京城府崇三洞91（朝鮮殖產銀行）
林　吉松君　京城府蓮建洞113（朝鮮殖產銀行）
本田　富雄君　京城府外舞鶴町414（朝鮮殖產銀行）
元田　朝吉君　京城府大和町3ノ69（朝鮮殖產銀行營繕課）

特別贊助員

藤原精之亮君　神戶市神戶區北長狹通2ノ113（藤原家具店）

普通贊助員

中川　巖君　東成區勝山通6丁目106ノ1（土木建築請負業）
山本　辰雄君　北區中野町1ノ15（大阪市役所建築課）
野澤　勉君　兵庫縣川邊郡小田村杭瀨堤外22ノ1（兵庫縣小田村役場土木課）
吉澤　千吉君　東京市杉並區成宗1ノ112 井上方

退會者

會員

妹尾　良三君

地方會員

坂本　省吾君　萩本　泰一君

普通贊助員

岸田　清常君　西　末彥君　勇利　正夫君

轉居轉職

會員

熊谷泰治郎君　兵庫縣川邊郡園田村字森17ノ1
城　武三郎君　南滿洲鞍山北五條鞍山ホテル
岩崎甚太郎君　岐阜縣垂井町大日本紡績新築工事場大林組內
岩佐　信也君　奈良市法蓮町1079ノ1
鐵田　禎章君　住吉區阪南町西1ノ3
池田彌之助君　神戶市灘區大石字一番20小泉製麻株式會社清水組現場
高村　勝君　府下中河內郡彌刀村小若江318（大阪市役所建築課）
中島　二郎君　（合名會社竹中工務店）
佐藤正次郎君　（電話福島2349）

地方會員

高橋　君三君　宮崎市御船町郡是製糸株式會社蠶事所宮崎支所內
遠山　久君　滿洲鞍山北五條鞍山ホテル

特別贊助員

服部　吉雄君　西區南堀江通1ノ34（電話櫻川2663）
松井　邦彥君　（營業所北區澤上江町5ノ44電話東2704）
宮川總三郎君　東區今橋1ノ9日本ポルトランドセメント同業會內

普通贊助員

小山助太郎君　神戶市葺合區野崎通2丁目53ノ9
野口　英雄君　大正區福町1ノ12 松尾鐵骨橋梁株式會社第2工場內
和中　直一君　府下中河內郡龍華町植松1107
大澤　松蔭君　住吉區西住ノ江町3ノ34
安井　芳治君　西淀川區海老江中1ノ35 池田方
大倉　莞吉君　府下泉南郡貝塚町澤和泉織物第2工場工事場大林組出張所
長谷川吉成君　西淀川區浦江上3ノ41 長谷川鐵工所工場
粂子　秀男君　兵庫縣武庫郡甲東村段ノ上一丁畑ノ5
前內　健次君　廣島市猿樂町58清水組出張所內
伊藤　義雄君　旭區中宮町463協和製作所（電東6159）
河部　茂君　哈爾賓市奉天街寧江胡同門牌2號エゴロフ方

死亡

特別贊助員　安田　保藏君（昭和10年2月25日逝去）

普通贊助員　齋藤　敏夫君（昭和10年2月逝去）
（謹んで哀悼の意を表す）

編輯後記

□法隆寺の修理も愈々本格に入つたので、この機會に法隆寺に關する記事を中心として特輯號を編輯することにした。大に意義あることゝ信ずる。

□伊東、武田、藤島の各工學博士、濱田文學博士をはじめこの方面の多數權威者の稿を得て、古社寺建築の記事として近來にない光彩を放ち得たことは本號の爲に誇つていゝ。

□殊に法隆寺修理圖版は本誌本號が最初の發表であり、この方面の人々の爲に大に參考となるものがあらう。

□武田博士及大瀧氏の記事は直接修理に關係せる當事者のものとして興味深きものであるが、御多忙の爲服部氏の記事が得られなかつたのはいさゝか殘念であつた

□圖版その他本號の編輯萬端に就いて一方ならぬお世話を下さつた法隆寺修理事務所の方々に多謝し度い。

□市街地建築物法施行細則の講演速記を本號に載せ度い爲に發行期日が幾分遲れた來月號から大に馬力をかけ發行日の正確を期し度いと思つて居る。

□それから〻市街地建築物法令〻の第五版が出來た。この改訂版にあたつては監督官廳の技師の方々にお願ひして充分なる校閲をなしたものでこの類書中では本會のものが充分自信がもてる、速刻、丸善か柳々堂か、本會へ申込んで下さい。

（新名）

建築と社會

第18輯第4號

毎月1回1日發行　定價　1册 .50圓(郵稅2錢)　12册 6.00圓(同 24 錢)

昭和10年3月25日印刷　昭和10年4月1日發行

發行・編輯　印刷人　鷹取陽

西宮市今津町津門字賓津605番地

印刷所　大阪活版所

大阪市東區內淡路町1丁目7番地

發行所　計團法人　日本建築協會

大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル
電話長本局(23)4500番(6)
振替口座大阪39.975番

特約販賣店　柳々堂書店

大阪市西區京町堀羽子板橋西
電話土佐堀 2440番
振替口座大阪 2084番

禁轉載

本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告掲載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	½頁	1回	8.00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45.00
普通（前附第2頁）	1頁	1回	40.00
普通（後附第1及最終頁）	1頁	1回	25.00
アート（中揷）	½頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
（建築關係職者案內）	1欄	1回	5.00

御注文

御注文はすべて前金で本會直接又は特約店券振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵へ代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

建築材料陳列場出品者

棚番號	材料種別	出品者
1・6	鋼製建具建築材料	三機工業株式會社
2～4	木工品	日本樂器製造株式會社大阪支店
5	合板寄木フローリング	富士建築工藝株式會社
7	リノリユーム其他附屬品	東洋リノリユーム株式會社
8～9	六甲スレート日本石綿盤六甲タイル	野澤幸三郎商店
10	トラバーチン	金王石工所
11	ロールプラッグストツプリーグ	ユニオントレーヂングコンパニー
12～14	アサヒライトSSSプラスターソリヂツトスタイン	工材社
12～14	屋根瓦各種	高松菊治郎商店
15	特許能美式自働火災警報裝置及消火裝置其他	合資會社能美商會
16	衛生器具	大阪城口研究所
17	衛生器具	株式會社須賀商會
18	衛生器具	西原衛生工業所
19	水洗便所ヨネフラッシユバルブ	米本榮商店
20～21	衛生陶器附屬品	東洋陶器株式會社大阪出張所
22	銅鐵製窓枠	榮進社大阪出張所
23	內裝用藥掛タイル	淡陶株式會社大阪支店
24	カールプラグ及カールエキスパンションボールト	合名會社小野逞三商店
25	タイル	山本窯業商店
26	各種タイルテラカツター	大阪窯業株式會社
27～28	テラカツター衛生陶器	大阪陶業株式會社
29	タイル	有田製陶所
30	洋家具裝飾	船木由松商店
31	テラカツタータイル等	伊奈製陶株式會社
32	金庫寫眞カタログ	大谷金庫店
33	硝子製品	旭硝子株式會社
34	ドアーチエック、フロアーヒンヂ、スプリングヒンヂ	日本ドアーチエック製作所
35	町野式水道消防器具	ヂヨイント商會大阪支店
36	ドアーハンガー	平松鈎戸車製造所
37	建具金物	近江セールズ株式會社
38	大理石及人造石	矢橋大理石商店
39	大理石	大理石工業株式會社
40	建築參考塗料見本	關西ペイント株式會社
41	ルーフキング	田島應用化學工業所
42～43	建築用金屬材料ホワイトブロンズ水道銅管	住友伸銅鋼管株式會社
44	銅眞鍮アルミニウム	古河電氣工業株式會社
45～46	ラス類一式	奥村重兵衛商店
47	スチールサツシユ、シヤツター見本	合名會社汎建製作所
48	板硝子	日本板硝子株式會社
49	石材並ニ彫刻物	一營商會
50	建建金物	大塚定治郎商店
51	ベニヤ板及加工品	ベニヤ商會
52	金屬天井板	佐渡島西店建材部
53	便利瓦	木下謹三商店
54	一般石材	關西石材株式會社
55	石綿スレート	淺野スレート株式會社
56		
57	オリエンタルメタル浪板	オリエンタルメタル製造所
58	ベニヤ板見本ドアーセクシヨン	內外木材工藝株式會社
59	專賣特許特殊ゴム床敷物	ライトラバー工業合資會社
60	田中式カストストーン	合名會社田中タイリング商會
61	アスファルト	榎商店
62	日之出アスファルト加工品	日本建築紙工大阪支店
63	ルーフキング	佐久間パブコ工業株式會社
64～65	キングブロックアスファルト鐵鋼類	マルエス工業株式會社
66	パルボイド、メトロストンベークライト	合資會社大洋組建材部
67	建築諸材料	合資會社建材社
68	セメント防水劑モリノイト保溫盤ウオータイト	日本セメント防水劑製造所
69	防水劑ロータス	關城化學工業株式會社大阪營業所
70	スカイライト、エービーメタル	內外土木建築材料合資會社
71	水性塗料	岩城塗料製造株式會社
72	硝子製品	株式會社島田硝子製造所
73	洋瓦各種	宇野洋瓦株式會社
A	裝飾織物	高島屋裝飾部
B. 1	コルク板	梁瀨商店
B. 2	美素	美素工業所
B. 3	ヤハズラス	日本防火建材製作所
B. 4	人造大理石	旭マーブル研究所
C	KU式自働復式火難求助器	苅野鐵工所

建築と社會第18輯第4號　廣告索引

ア　旭硝子株式會社……37
　朝日建材株式會社……表紙 2
　淺野スレート株式會社……39
　淺海商會……24
イ　岩元商店建材部……24
エ　榮進社……7
　英進商會建材部……28
オ　大阪窯業セメント株式會社……中挿
　大阪伊丹商店……18
　大野製作所……1
　奥村重兵衛商店……21
　岡田建材店……6
カ　金岡養樹園……中挿
　勝田風呂……表紙 4
キ　木下謹三商店……44
　桐田商會……27
　協和製作所……14
ク　黒川化學工業所……16
　久保商店……12
　窯島プレス工業所……43
コ　後藤商店……6
サ　佐渡島西店……35
　佐久間パプコ工業株式會社……9
　笹岡家具裝飾店……28
シ　島貿易株式會社建材部……42
　霜寅材木店……11
ス　須賀商會……31
セ　政正合資會社……33
　清光社……12
タ　大洋組建材部……22
　タカラ商會……38
　ダンロップ護謨株式會社……中挿
ト　東洋リノリユーウム株式會社……17
　東洋工業株式會社コルク部……30
ナ　內外土木建築材料合資會社……29
　南滿鑛業株式會社……22
　中野鐵平石店……18
ニ　日本建築紙工株式會社……33
　日本ドアーチエツク製作所……41
　日本パイプ製造株式會社……26
　日本洋瓦株式會社……4
　西原衛生工業所……10
　西孫南店建築金物部……23
ノ　野澤幸三郎商店……5
ハ　汎建製作所……38
ヒ　日立エレベーター製作所……40
　ヒーロ特許工業所……3
　美素工業所……2
フ　福島合名會社……8
　福原商店大阪支店……36
　藤田庄藏商店……45
ヘ　ベニス工房……30
マ　マルエス工業株式會社……15
ミ　ミナト製作所……16
　三井物產株式會社……19
ヤ　矢橋大理石商店……20
　大和護謨製作所……13
　山本窯業商店……36
ユ　ユーニオントレーデングコンパニー……32
ヨ　横河橋梁製作所……25
　米本榮商店……20
ラ　ライトラバー工業合資會社……34
レ　玲光社(木內眞太郎)……8